岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第401集

柳沢（やなぎさわ）Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査

国土交通省東北地方整備局三陸国道工事事務所
㈶岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

柳沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これら先人の残した貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発に伴う社会資本の充実もまた重要な一施策であります。特にも高速道路網を初めとする道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところでもあります。

このような埋蔵文化財の保護・保存との調和も今日的な課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発に伴って止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査事業の実施に伴って、平成13年度に山田地区に所在する柳沢Ⅱ遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

遺跡は国道45号沿いに位置し、その道路は北は宮古、久慈方面、南は釜石、大船渡方面に通じる重要な路線として大きな役割をはたしています。

当遺跡は、中世には城館として、江戸時代には社地であることが明らかになりました。曲輪、土塁、土坑からは、縄文時代の土器、石器、陶磁器、江戸時代の銭貨、釘、炭化材が出土しており、周辺に存在する館跡との関連性や当時の社会状況を考える上での貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、考古学の研究に寄与するとともに、埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成にご協力とご支援を賜りました国土交通省東北地方整備局三陸国道工事事務所、山田町教育委員会をはじめとする関係各位、遺跡の発掘調査にご協力を頂いた地元山田町の方々に衷心より感謝申し上げます。

平成14年10月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　合　田　　武

例　言

1．本報告書は、岩手県下閉伊郡山田町山田第1地割11番15他に所在する柳沢Ⅱ遺跡の発掘調査の結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、岩手県教育委員会と国土交通省東北地方整備局三陸国道工事事務所との協議を経て、発掘調査を財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した緊急発掘調査である。

3．岩手県遺跡台帳に登載されている遺跡番号はＬＧ94－0079、発掘調査時の略号はＹＳⅡ－01である。

4．発掘調査面積は8,400㎡であり、発掘調査期間と調査担当者は以下のとおりである。

発掘調査期間	平成13年4月17日～7月31日	
調査担当者	文化財調査員	阿部　徹
	文化財調査員	佐藤　淳一
	期限付調査員	原　美津子

5．調査の室内整理期間と整理担当者は以下のとおりである。

室内整理期間	平成13年11月1日～平成14年3月31日
整理担当者	阿部　徹、佐藤　淳一

6．本報告書の執筆は、阿部　徹が担当した。

7．自然科学関連の分析鑑定は、次の方と機関に依頼した。（敬称略）

樹種鑑定 …… 早坂松次郎（木炭協会）

8．基準点測量、空中撮影、現況地形図の作成は次の機関に委託した。

基準点測量 …… 鈴木設計測量事務所

空中撮影 …… 東邦航空株式会社

現況地形図作成 …… 株式会社ハイマーテック

9．発掘調査や室内整理・報告書の執筆にあたり、次の方々ならびに機関からご指導・ご協力をいただいた。（敬称略）

山田町役場、山田町教育委員会（長岡　豊、川向　聖子、佐々木　健）

10．本遺跡から出土した遺物および調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管してある。

目　　次

序
例言

<本　文>

Ⅰ　調査に至る経過……3
Ⅱ　遺跡の位置と環境……3
　1　遺跡の位置と立地……3
　（1）位置と立地及び環境……3
　（2）基本層序……5
　2　歴史的環境……6
　（1）山田町の中世……6
　（2）山田町内の中世城館遺跡……7
　（3）柳沢Ⅱ遺跡の概要……9
Ⅲ　調査方法と室内整理……14
　1　野外調査の方法……14
　（1）調査区のグリッド設定……14
　（2）粗掘りと遺構検出・遺構精査と
　　遺物の取り上げ……15
　（3）写真撮影……15
　2　室内整理の方法……15
　（1）遺構……15
　（2）遺物……15
Ⅳ　検出遺構と出土遺物……17
　1　曲輪……17
　2　土坑・土塁……28
　3　切岸……28
　4　大杉神社（参道跡）……29
　5　出土遺物……31
　（1）出土した土器・陶器・石製品について…31
　（2）出土した貨幣について……31
　（3）出土した金属器・鉄滓について……31
Ⅴ　まとめ……40
　1　柳沢Ⅱ遺跡の年代観と性格……41
Ⅵ　分析・鑑定……41
　1　柳沢Ⅱ遺跡炭化材樹種……41
報告書抄録……73
職員名簿……74

<図　版>

第1図　岩手県における遺跡の位置図……1
第2図　遺跡の位置図……2
第3図　遺跡周辺の地形……4
第4図　土層柱状図……5
第5図　周辺の遺跡分布図……10
第6図　遺構配置図……13
第7図　グリッド配置図……14
第8図　縄張図……16
第9図　1号曲輪・1号土坑・1号土塁……18
第10図　2号曲輪……19
第11図　3号曲輪・4号曲輪……20
第12図　5号曲輪・6号曲輪（1）……22
第13図　6号曲輪（2）……24
第14図　7号曲輪……25
第15図　8号曲輪……26
第16図　9号曲輪……27

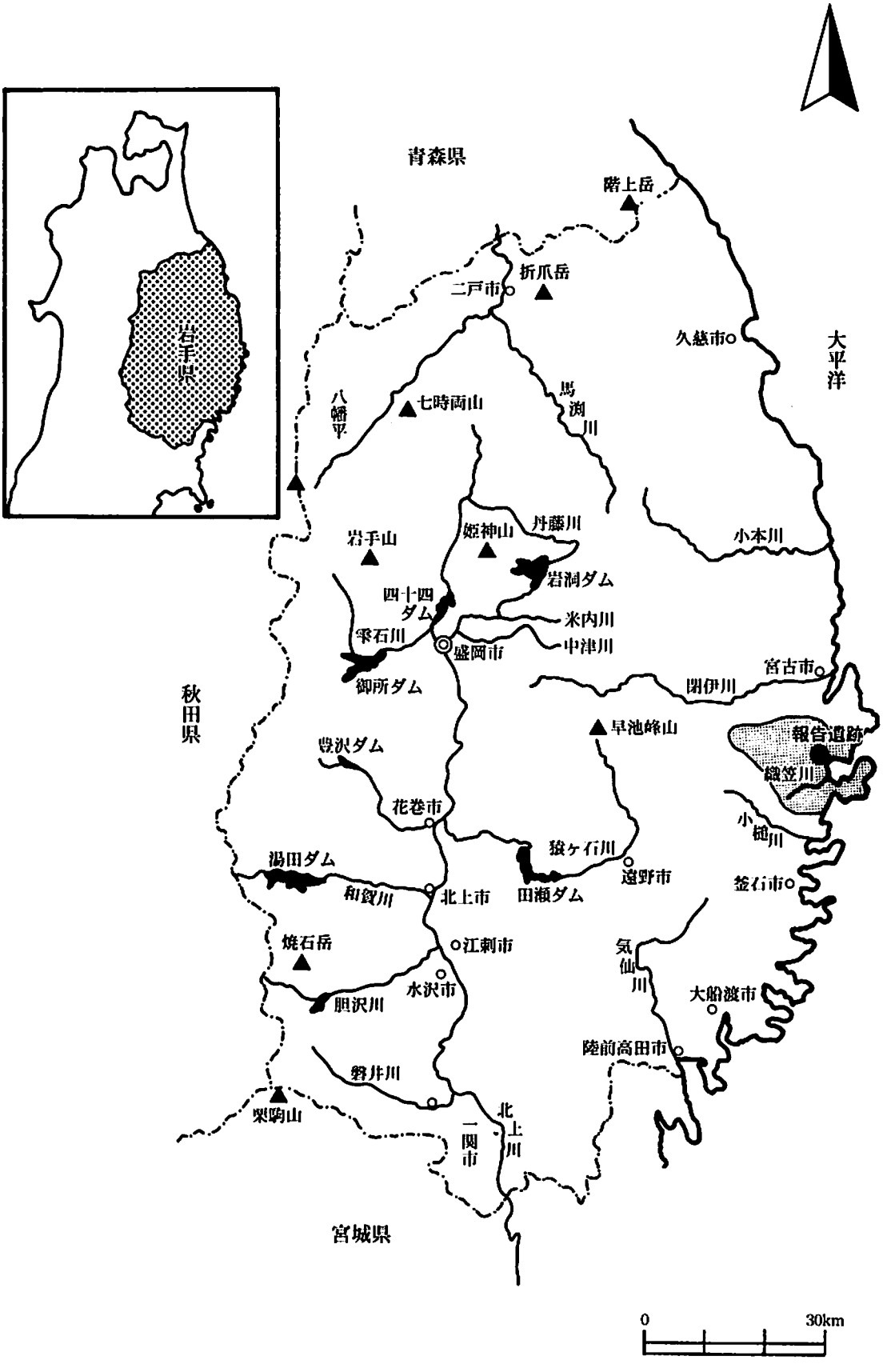
第17図　大杉神社（参道跡）……30
第18図　出土遺物１（土器・陶器・石臼）……33
第19図　出土遺物２（鉄製品１）……34
第20図　出土遺物３（鉄製品２）……35
第21図　出土遺物４（銭貨１）……36
第22図　出土遺物５（銭貨２）……37
第23図　出土遺物６（銭貨３）……38
第24図　出土遺物７（銭貨４）……39

＜写真図版＞

写真図版１　遺跡遠景……45
写真図版２　空中写真（１）……46
写真図版３　空中写真（２）……47
写真図版４　調査前風景……48
写真図版５　作業風景・２号切岸……49
写真図版６　東側斜面土塁……50
写真図版７　１号曲輪……51
写真図版８　２号曲輪……52
写真図版９　３号曲輪……53
写真図版10　４・５・６号曲輪（１）……54
写真図版11　４・５・６号曲輪（２）……55
写真図版12　４・５・６号曲輪（３）……56
写真図版13　７号曲輪……57
写真図版14　８号曲輪……58
写真図版15　９号曲輪・作業風景……59
写真図版16　１号土坑……60
写真図版17　遺物出土状況
・１号土塁・２号土塁……61
写真図版18　大杉神社参道跡（１）……62
写真図版19　大杉神社参道跡（２）……63
写真図版20　調査区外曲輪群（１）……64
写真図版21　調査区外曲輪群（２）……65
写真図版22　出土遺物１
（縄文土器・陶器・石臼・鉄製品１）……66
写真図版23　出土遺物２（鉄製品２）……67
写真図版24　出土遺物３（銭貨１）……68
写真図版25　出土遺物４（銭貨２）……69
写真図版26　出土遺物５（銭貨３）……70
写真図版27　出土遺物６（銭貨４）……71
写真図版28　出土遺物７（鉄滓、骨）……72

＜表＞

第１表　遺跡一覧表……11
第２表　土器観察表……33
第３表　陶器観察表……33
第４表　石製品観察表……33
第５表　金属器観察表（１）……34
第５表　金属器観察表（２）……35
第６表　銭貨観察表（１）……36
第６表　銭貨観察表（２）……37
第６表　銭貨観察表（３）……38
第６表　銭貨観察表（４）……39



第１図　岩手県における遺跡の位置図

1:25,000 陸中山田
500m
0
500
1000
1500
山田
沢田
柳沢
袴田
関谷
山田線
山田町
飯岡
大畑
細浦
跡浜
山田港
大沢川
大沢
新開地
川向
山谷
大沢山
かき・ほたて・ほや
大島
(オランダ島)
小島
女郎島
伝作鼻
弁財天島
上村

第２図　遺跡の位置図

Ⅰ　調査に至る経過

柳沢Ⅱ遺跡は、国道45号山田道路建設事業の施行に伴い、その事業区域内に存在することから緊急発掘調査を実施することとなったものである。

三陸縦貫自動車道は、宮城県仙台市～岩手県宮古市の約220kmを結ぶ一般国道の自動車専用道路であり昭和62年に指定された全国14,000kmの高規格幹線道路網の一部をなすものである。

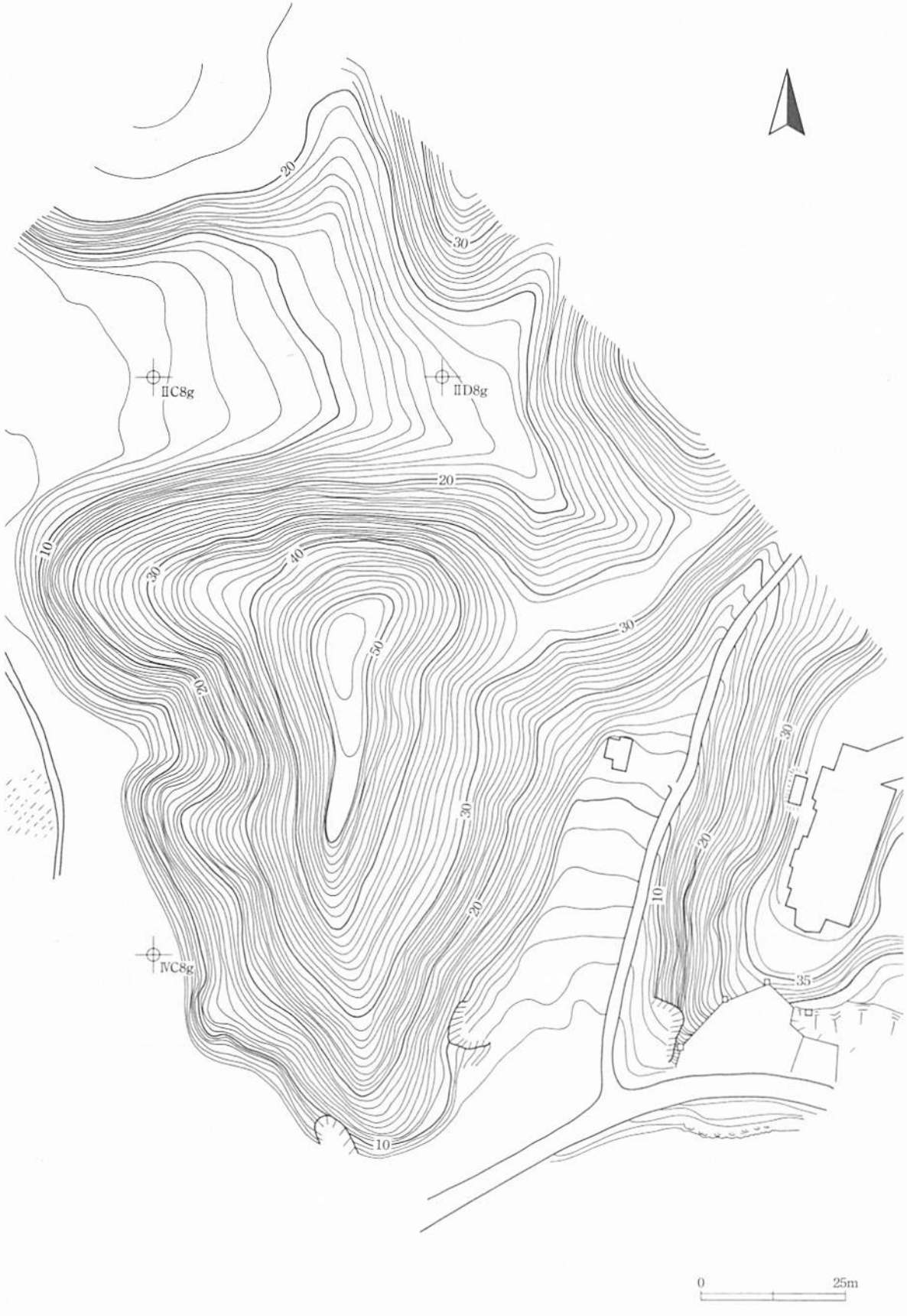
山田道路は、山田町関谷と船越の間7.8kmの区間である。一般国道45号山田町市街地の年々増大する交通需要に対応するため、山田バイパスとして昭和62年度に事業化したが、同年6月に「三陸縦貫自動車道」の一部に指定されたため、昭和63年度に南側延長部も合わせて新たに事業に着手したもので、現在、高規格幹線道路として事業の促進を図っているところである。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と立地

（1）位置と立地及び環境

当遺跡の所在する山田町は、岩手県最東端に接する鮭ヶ崎にも近く、地形図上では、国土地理院発行の5万分の1の地形図「土淵」「川井」「宮古」「鮭ヶ崎」「箱塚ヶ岳」「大槌」の図幅にまたがり、頂上では、東経141度57分、北緯39度28分に位置している。宮古から直線で南に約22kmの距離にあり、国立公園陸中海岸の中央部で、宮古市と釜石市のほぼ中間に位置する。北は宮古市、南西部は上閉伊郡大槌町、北西部は新里村・川井村に接し、東部は重茂半島と船越半島によって形成される山田湾・船越湾に接する。町の東西は約27km、南北は18kmある。北西、及び南西部は、北上山地からの支脈が延び、急峻な山岳地帯を形成、その支脈の間を荒川・豊間根川が流れ、合流して、津軽石川となって宮古湾に注いでいる。関口川・織笠川は山田湾に注いでいる。河川の源流地帯は、イヌブナの原生林が密生繁茂する。平野部は極めて少なく、山林・原野を合わせて山田町の面積の85%に達する。人口密度は、97.3人（昭和53）である。川の中・下流、河口の平地に田畑や集落が形成される。北部の豊間根・荒川は農業生産地、東部・東南部はリアス式海岸で、重茂半島・船越湾があり、海岸沿いの平地に集落を形成する。湾内においてはカキ・ホタテ・ノリ・ワカメなどの養殖漁業がさかんである。沖合は、親潮と黒潮が交差する日本最大の三陸漁場を形成し、スルメイカ、サンマ漁業の拠点である。交通は山田漁港近くの商店街を南北に国道45号とこれに平行するようにＪＲ山田線が延びている。船越半島は陸中海岸国立公園の中央に位置し、原生林の景観にすぐれ鳥獣類保護指定区である。また、タブの木の自生北限地で、県天然記念物に指定されている。気候は、海流の影響を受け暖冬涼夏で過ごしやすい。就業構造は、第1次産業が町経済の中心をなし、特に、水産業が中核であ



第３図　遺跡周辺の地形

る。昭和47年、国道45号が全面開通し、隣接市町村はもとより太平洋ベルト地帯への時間も大幅に短縮され、山田町の産業開発上大きな役割をはたしている。

明治元年、盛岡藩の白石転封に伴い、当町域の村々は松代藩取締となり、同2年江刺県、同4年盛岡県を経て同5年岩手県下となる。同9年上山田・下山田村が合併して山田村、織笠・轟木村が合併して織笠村が成立し、同12年村々は、東閉伊郡に所属。同22年市制町村制施行により山田・飯岡村が合併して山田町、豊間根・荒川・石峠村が合併して豊間根村が成立し、大沢・船越・織笠村はそれぞれ一村で存続した。同30年下閉伊郡所属となる。1955年（昭和30）旧山田町と織笠・船越・豊間根・大沢の4村が合併（人口24,604人）して現在の山田町が成立した。面積は、263.33㎢、人口は、24,154人（昭和40）・25,052人（昭和50）・21,214人（平成12）で、現在は矢巾町についで県内の町村で第4位である。

（2）基本層序

柳沢Ⅱ遺跡の調査範囲は、発掘調査時は笹薮でおおわれ、尾根南東側の斜面は杉の伐採跡となっている。調査区の頂上部分は、近世の大杉神社跡があり、参道を作ることで地形改変が行われている。参道は、左右に曲がりながら南側斜面から尾根伝いに続き、6号曲輪から頂上部までは、ほぼ直線的に延びている。調査範囲の西側から南側は急傾斜で、崖になっていて、3号曲輪、8号曲輪では切岸が見られた。頂上部には、近世の盛土の下層に、人工的に盛土していることが確認され、中世の遺構面が見つかっている。1号土坑は、現代のマツの切り株跡と見られている。曲輪は全体的に見て、南西側斜面に盛土確認されている。5号・6号曲輪は、現代の電柱の埋設に関わって曲輪の撹乱も見られた。

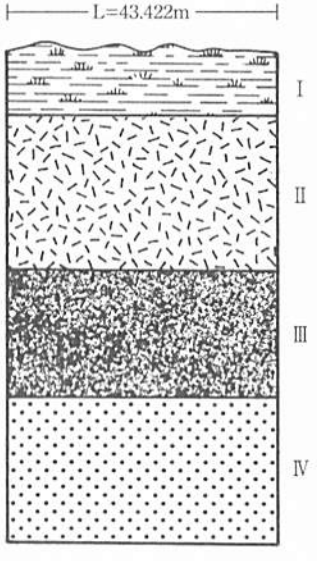
全体的な観点から見ると、基本層序は4層からなっている。標高35ｍ付近（補助点1）の基本土層を見ると、下記のⅠ層からⅣ層に大別される。

第Ⅰ層：7.5ＹＲ4/2
灰褐色土の植根表土で、層厚は3～20cmと薄くなっている。

第Ⅱ層：10ＹＲ3/3
暗褐色土で、層厚は0～50cmで近現代の盛土も見られる。

第Ⅲ層：10ＹＲ2/1
黒色土で、層厚は0～40cmで、中世の検出面である。

第Ⅳ層：2.5Ｙ8/3
淡黄色土（真砂）で、層厚は不明。風化した花崗岩で調査区の基盤層である。



第4図　土層柱状図

2　歴史的環境

（1）山田町の中世

鎌倉時代、源頼朝は奥州平泉の藤原氏平定後、戦功によって多くの御家人たちに奥羽の没収地を割いて新しい所領として分け与えた。岩手県全体をみれば奥州総奉行と呼ばれた葛西氏をはじめ、千葉・和賀・稗貫・河村・工藤・滴石・阿曽沼・南部氏などがあり、いずれも鎌倉幕府の御家人に系譜をもとめられる。下閉伊地方に居住したと考えられる豪族たちの名をひろって見ると、河南閉伊氏の系統と考えられる豪族には、田鎖・田代・赤前・根市・花輪・長沢・近内・腹帯・蟇目・茂市・刈屋・和井内・船越・大沢・川井・箱石・河内・夏屋・大川・浅内・高浜・山崎・荒川氏などがあり、河北閉伊氏の系統とみられる豪族には、千徳・近内・八木沢・津軽石・根井沢・江繁・小国・近能・黒田氏などがある。こうしてみると下閉伊地方の豪族・城館は、そのほとんどが閉伊氏にかかわるものであることがわかる。ただ、これらの豪族のすべてが室町・戦国時代に分立し、館を構築したものではなく、船越氏のように、南北朝時代すでに勢力をもっていたことに留意する必要がある。また、上記閉伊氏の系統に属さない豪族もあり、その中には豊間根氏などのように安倍氏に連なる系譜をもち、鎌倉時代まで遡りうる伝承を伝える豪族も存在していると述べている。（岩手県教育委員会a 1986：p 243）

源頼朝は、奥州合戦の功臣閉伊頼基を閉伊川の地頭とした。閉伊氏（佐々木氏）は最終的には閉伊川流域に定住することになるが、その途中一時、船越の地に留まったという。閉伊氏が船越にたどり着いた時の様子は、「閉伊の内、沼田（船越）と言える所へ流人となり候処に、元来その家高きとて、村々の諸氏思ひつき馳せあつまりけり。則ち、沼田に仮屋を立ち往生す。一番に来たる士、船越守護昆小三郎、百九十人にて来たり、二番目織笠守護田村八左衛門、八十一人にて来たり、三番大槌小槌両守護、五十八人にて来たり、四番金沢三吉、五十四人にて来たり、その他、諸士思ひ思ひに来て、すべて人数千七百五十九人集まる」と伝えられている（阿部家伝）。この一族中の何人かが残り、沼田の地を開発し、船越氏と称し、船越館を築城したという。船越田ノ浜には閉伊頼基の墓所や宝治元年（1247）創建といわれる荒神神社がある。また鎌倉末期、閉伊氏から分立した大沢氏は大沢河原（大沢）沿いの原野を拓き牧場の経営を始めたとされたと述べている。（岩手百科事典a 1978：p 1055）

船越の所領は南北朝時代には誰の知行地であったか、閉伊氏の治下であったか、阿曽沼氏の治下であったかさだかでない。しかし、海蔵寺の板碑より察するに有力なる土豪のいたことは間違いない。また豊間根『阿部家伝』に、「頼朝より三代目実朝の御代に佐々木太郎二男次郎二人、閉伊の内沼田といえる所へ流人となり下り候処に、元来その家高きとて、村々の諸氏集まりけり。則ち沼田に仮屋を立て住す。」と以下、上記記述の人数が集まる。沼田というのは、船越台地と半島部との間に出来た低湿地のことで、往時は、ここに多くの沼があってその沼べりを開田したことからこの名で呼ばれるようになったと思われる。佐々木（閉伊氏）のもとに集まったという土豪もほとんど船越を中心とした周辺の者たちである。閉伊氏は、鎌倉時代のはじめ気仙地方から点々と飛び石伝い北上して、最後に閉伊川流域に定住することになったのである。その途中、一時、この船越の地にも足を止めていた時代があるとされている。（宮古地方の中世史古城物語）

閉伊氏は、次に南北朝時代に船越館主なる有力な土豪阿曽沼氏と共に、北畠顕家の傘下として忠勤をはげみ後文中２年（1373）北畠顕成を招請、船越御所として庇護奉仕している。天文19年（1550）九戸政実の

叛乱のときはその討伐に船越党として四戸陣に参加して功績をあげている。慶長５年（1600）10月、和賀氏の残党、反乱につき船越党参陣している。このように船越の豪族は代がかわり世がかわっても、累代豪族として「知仁勇」の三徳の道を尽くしてきた。閉伊氏の祖、頼基を葬った地といわれている。（下閉伊郡誌）この神社の神殿の中には、「右に鎮西八郎為朝、左に閉伊陸奥守頼基二体あり、衣冠正しく通常人の大きさなる御木像にして実に人目を驚かし程の美麗なる御姿形にて、東奥の僻地には珍しい御尊像と拝し奉る。神社より一丘高く、海辺に南面せる約４坪の所に切り石にて柵をめぐらしその中に閉伊陸奥守頼基の心霊の碑あり。」とある。（黒森頭彰会報）

累代の豪族はそれぞれ三徳を備え、海の幸山の幸は豊かなれども、五穀は少ないが、隣村の貢納により十分と考えられ、北畠氏が難をこの地方に避けるには適していたのかもしれないと述べている。（山田町教育委員会a 1991：p 258～p 259）

14に余る津軽郡の文献を調査考証をしていくうちに、北畠氏は、閉伊郡船越から津軽郡浪岡に移行した事は事実と見る。特に、『郡中名字』（天文年間津軽郡）の中に重臣本参侍として、船越氏、大浦氏が見えるのは、浪岡と船越が深いかかわりをもつものとして意義深いものがある。船越地域として、北畠氏と係りのあるものには、船越御所跡、海蔵寺寺伝には、吉野朝時代船越御所の祈願所として山城嵯峨の大覚寺の月海山正覚寺と称する真言宗の寺院があった事、小田の御所に、吉野朝のころの哀愁漂う歌碑があったこと（今これはいずれに運び去られたかない）上館に古碑が現存しているが、文字は流れていて見えなくなっていると述べている。（岩手県教育委員会b 1991：p 261～p 262）

応永26年（1419）南部薩摩守政光からその子修理亮に宛てた文書の中に「八戸郷の内、その外、岩手の平館、山北の長野、淀河、へいの飯岡（閉伊の飯岡）この間の如く上をば修理之亮の計らいたるべく候」とあり、室町期の中ごろの飯岡は八戸南部氏の所領管理のための代官が飯岡氏であると言われる。永亮11年（1439）福士庄次郎安定は南部14代義正の時、閉伊郡の内、山田、飯岡、大沢、織笠の４か村を給せられた。これより家名を改め織笠と号したといわれる。保定は立神館に拠って大槌氏に備え、背後の飯岡館に一族をすえた。天正11年（1583）払川館主一戸行重が千徳館において誘殺された時、重臣石峠八郎、荒川佐助は討死した。安倍一族の末裔石峠八郎は石峠・豊間根両村、近江浪人佐々木（荒川）佐助は荒川村の領主であったとされていると述べている。（岩手百科事典b 1978：p 1055）

（2）山田町内の中世城館遺跡

当山田町内には中世城館が22箇所に存在が知られている。その中から５つの館を紹介しておきたい。

小田の御所　　下閉伊郡山田町大字船越

小田の御所は、船越半島の南西端、船越湾に突き出した標高約80ｍの丘陵上にあり、田の浜集落の南方約500ｍに位置する。自然地形を巧みに利用した要害度の高い館で、館の周囲の狭い山間はそのまま自然の堀の役割を果たしている。主郭の標高は、78.9ｍで、東西28ｍ、南北14ｍの楕円形をし、そのほぼ中央に８個の磯石が遺存している。二の郭は主格の前方北側に設けられ、南北約43ｍ、東西約32ｍの規模をもっている。二の郭は主郭と接する個所に土盛りした塁があり、10個の磯石と文化年間建立の二つの宝珠印塔が残されている。三の郭も二の郭前方北側に東西26ｍ、南北24ｍの規模で構築されている。これら階段状の三つの郭の周囲には広い腰廓が巡らされ、その北西部にも一つの宝珠印塔が建てられている。小田の御所は船越御所と同様、船越氏が北畠顕成一行庇護のために造ったものとして伝えられており、とりわけ戦

時に備えた臨時の館の機能をもっていたと考えられていると述べている。

船越御所　　下閉伊郡山田町大字船越10

船越御所は、船越東館とも呼ばれ、西方に所在する船越館（西館）と対峙している。ＪＲ山田線船越駅の東方約600ｍに位置し、船越半島のくびれに突き出した独立丘陵上に立地する。構造は、単純な単郭式で、主郭の標高は約15ｍであり、長軸約130ｍ、短軸約60ｍのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。南方の海側は急峻な崖となっており、東と北側の斜面を削り、東に二重、北に一重の腰郭をつくり出している。東側の低い腰部の南端には八幡宮が祀られ、杉や古木が立っている。館の北の平地は中館と呼ばれ、小森の中に熊野神社がある。また、この中館との境には空堀の跡と考えられる凹地が部分的に残されている。館の北西には海蔵寺があるが、旧地は、船越御所の祈願所で、月海山大覚寺と称する真言宗の寺院であったとされている。館主については明らかではないが、北畠顕成一行が船越に落ちて来た際、閉伊氏の一族である船越氏が一行を庇護するために築城したものと伝えられていると述べている。

曽伊館　　下閉伊郡山田町大字豊間根19

曽伊館は、ＪＲ山田線豊間根駅の南西約1.2kmに位置し、豊間根川と荒川川に挟まれた金田森の山塊から東に伸びた支脈、標高約130ｍの丘陵上に立地する。主郭は南北26ｍ、東西22ｍのほぼ円形を呈し、その中央にはかつての館神であったと考えられる曽伊八幡宮の小祠が祀られている。主郭の前方北側には南北41ｍ、東西約25ｍの二の郭があり、そのさらに前方には南北47ｍで最も長くなる三の郭が構築されている。なお、尾根なりに階段状に設けられた三つの郭のほぼ全体に狭い腰郭がめぐらされている。主郭の背後は深い空堀で切断され、その外側には、砦状の平場がつくられている。曽伊館の館主豊間根氏は、豊間根系図によれば安倍一族で、安倍貞任の弟正任の子安倍七郎孝任が初代とされている。本館は、その10代目安倍宣任が糠森の館から移って居住し、以来25代茂任まで拠点になっていたと伝えるが、その構造などからみて戦国時代頃の構築と考えられていると述べている。

立神館(織笠館)　　下閉伊郡山田町大字織笠16－23

立神館は織笠館とも呼ばれ、ＪＲ山田線織笠駅の西方1.2kmにある盛堂集落背後の丘陵上に構築されている。主郭は標高50ｍの最高部にあり、南北約60ｍ×東西約35ｍの長方形を呈する。主郭には腰郭がとりつき、一段低い前方東側には空堀で区画した二の郭が設けられている。二の郭は東西約60ｍ、南北約70ｍの長方形で、西の端の微高地に館神が祀られている。三の郭は二の郭の北東側に空堀で画してつくられ、南北約50ｍ、東西約40ｍの規模をもっている。二の郭・三の郭には尾根沿いに大きな腰郭が設けられ、そのくびれの部分に大手口が存在する。基部は広くて深い空堀で切って背後の通路を断っている。立神館の館主は織笠氏で、『系胤譜孝』の織笠氏の系譜によれば、永享11年（1439）に福士床次郎安定が南部義政より織笠村等を賜って織笠氏と称したとされている。なおこの織笠安定は、信仰心の厚い人であったといわれ、本館の近隣に竜泉寺を開祖したほか、先祖を祀るために八幡宮を建立していると述べている。

織笠館　　下閉伊郡山田町大字織笠4

織笠館は坊主館とも呼ばれ、ＪＲ山田線の織笠駅の西方約1kmに位置する。草木山の山塊が北西に突き出した丘陵上に立地し、北側の麓を織笠川が流れている。主郭は標高41ｍを測り、東西47.5ｍ、南北40ｍのほぼ円形を呈する。その前方西側には径23ｍほどの小規模な副郭が設けられ、主郭、副郭の全体に広い腰郭が巡らされている。また、副郭の前方西側や主郭南東、背後の丘陵に連なる尾根上には、さらに、二・三段の小規模な腰郭がとりつく。背後の丘陵とは広い空堀で切断されているが、今は新田集落に通じる道路

となっている。本館の麓を東流する織笠川は約1.2km下流で山田湾に注ぎ、館の全面には織笠川沿いの平野が広範囲に広がっていることから、漁業及び農業を管理するうえで格好の適地となっている。館主は田村氏といわれており、豊間根家の『阿部家伝』によれば、閉伊氏が鎌倉時代のはじめ船越に移住してきたとき、織笠守護田村八左衛門が81人の家来とともに挨拶に参上したと伝えられていると述べている。(岩手県教育委員会b 1986：p 247～p 249)

(3) 柳沢Ⅱ遺跡の概要

柳沢Ⅱ遺跡は、地形図から見ると、国道45号沿いに面し、道路向い側に、山田湾が広がっている。山田北小学校が西側2kmの所にあり、周辺は、住宅地が広がっている。遺跡の標高は、約52mで、遺跡周辺は、急勾配の山林と荒廃地であった。南側に延びる40mの尾根と、調査区外で北西側に40m延びる尾根がある。遺跡の現況は山林であるが、頂上部に祠があり、江戸時代の大杉神社（当地の鎮守）の旧社地を含んでおり、尾根伝いには、参道の跡が残っている。今回は、東端よりの8,400㎡について調査をした。南東側は、伐採された急斜面で、南から北西側にかけては、笹薮が広がっていた。

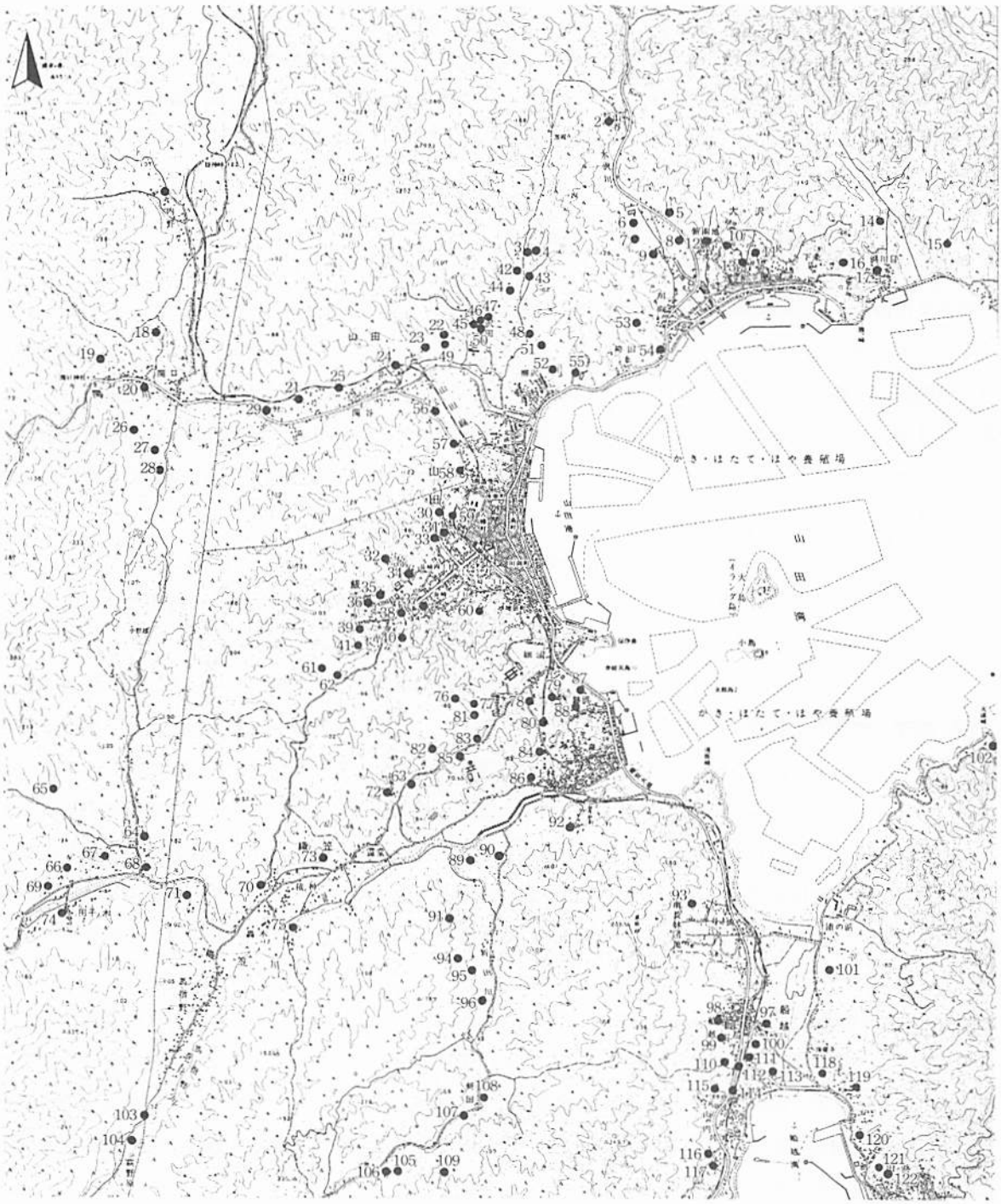
山田町で作成されている主に、北海道・東北に襲来した津波年表によると、貞観11年（896）から昭和48年（1973）までの間に記録に残されているだけでも過去46回の地震が起きており、地震地帯、津波の常習地帯であると述べている。(山田町教育委員会1982：p 825～p 835)

発掘調査により、土坑1、土塁1、曲輪9、切岸2の遺構が検出され、曲輪、土坑から、釘、寛永通寶の古銭、鉄滓、少数の土器破片が出土した。ほとんどの曲輪が、南東から西にかけて発見された。参道は地形改変をして作られていた。城館に伴う通路は今回の調査では、はっきりしなかった。虎口については、大杉神社への参道であった小道（調査区南側からのびている道）がもっとも有力である。この城館に至るルートは、南側の麓より登路し左右に曲がりながら、尾根中腹まで上がり北に進むコースと、調査区外の北東側より上るコースの可能性が考えられる。屋根北端部には堀切と曲輪も確認されたが、調査区外でもあり、曲輪等の遺構であると判断するまでには至らなかった。本遺跡の発掘調査により、近隣の遺跡との関係や歴史を紐解くうえで一つの手がかりになれば幸いである。

こうして、「柳沢Ⅱ遺跡」をみると、館主などの伝承が一切残っていないこと、発見された遺構がほとんどが曲輪であり縄文時代からの生活遺物が少ないこと、常に生活の根拠地としていた痕跡がないことなどの特徴がある。館主が支配関係により構築した城館というよりは、戦いの際に一時的に使用した居城の性格をもつ城館の姿を想定することができそうである。今後、近隣の沿革誌や、貴重な文献等が見つかれば更に新たな事実が明らかになると考えられる。

＜参考文献＞

鈴木恵治（1985）：「山田町」『日本地名大辞典』角川書店
水沼英三（1978）：「山田町」『岩手百科事典』岩手放送
山田町史編纂委員会（1991）：『山田町史　中巻』山田町教育委員会
山田町津波誌編纂委員会（1982）：『山田町津波誌』山田町教育委員会
岩手県教育委員会（1986）：「岩手県の城館跡」『岩手県中世城館分布調査報告書』岩手県教育委員会



第５図　周辺の遺跡分布図

第1表　遺跡一覧表

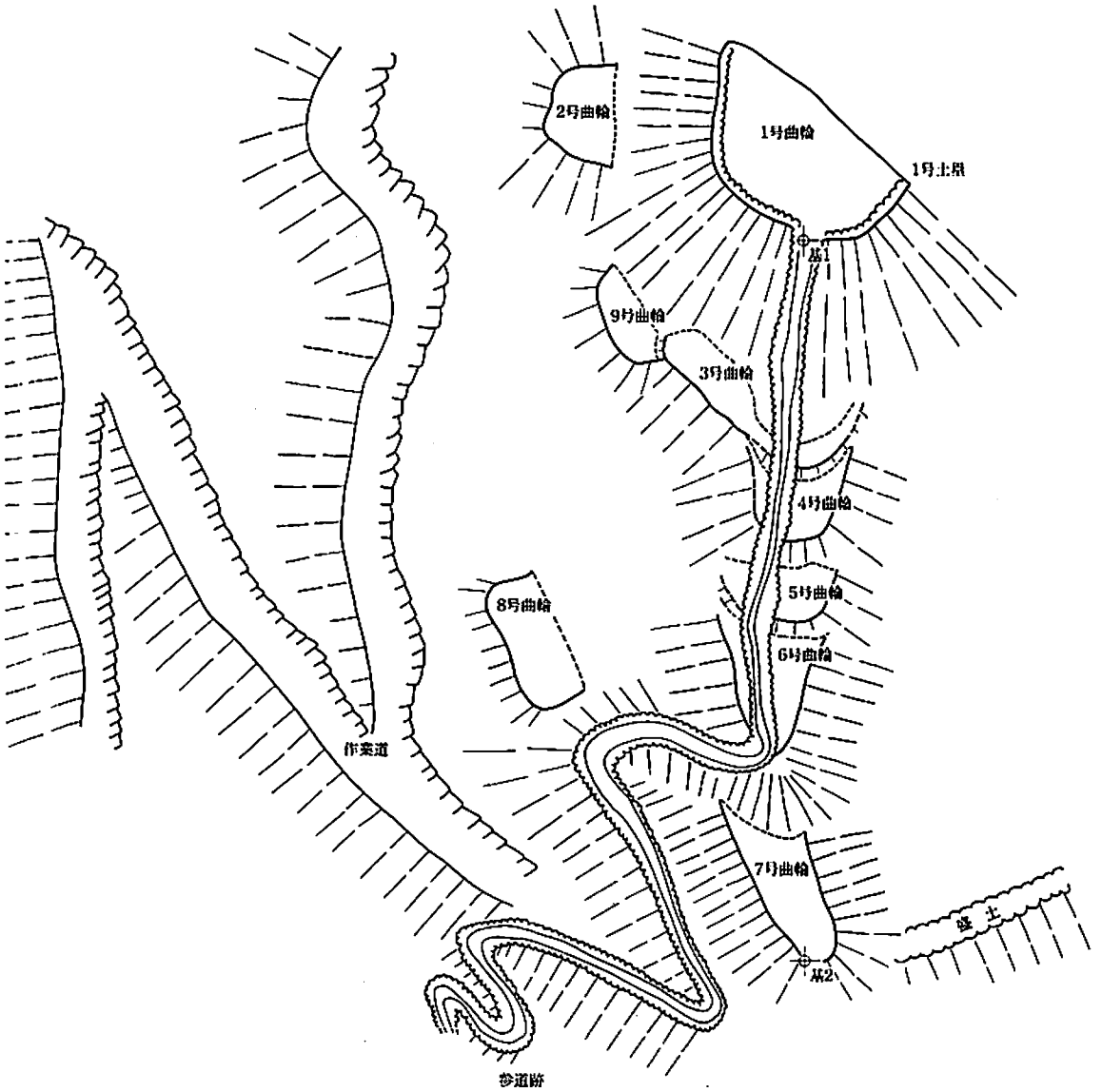
No.	遺跡名	種　別	時　代	遺　構　遺　物	所　在　地
1	内野	集落地・製鉄跡	縄文	縄文土器・土師器、羽口、鉄滓	山田町第20地割内野
2	山谷	散布地	縄文	縄文土器	大沢山谷
3	間木戸Ⅳ	集落跡・一里塚	縄文・近世	縄文土器・一里塚	山田第3地割
4	間木戸Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	山田第3地割
5	新開地Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大沢新開地
6	川向Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	大沢川向
7	川向Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大沢川向
8	新開地Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	大沢新開地
9	川向Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	大沢川向
10	大沢館	城館跡	中世	主郭、腰郭、二重・三重空堀	大沢第7地割
11	紅山B	集落跡	縄文	縄文土器	大沢紅山
12	新開地	散布地	縄文	縄文土器、石鏃	大沢新開地
13	紅山A	集落跡	縄文	縄文土器	大沢紅山
14	浜川目沢田Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器	大沢浜川目
15	多門	製鉄跡	縄文?	スラッグ	大沢浜川目
16	浜川目沢田Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器	大沢浜川目
17	浜川目沢田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（前・中・後・晩期）	大沢浜川目
18	関口Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器、土師器	山田第19地割関屋
19	関口Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	山田第19地割関屋
20	上野畑	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）	山田第19地割関屋
21	関谷Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	山田第17地割
22	房の沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	山田第14地割
23	房の沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	山田第14地割
24	房の沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田第14地割
25	関谷Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田第15地割
26	上野台Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、土師器、須恵器	山田第18地割関口
27	上野台Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田第18地割関口
28	上野台Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	山田第18地割関口
29	山田館	城館跡	中近世	主郭、二の郭、腰郭、空堀	山田第17地割
30	長崎Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第9地割
31	長崎Ⅲ	城館跡	中世		飯岡第8地割
32	小沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第7地割
33	長崎Ⅳ	城館跡	中世		飯岡第8地割
34	小沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第7地割
35	大畑Ⅱ	散布地	不明		飯岡第6地割
36	大畑Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第6地割
37	飯岡Ⅰ(飯岡館)	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀	飯岡第6地割
38	飯岡Ⅳ	散布地	縄文		飯岡第6地割
39	長野Ⅰ	散布地	縄文		飯岡第6地割
40	飯岡Ⅱ	城館跡	中世		飯岡第5地割
41	長野Ⅱ	散布地	縄文		飯岡第6地割
42	間木戸Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田第3地割
43	間木戸Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	山田第3地割
44	間木戸Ⅲ	散布地	縄文		山田第3地割
45	沢田Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器、土師器	山田第14地割
46	沢田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	山田第4地割
47	沢田Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	山田第4地割
48	柳沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	山田第1地割
49	房の沢Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	山田第14地割
50	沢田Ⅳ(沢田館)	散布地・城館跡	縄文・中世	縄文土器、主郭、腰郭、空堀	山田第4地割
51	柳沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	山田第1地割
52	柳沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	山田第1地割
53	袴田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	大沢袴田
54	袴田Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	大沢袴田
55	柳沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	山田第1地割
56	関谷Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第9地割
57	関谷Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	
58	八幡館	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀	八幡町第7地割
59	長崎Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	飯岡第10地割
60	飯岡Ⅲ	散布地	縄文		飯岡第2地割
61	赤松Ⅰ	散布地	縄文		飯岡第6地割
62	赤松Ⅱ	散布地	縄文		飯岡第6地割
63	龍泉寺一里塚	一里塚	近世		織笠礼堂
64	白石Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	織笠白石
65	田茂沢	集落跡	縄文	縄文土器、土師器、灰釉	織笠白石
66	日当Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	織笠白石
67	白石Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	織笠白石

No.	遺跡名	種別	時代	遺構遺物	所在地
68	白石Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	織笠白石
69	日当Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器、弥生土器、鉄滓	織笠白石
70	狼神	集落跡	縄文	縄文土器（前期）、土師器	織笠狼神
71	廻立	集落跡	縄文	縄文土器、鉄滓	織笠廻立
72	礼堂	散布地	縄文	縄文土器、	織笠礼堂
73	織笠館	城館跡	中世	主郭、二の郭、腰廓、空堀など	織笠礼堂
74	日陰	散布地	縄文	縄文土器	織笠礼堂
75	蟲木	集落跡	縄文	縄文土器（中期）、土師器	織笠蟲木
76	細浦Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、	織笠細浦
77	細浦Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、弥生土器、土師器	織笠細浦
78	細浦Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	織笠細浦
79	細浦Ⅵ	散布地	縄文	縄文土器	織笠細浦
80	細浦Ⅴ	散布地	縄文	縄文土器	織笠細浦
81	細浦Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	
82	後山Ⅲ	集落跡	縄文	縄文土器、弥生土器、土師器	織笠
83	後山Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器、土師器、石斧	織笠
84	上	集落跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器	織笠
85	後山Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	織笠細浦
86	上村	散布地	縄文	縄文土器	織笠
87	跡浜Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	織笠
88	跡浜Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	織笠
89	坊主山Ⅱ(一郭)	城館跡	中世	主郭、腰郭、堀	織笠新田
90	越田	城館跡・貝塚	縄文	縄文土器、土師器、貝類	織笠新田
91	坊主山Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器	織笠坊主山
92	草木	散布地	縄文	縄文土器	
93	長林	散布地	縄文	縄文土器	船越長林
94	根井沢Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器・土師器	織笠新田
95	根井沢Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	織笠新田
96	根井沢Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	織笠新田
97	船越館	城館跡	縄文	縄文土器、主郭、帯郭	織笠細浦
98	船越Ⅰ	散布地	縄文	縄文土器	船越
99	船越Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器	船越
100	湾台Ⅰ	集落跡	縄文	縄文土器	船越湾台
101	新道貝塚	貝塚	縄文	縄文土器、鉄滓	船越入江田
102	大浦崎	貝塚・生産跡	縄文	縄文土器、焼石、灰	大浦
103	荻野平Ⅰ	集落跡	縄文・弥生	縄文土器、弥生土器	織笠馬指野
104	荻野平Ⅱ	集落跡	縄文	縄文土器	織笠馬指野
105	天王平	集落跡	縄文	縄文土器、弥生土器、鉄滓	織笠新田
106	狼喰沢	散布地	縄文	縄文土器	織笠新田
107	山波	散布地	縄文	縄文土器（早・末期）	織笠新田
108	新田Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器、土師器	織笠新田
109	大石平	散布地	縄文	縄文土器（後期）、石斧	織笠新田
110	船越西館	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀、砦	船越第４地割
111	湾台Ⅱ	散布地	縄文	縄文土器（中・後期）	船越湾代
112	湾台Ⅲ	散布地	縄文	縄文土器	船越湾代
113	湾台Ⅳ	散布地	縄文	縄文土器	船越湾代
114	山ノ内Ⅰ	城館跡	中世		船越山の内
115	山ノ内Ⅱ	城館跡	縄文	縄文土器	船越山の内
116	山ノ内Ⅲ	城館跡	縄文	縄文土器	船越山の内
117	滝の沢	散布地	縄文	縄文土器	船越山の内
118	船越御所	城館跡	縄文	主郭、腰郭、空堀、砦	船越第 10 地割
119	岩ヶ沢	集落跡	縄文	縄文土器	船越岩ヶ沢
120	早川	集落跡	縄文	縄文土器	船越岩ヶ沢
121	田の浜館	城館跡	中世	主郭、腰郭、空堀、砦	船越第 12 地割
122	大洞貝塚	貝塚・集落跡	縄文	縄文土器	船越田の浜

＜参考文献＞

大道篤史　1998：『岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告集第 287 集　房の沢Ⅳ遺跡』

国土地理院　1987：『陸中山田１／25,000 地形図』（第５図周辺の遺跡分布図）



基1　X＝－57,770.000
　　Y＝　96,770.000
基2　X＝－57,830.000
　　Y＝　96,970.000

0　20m

第６図　遺構配置図

Ⅲ　調査方法と室内整理

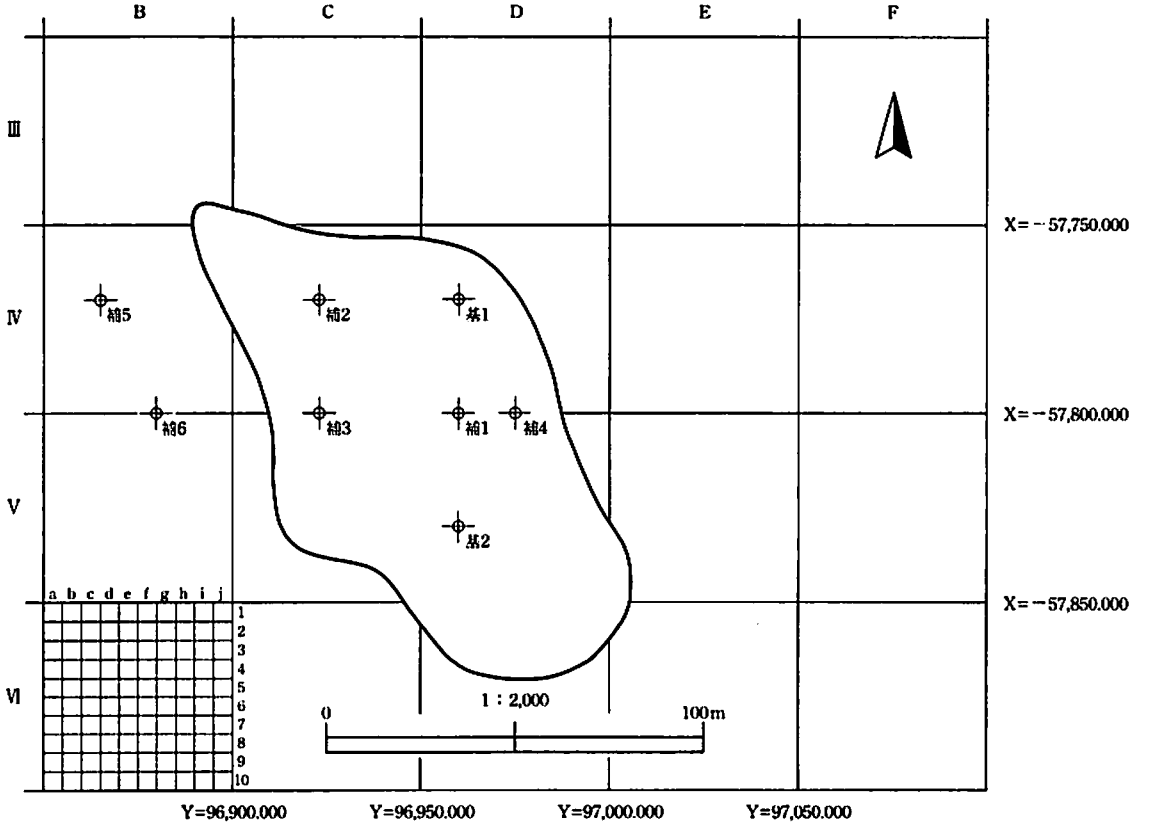
1　野外調査の方法

（1）調査区のグリッド設定

グリッドの設定にあたっては、平面直角座標第Ⅹ系を用いた。座標原点は、Ｘ＝－57,750.000、Ｙ＝＋96,875.000である。この座標原点から遺跡全体を一辺50ｍの大グリッドに区画し、原点から東方向へはアルファベッドの大文字Ａ～Ｙ、南方向へはⅠ～Ⅴの番号を付し、これを組み合わせて北西隅を基準点に、ⅣＣ、ⅤＤというように表示した。小グリッドは大グリッドを10等分して５×５ｍに区画し、東方向へはａ～ｊ、南方向へは１～10を付している。調査区の名称は、大区画と小区画の組み合わせでⅣＣ６ｇ、ⅤＤ２ｂというように呼称している。

各基準点の成果値と杭高（標高）は次の通りである。

基準点１	Ｘ＝－57,770.000	Ｙ＝＋96,970.000	Ｈ＝45.598ｍ
基準点２	Ｘ＝－57,830.000	Ｙ＝＋96,970.000	Ｈ＝27.813ｍ
補助点１	Ｘ＝－57,800.000	Ｙ＝＋96,970.000	Ｈ＝37.442ｍ
補助点２	Ｘ＝－57,770.000	Ｙ＝＋96,933.000	Ｈ＝27.454ｍ
補助点３	Ｘ＝－57,800.000	Ｙ＝＋96,933.000	Ｈ＝20.956ｍ
補助点４	Ｘ＝－57,800.000	Ｙ＝＋96,985.000	Ｈ＝28.999ｍ
補助点５	Ｘ＝－57,770.000	Ｙ＝＋96,875.000	Ｈ＝　2.078ｍ
補助点６	Ｘ＝－57,800.000	Ｙ＝＋96,891.000	Ｈ＝　2.104ｍ



第７図　グリッド配置図

（2）粗掘りと遺構検出・遺構精査と遺物の取り上げ

雑物撤去と刈り払い作業から開始し、トレンチによる試掘、遺構検出、精査の順に進めた。急斜面のため重機が使えなかった。表土が15cm前後の厚さで、粗堀から人力により調査を実施した。

検出された遺構は、曲輪は適宜土層観察用のベルトを残し、土坑は２分法を原則として精査を行い、必要に応じて適宜併用している。記録として、必要な図面および写真撮影は、精査の各段階において行っている。

調査時点での現況図の作成は写真測量より行い、各々の遺構は従来の簡易的な遣り方測量で行った。また、曲輪、土坑、土塁については、光波トランシットによる測量で平面図を作成した。実測図の縮尺は、断面図は１／20を基本として作成し、平面図は１／40を基本として作成した。遺跡周辺の地形図は１／1000、遺構配置図は１／200、縄張図は１／1000で作成した。

遺構内の出土遺物は、埋土の場合は、上部・下部に分けて取り上げ、床面及び床面直上の遺物は、必要に応じて番号を付し、写真撮影・図面作成後に取り上げた。

本遺跡は、Ⅳ～ⅤのＣ～Ｄのグリッドが中心の遺構である。

（3）写真撮影

野外調査では６×７cm判カメラ１台（モノクロ）と35mm判カメラ２台（モノクロ、カラー・リバーサル）を使用し、遺構・遺物の検出状況や出土状況を必要に応じて撮影している。他にポラロイドカメラ１台をメモ的な用途として使用した。撮影にあたっては、撮影状況を記録した「撮影カード」を事前に写し、整理時の混乱を防止した。また、調査終了時には、小型飛行機で空中から撮影した。

2　室内整理の方法

室内整理は遺物の水洗い・注記から開始し、遺物実測、拓本、遺構・遺物トレース、遺物の写真撮影、遺構・遺物図版、写真図版の順に作業を進めた。これらの作業と平行して遺物の計測、原稿の執筆、各種の鑑定・分析を行い報告書に掲載している。

（1）遺構

① 遺構図面は、点検後必要に応じて第２原図を作成した。各遺構の断面図、平面図を点検・トレースをした。また、参道跡の平面図は、遺構配置図を利用して第２原図を作成した。遺構図版は、曲輪、土坑、土塁のそれぞれに縮尺のスケールを付している。断面図中の石はＳで図示している。

② 本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は、平面直角座標第Ｘ系による座標北を示す。

③ 基本土層断面図には、ローマ数字を、遺構内の土層は算用数字を用いている。

（2）遺物

全体の遺物量が少ないことや小破片のものが多いことから、実測・拓本の必要のないものは写真撮影にとどめている。土器には、完形品や復元可能なものがなかったため適宜、拓影と断面実測を行った。石器およ

び石製品、鉄製品については出土したすべてを記載した。

掲載遺物の図版の縮尺率は、次の通りである。土製品、陶磁器、石製品、鉄製品が２／３、金属製品（釘、銭）は原寸大である。遺物の大小に応じては適宜縮尺を変え、図版ごとにスケールを付してある。

第８図　細張図

Ⅳ　検出遺構と出土遺物

本遺跡からは、遺構として曲輪９ヶ所、土坑１基、土塁跡１基、切岸２ヶ所、が検出された。遺物は曲輪、土坑から、釘、寛永通寶の古銭、鉄滓、少数の土器、陶磁器破片、石臼が出土した。

１　曲輪

尾根上に連続して階段状に９箇所確認している。尾根上部の平坦は、北東側の高い部分の土を削り南西側斜面に盛土を施して作られ、規模は20×30ｍである。特に１号、３号、４号、５号、６号、７号曲輪は、南東側に広く、大杉神社への参道は、７号曲輪を除き、これらの曲輪を南北に横断する様に作られている。

１号曲輪（第９図、写真図版７、22、23、26、28）

＜位置＞ 調査区ⅣＤ１ａ～ⅣＤ５ｅグリッド、標高45.598ｍ付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約19.5ｍ、短軸10.5ｍ、面積約102.375㎡で、南側尾根頂上付近である。近世の盛土、中世の盛土、自然堆積の順に層が重なっている。切り出し、盛土の状況から、曲輪北東側を削って平坦とし、その土を南西側に盛った結果、このような平坦地がつくられたものと思われる。自然地形では、幅10ｍ程度であったと考えられるが、削平盛土の結果、幅約20ｍ程度にまで広がっている。断面観察により、近世の盛土の下層に、人工的に盛土していることが確認されるため、中世の遺構と判断した。

＜埋土＞ 切り出し部は、表土（腐葉土）直下に真砂の層。盛土上部は、近世の盛土層の下に真砂の基盤層が見られる。

＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（無背銭46）、釘（７～18）、十手（19）、鉄滓（67、68）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが時期の特定はできない。

２号曲輪（第10図、写真図版８、24、26、27、28）

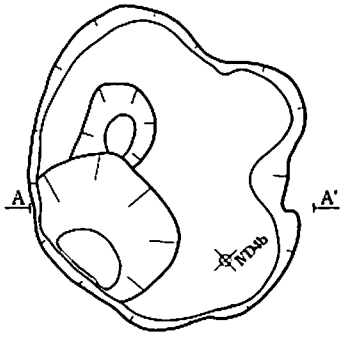
＜位置＞ 調査区ⅣＣ１ｇ～ⅣＣ３ｉグリッド、標高38.098ｍ付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約９ｍ、短軸4.5ｍ、面積約40.5㎡で、１号曲輪より約7.5ｍ程西に下がった所である。平面形は、半円状をなしていて、柵列等は確認していない。整地の状況から判断して、自然地形を利用して、若干の盛土を行うことにより、平坦地を作ったものと考えられる。

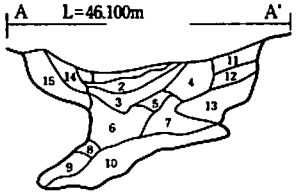
＜埋土＞ 表面は褐色がかっていて、盛土を行い整地したと考えられる部分は、黒褐色と灰白色の混合土でⅡ層の下に確認される。若干の炭化物（粒径中～大）がみられる。

＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（元の字入り24、文の字入り29～30、無背銭47～59）、縄文時代の深鉢の口縁部の破片（２）が第Ⅱ層から、哺乳類の動物の骨（69）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。



1号土坑平面

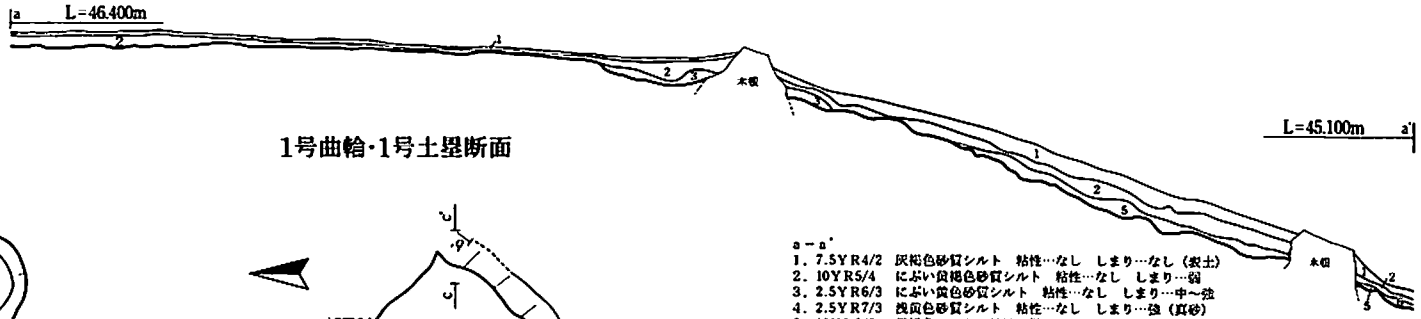


1号土坑断面

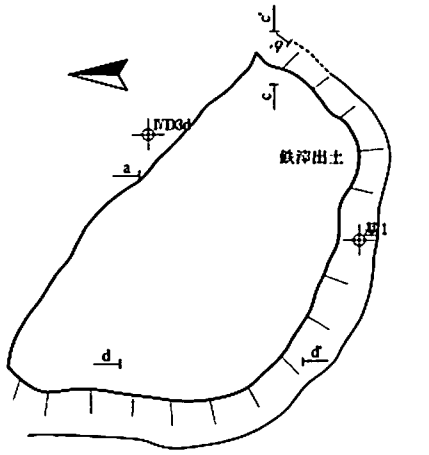
0　3m

A－A'
1．5YR3/2　黒褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
2．10YR4/6　褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
3．10YR4/4　褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
　炭化物粒径小1.1%未満
4．10YR4/4　褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱　炭化物
5．10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
　炭化物　黄褐色土粒含む
6．10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
7．10YR3/3　暗褐色シルト主体に炭化物粒、灰白色土粒が混入する
8．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱
9．10YR5/3　にぶい黄褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
10．10YR2/3　暗褐色シルト　粘性…弱　しまり…弱～中
11．2.5Y7/4　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中（盛土）
12．10YR2/1　黒色シルトと2.5YR7/4浅黄色砂質シルトの混合土
　粘性…なし　しまり…中
13．10YR2/1　黒色シルトと10YR4/6褐色粘土質シルトの混合土
　粘性…弱　しまり…中
14．2.5Y6/4　にぶい黄色シルト　粘性…なし　しまり…弱
15．2.5Y7/3　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…強
　黄褐色炭粒小～中20%

1号曲輪・1号土塁断面

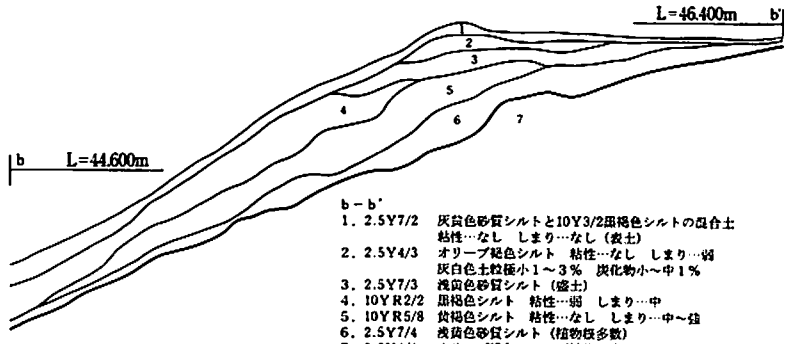


a－a'
1．7.5YR4/2　灰褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…なし（表土）
2．10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
3．2.5YR6/3　にぶい黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中～強
4．2.5YR7/3　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…強（真砂）
5．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱
6．10YR3/3　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱

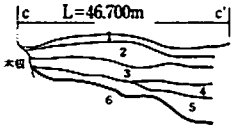


1号曲輪・1号土塁平面

0　12m

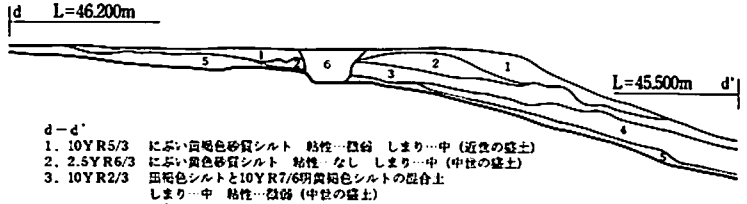


b－b'
1．2.5Y7/2　灰黄色砂質シルトと10Y3/2黒褐色シルトの混合土
　粘性…なし　しまり…なし（表土）
2．2.5Y4/3　オリーブ褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
　灰白色土粒径小1～3%　炭化物小～中1%
3．2.5Y7/3　浅黄色砂質シルト（盛土）
4．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性…弱　しまり…中
5．10YR5/8　黄褐色シルト　粘性…なし　しまり…中～強
6．2.5Y7/4　浅黄色砂質シルト（植物根多数）
7．2.5Y4/4　オリーブ褐色シルト（植物根多数）



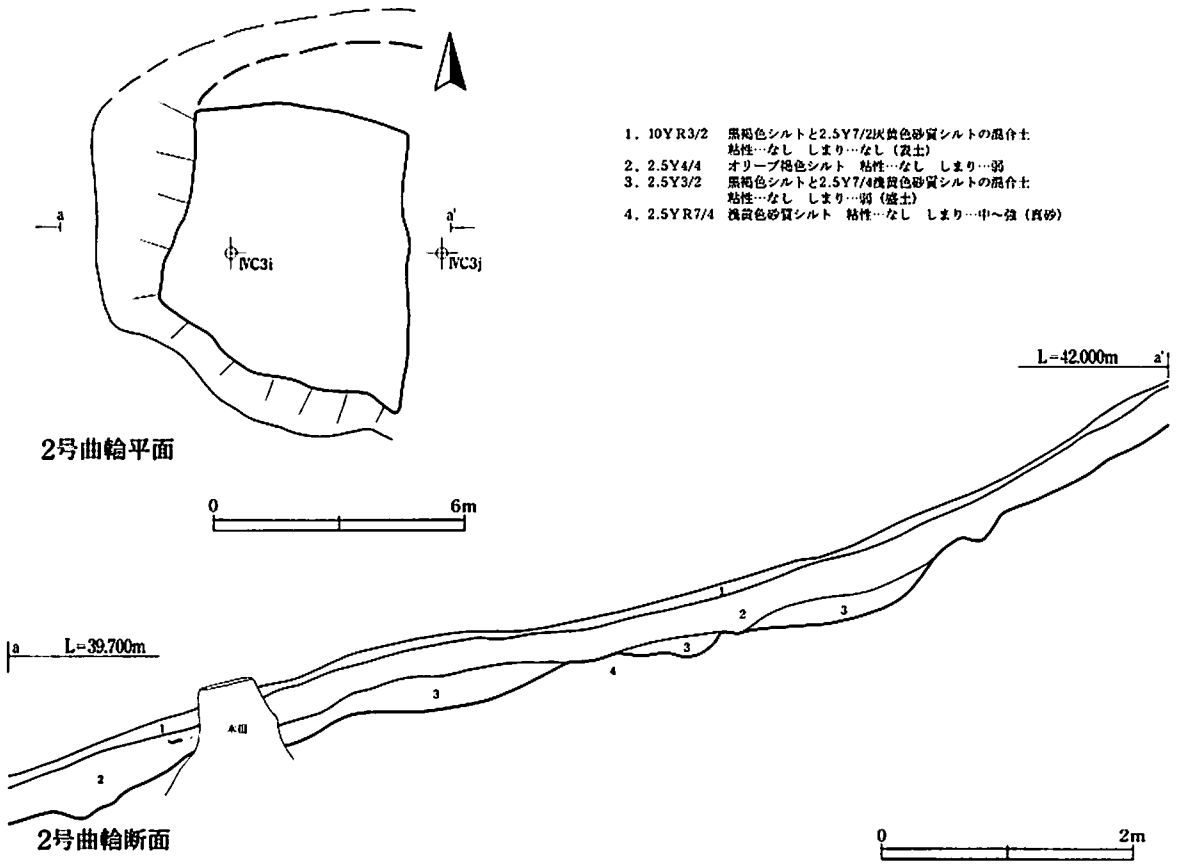
1号曲輪・1号土塁（東端部）断面

c－c'
1．7.5YR3/2　黒褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱～中
3．10YR3/4　暗黒褐色シルト
4．2.5Y7/4　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱～中（盛土）
5．7.5YR3/1　黒褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱
6．2.5Y7/3　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中～強（基盤層）



d－d'
1．10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性…微弱　しまり…中（近世の盛土）
2．2.5YR6/3　にぶい黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中（中世の盛土）
3．10YR2/3　黒褐色シルトと10YR7/6明黄褐色シルトの混合土
　しまり…中　粘性…微弱（中世の盛土）
4．10YR2/1　黒色シルト　粘性…微弱　しまり…中
5．10YR6/6　明黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…強（真砂による基盤層）
6．10YR5/3　にぶい黄砂質シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱　黄褐色粒中～大1%

0　3m



第10図　2号曲輪

3号曲輪（第11図、写真図版9、27）

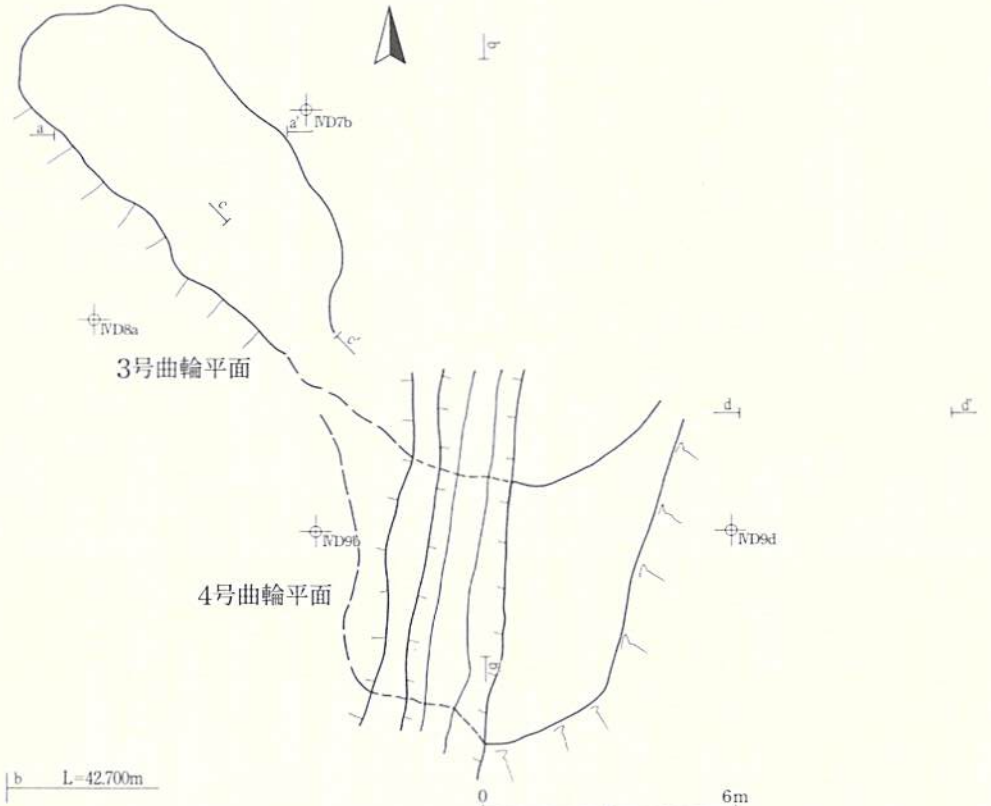
＜位置＞ 調査区ⅣC5i～ⅣD7cグリッド、標高40.598m付近

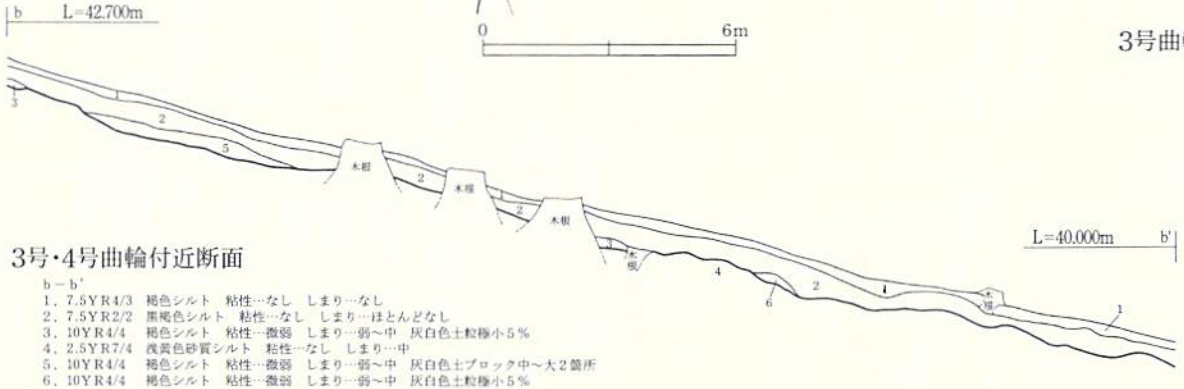
＜規模・形態＞ 規模は、長軸約19.5m、短軸9m、面積約87.75㎡で、1号曲輪より約10m程南に下がった所である。参道を挟んで東西に広がっている。1号曲輪直下部分で、黄褐色土層を切り出し、曲輪部分の主に南西側に盛土していることが確認された。切り出した斜面は、傾斜をさらに増し、切岸（状）をなしている。平坦部は、尾根部を通り、東側斜面にまで続いている。2号曲輪、9号曲輪とほぼ同一レベルであり、これらを合わせて、帯曲輪的様相をみせている。

＜埋土＞ 南西側斜面部分は、1号曲輪直下において、黄褐色土を主体とする地山基盤層を形成している。粘土質層ではないが他の区域と比べ東側斜面部分では、灰白色と黒褐色の混合土が盛土層となっている。層序に関しては、基本的に他とかわりない。

＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（無背銭60～63）が出土している。

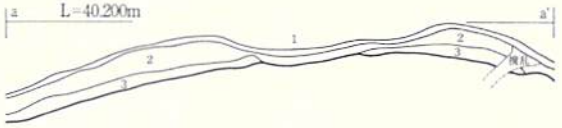
＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。





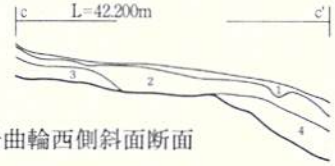
3号・4号曲輪付近断面

b－b'
1．7.5YR4/3　褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2．7.5YR2/2　黒褐色シルト　粘性…なし　しまり…ほとんどなし
3．10YR4/4　褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱～中　灰白色土粒極小5％
4．2.5YR7/4　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中
5．10YR4/4　褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱～中　灰白色土ブロック中～大2箇所
6．10YR4/4　褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱～中　灰白色土粒極小5％



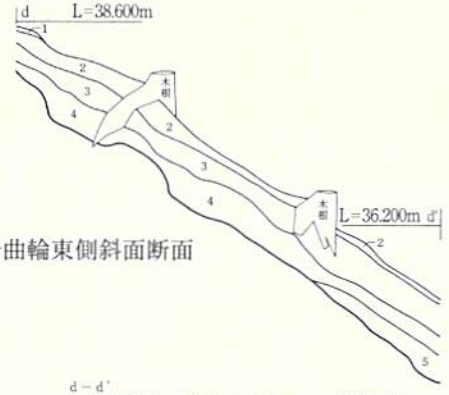
3号曲輪WE断面

a－a'
1．10YR3/3　褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2．2.5Y3/2　黒褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱
3．2.5Y4/3　オリーブ褐色砂質シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱（盛土）



3号曲輪西側斜面断面

c－c'
1．7.5YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし（表土）
2．2.5Y2/2　オリーブ褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱
3．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱～中
4．10YR4/6　褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱



3号曲輪東側斜面断面

d－d'
1．7.5YR4/3　褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性…なし　しまり…ほとんどなし
3．10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
4．2.5YR4/4　オリーブ褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱
5．2.5Y3/2　黒褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱

0　3m

４号曲輪（第 11 図、写真図版 10、11、12、24、27）

＜位置＞ 調査区ⅣＤ７ａ～ⅣＤ９ｃグリッド、標高 39.598 ｍ付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約 7.5 ｍ、短軸約６ｍ、面積約 45㎡で、３号曲輪の直下にあり、参道を挟んでやや東側に多く広がっている。真砂の層直下の混合土層は盛土かと思われ、尾根に沿って広がっていて幅は約５ｍである。南側の平坦部は神社の参道を作る際に、地形改変を受けている可能性が高い。３号曲輪直下にあり、曲輪がほぼ連続しているような状況でもあるため、４号曲輪と合わせて１つの曲輪としてとらえることもできる。

＜埋土＞ Ⅱ層の下に盛土・整地層と思われる層が見られ、尾根筋に細長く広がっている。真砂の層の直下に、黒褐色と灰白色の混合土層が薄く乗っている。

＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（文の文字入り 31、無背銭 64）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

５号曲輪（第 12 図、写真図版 10、11、12）

＜位置＞ 調査区ⅣＤ 10 ｂ～ＶＤ１ｃグリッド、標高 34.442 ｍ付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約９ｍ、短軸約 4.5 ｍ、面積約 40.5㎡で、３・４号曲輪より一段低い所にあり、参道を挟み東側に多く広がっている。真砂の層は、幅約５ｍ、長さ５ｍ、先端部（南端）は、近・現代の電柱埋設により切り落され、正確な規模は分からない。また、南西側も、近世の参道によって破壊を受けていると思われる。３・４号曲輪より一段低い所に形成されている。ほぼ平坦で傾斜は殆ど無い。南側と西側が、それぞれ、電柱埋設と参道建設により地形改変を受けており、曲輪の正確な規模は、把握できなかった。

＜埋土＞ Ⅱ層の下に、真砂の基盤層が確認された。削平により平坦地を形成したものと思われる。真砂の層は、上部（１～４号曲輪）に比べて、若干黄色が濃い。

＜出土状況＞ 電柱の跡と思われる穴が２つ見られる。

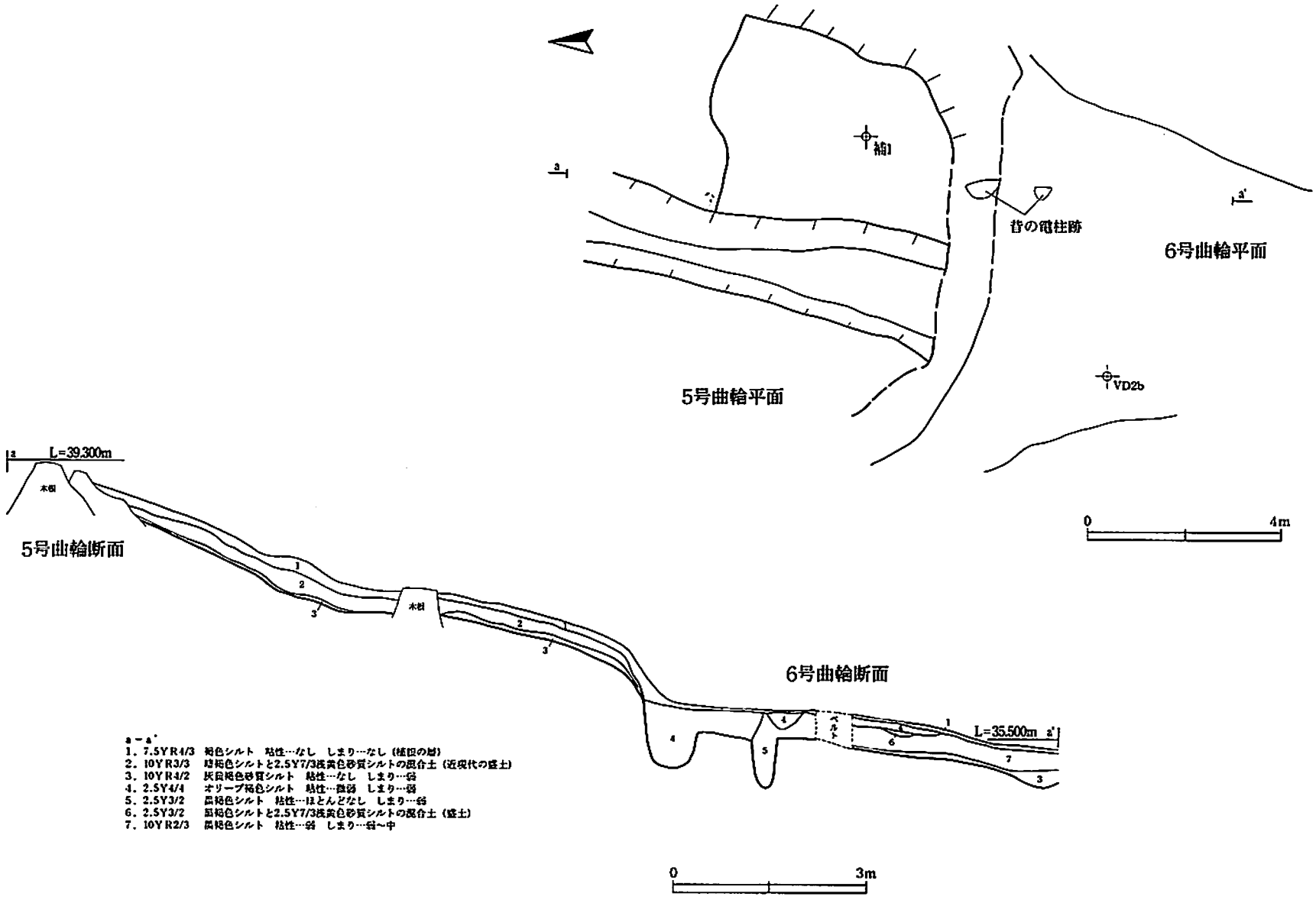
＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

６号曲輪（第 12、13 図、写図版 10、11、12）

＜位置＞ 調査区ⅥＤ１ａ～ＶＤ３ａグリッド、標高 32.942 ｍ付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約 10.5 ｍ、短軸約 4.5 ｍ、面積約 47.25㎡で、５号曲輪の直下に参道を挟み、広がっている。遺構は、尾根のみならず、斜面側にまで（若干ではあるが）まわり込んでいる。削った土を南側に盛り、曲輪を形成している。参道や電柱埋設に伴い、かなりの土が動かされているため、遺構の正確な規模は把握しかねるが、斜面側にも若干回り込むことが予想される。他の曲輪と同様、西側部分はこの参道により削り取られている。さらに、近現代と思われる電柱埋設痕により、曲輪自体が削平をかなり受けている。断面観察から、東側尾根筋より土を削り、西側に向かって盛土を行い整地した模様がうかがえる。東側は、やや盛り上がり、若干土塁状をなしている。もともと複雑な地形（中央付近やや凹む）を埋める形で、曲輪を普請したものではないかと考えられる。東側を削り、西側へ土を盛ってつくっていたと思われる。

＜埋土＞ 電柱が埋設されていた面であり、撹乱層が主体となる。電柱痕に褐色系の撹乱土が埋まり、そ



第12図　5号曲輪・6号曲輪（1）

の上部灰白色の真砂の撹乱層が薄く乗っている。曲輪は、切り出し部と盛土部により構成される。基本的には、削った土を南側に盛っている。遺構南端部は、近世もしくは、近・現代の盛土がされている。参道に伴うものと考えられる。

＜出土状況＞ 遺構南端側からは電柱埋設にかかわるアンカーがでてきており、この部分の撹乱もあり、断面も複雑である。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

７号曲輪（第14図、写真図版13）

＜位置＞ 調査区ＶＤ３ａ～ＶＤ５ｃグリッド、標高27.813ｍ付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約15ｍ、短軸約３ｍ、面積約45㎡で、６号曲輪より約６ｍほど直下の部分で、東部断面は切岸状になっている。尾根南端の７号曲輪は、参道から離れている。ここからも、近・現代と思われるアンカーが出てきており撹乱をうけている。

＜埋土＞ 曲輪中央付近は盛土層で、南端側は撹乱もあり、複雑である。

＜出土状況＞ 近・現代と思われるアンカーがでてきており、撹乱をうけている。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

８号曲輪（第15図、写真図版14、22）

＜位置＞ 調査区ⅣＣ９ｇ～ＶＣ１ｉグリッド、標高32.45ｍ付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約10.5ｍ、短軸4.5ｍ、面積約47.25㎡で、６号曲輪の東側約15ｍ付近で、８号曲輪の後ろは切岸になっている。切り出した土により盛土した部分を８号曲輪、切った部分は、２号切岸とした。断面図から判断して人為的痕跡が確認されることから曲輪であるが、他の曲輪との連携（犬走り、武者走り）と考えると、付近にそのような遺構がみられない。「孤立した曲輪」となっている。

＜埋土＞ 斜面側を削り、その土を盛って平坦部を作り上げている。斜面部は、Ⅱ層下がそのまま基盤層となる。盛土部分は、Ⅱ層下から平坦になるところで確認され、黒色～黒褐色土で黄褐色土粒が混入する。

＜出土状況＞ 石臼（５）が検出面から出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

９号曲輪（第16図、写真図版15、27）

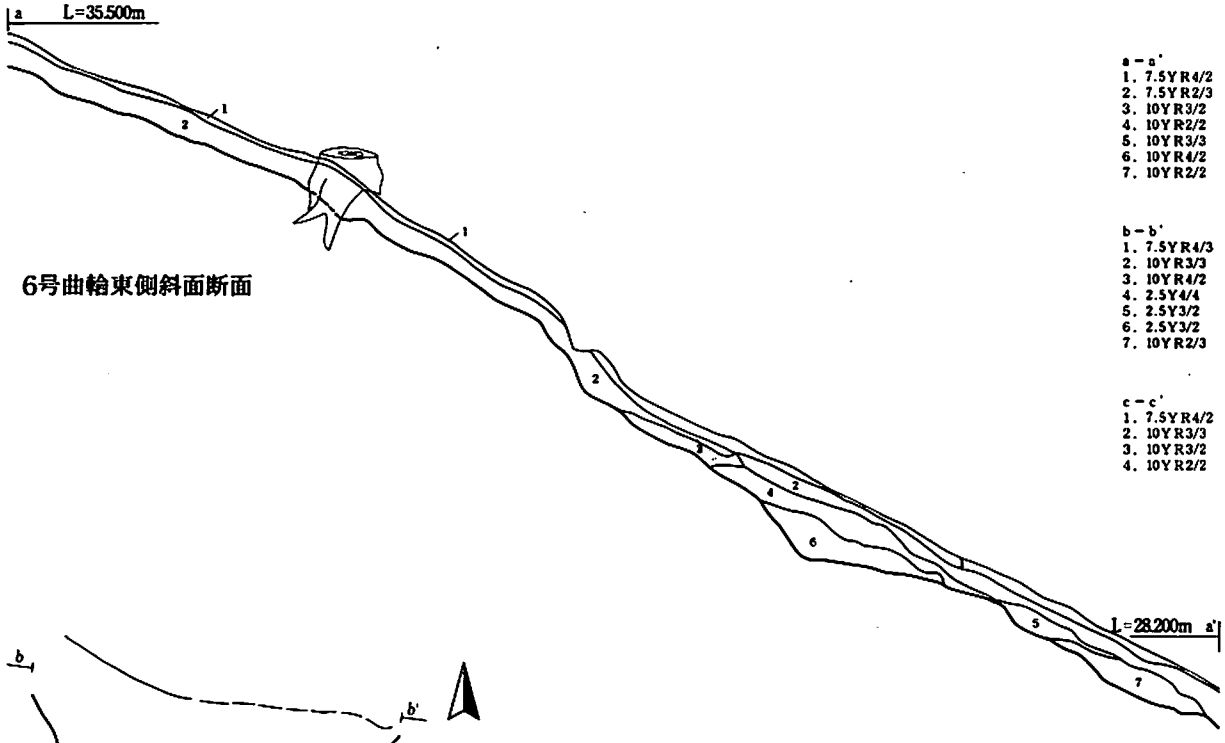
＜位置＞ 調査区ⅥＣ５ｉ～ⅥＣ７ｉグリッド、標高40.398ｍ付近

＜規模・形態＞ 規模は、長軸約7.5ｍ、短軸約３ｍ、面積約22.5㎡で、３号曲輪すぐ東隣にある。２号、８号とほぼ同一レベルで、帯曲輪的様相を呈している。

＜埋土＞ 暗褐色が主体である。層序に関しては他と変わりはない。

＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（無背銭65）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

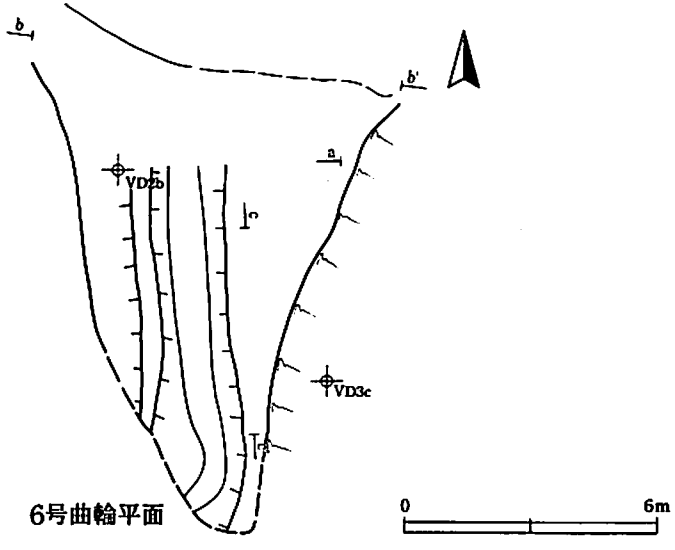


6号曲輪東側斜面断面

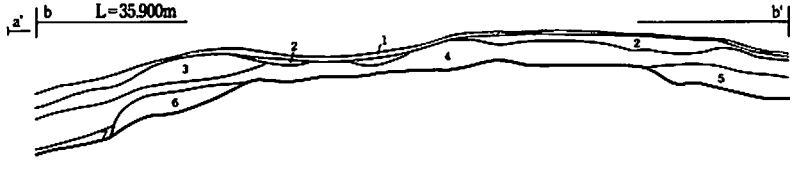
a－a'
1．7.5YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2．7.5YR2/3　極暗褐色シルト　粘性…微弱　しまり…ほとんどなし
3．10YR3/2　黒褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱～中
4．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性…弱　しまり…中
5．10YR3/3　暗褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中
6．10YR4/2　灰黄褐砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱～中
7．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性…弱　しまり…中

b－b'
1．7.5YR4/3　褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2．10YR3/3　暗褐色シルトと2.5Y7/3浅黄色砂質シルトとの混合土（近現代の盛土）
3．10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
4．2.5Y4/4　オリーブ褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱
5．2.5Y3/2　黒褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱
6．2.5Y3/2　黒褐色シルトと2.5Y7/3浅黄色砂質シルトの混合土（盛土）
7．10YR2/3　黒褐色シルト　粘性…弱　しまり…弱～中

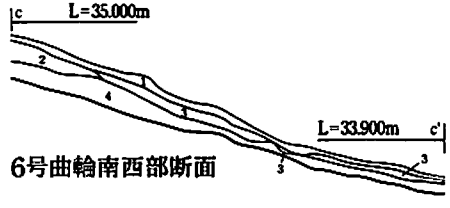
c－c'
1．7.5YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし（表土）
2．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱
3．10YR3/2　黒褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
4．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱～中



6号曲輪平面



6号曲輪WE断面

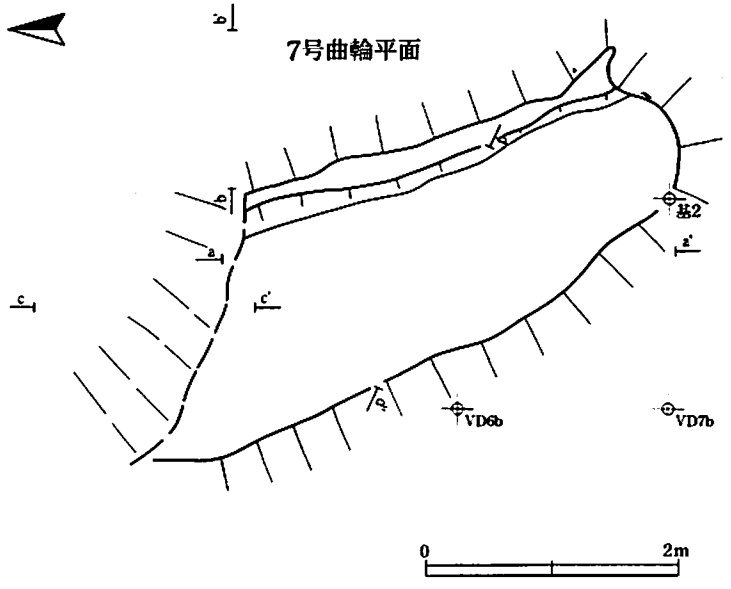


6号曲輪南西部断面

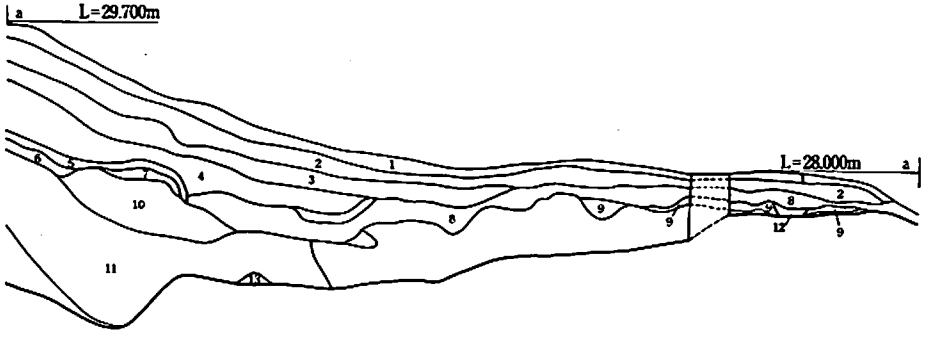
0　3m

第13図　6号曲輪（2）

7号曲輪平面

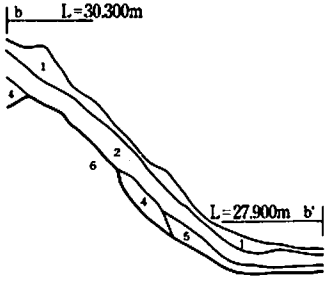


7号曲輪断面



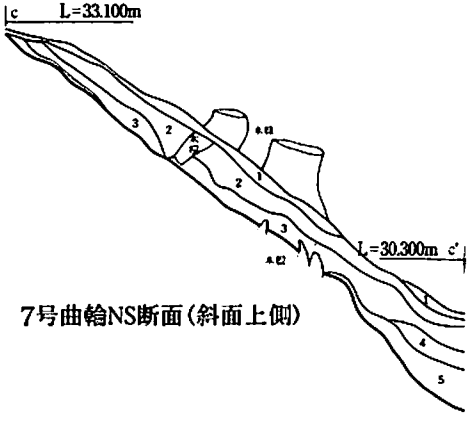
a－a'
1. 7.5YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし（表土）
2. 2.5Y7/3　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱～中
3. 2.5Y7/4　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱～中　灰白色土ブロック（2.5Y8/2）大～極大50%以上（盛土）
4. 2.5Y7/4　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱～中　灰白色土ブロック（2.5Y8/2）大～極大50%以上（盛土）
5. 2.5Y5/3　黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
6. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱～中　灰白色土ブロックが板状に混入
7. 10YR2/3　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…中
8. 2.5Y3/1　黒褐色砂質シルト　粘性…微弱　しまり…中
9. 2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中（盛土）
10. 2.5Y3/2　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…中　灰白色土粒小～中1～3%
11. 2.5Y4/2　暗灰黄色砂質シルト　粘性…微弱　しまり…中　灰白色土粒及びブロック5%
12. 2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱～中（9層より暗い堆め戻し?）
13. 2.5Y8/3　淡黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…強（基盤層）

7号曲輪WE断面（切岸状部分）

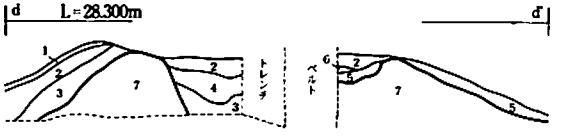


b－b'
1. 7.5YR5/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
3. 10YR6/3　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中
4. 10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
5. 10YR4/4　褐色シルト　粘性…微弱　しまり…中～強
6. 2.5Y7/3　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中～強（基盤層）

7号曲輪NS断面（斜面上側）

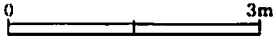


c－c'
1. 7.5YR5/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2. 10YR3/3　暗褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
3. 10YR6/3　にぶい黄橙砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
4. 10YR5/3　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱
5. 2.5Y7/3　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中
2.5Y8/3淡黄色土ブロック中～大50%混入

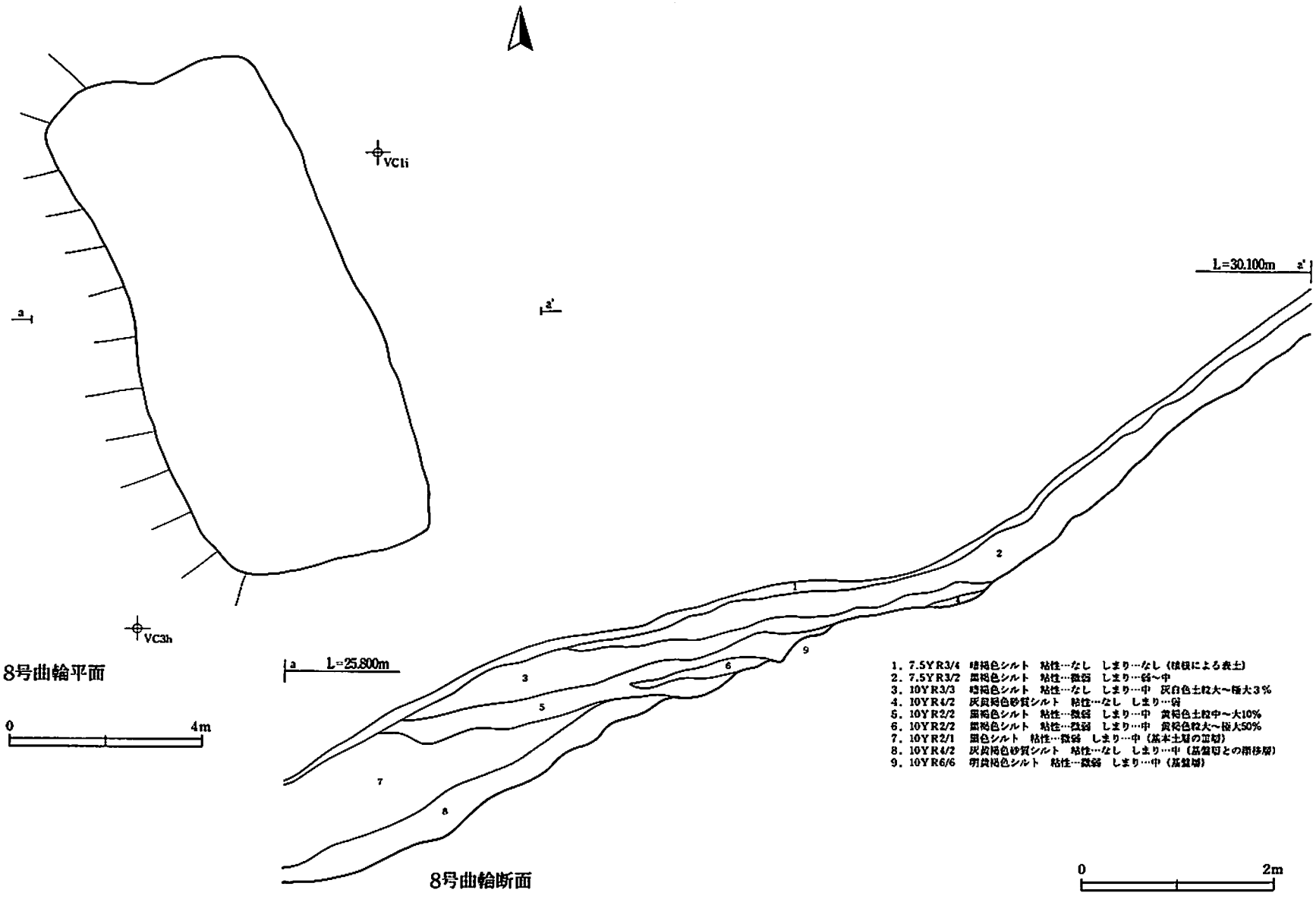


7号曲輪WE断面

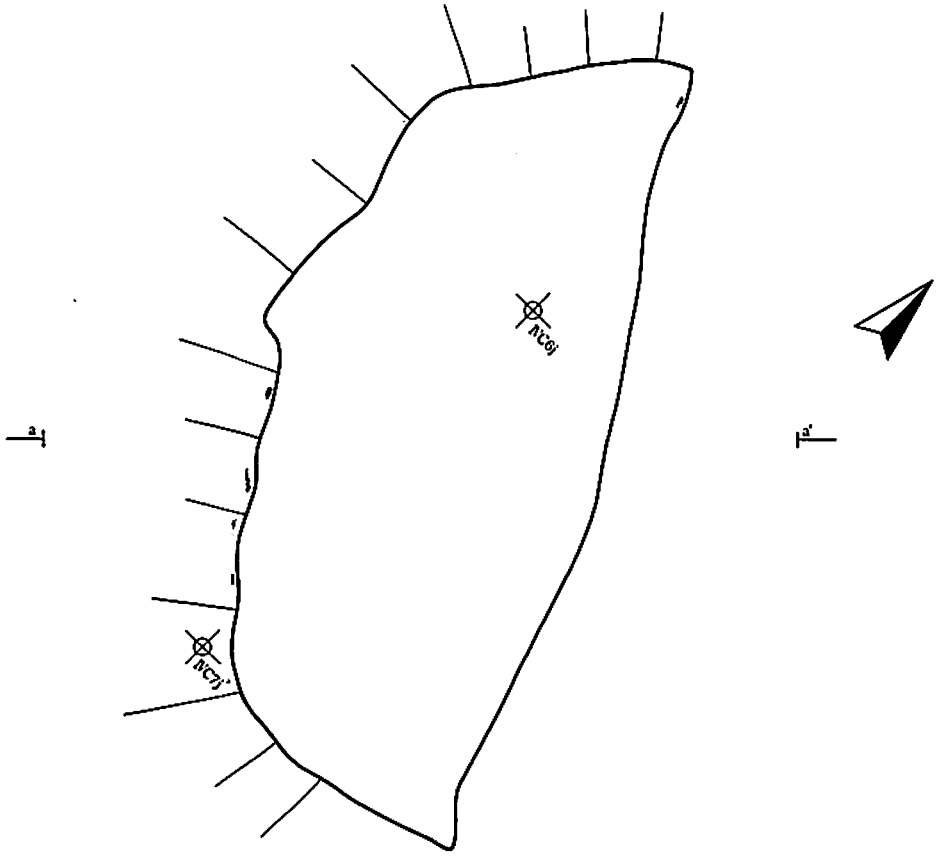
d－d'
1. 7.5YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし（表土）
2. 7.5YR2/2　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱～中
3. 7.5YR2/1　黒色シルト　粘性…微弱　しまり…弱～中
4. 2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト　粘性…なし　しまり…中　灰白色土粒極小が混入
5. 2.5Y3/2　黒褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中（盛土）
6. 2.5Y3/1　黒褐色砂質シルト　粘性…微弱　しまり…中
7. 2.5Y8/3　淡黄色斑に質シルト　粘性…なし　しまり…強（基盤層）



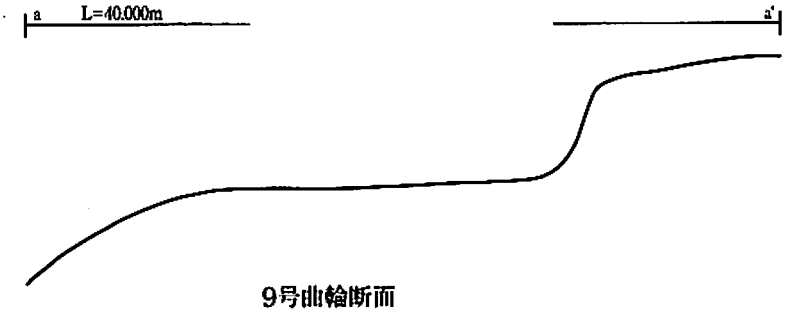
第15図　8号曲輪



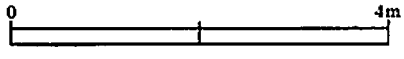
1．7.5YR3/4　暗褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし（根根による表土）
2．7.5YR3/2　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱～中
3．10YR3/3　暗褐色シルト　粘性…なし　しまり…中　灰白色土粒大～極大3％
4．10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
5．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…中　黄褐色土粒中～大10％
6．10YR2/2　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…中　黄褐色粒大～極大50％
7．10YR2/1　黒色シルト　粘性…微弱　しまり…中（基本土層の第Ⅱ層）
8．10YR4/2　灰黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中（基盤層との漸移層）
9．10YR6/6　明黄褐色シルト　粘性…微弱　しまり…中（基盤層）



9号曲輪平面



9号曲輪断面



第16図　9号曲輪

2　土坑・土塁

1号土坑（第9図、写真図版16、24、25）

＜位置＞ ⅣD3aグリッド中央付近

＜規模・形態＞ 規模は、直径約3m、深さ2mで、1号曲輪の東端にある。断面はフラスコ状をなし、一見すると、縄文時代の土坑に見える。よく観察すると、壁の張り出しは、覆土が埋まる過程で、中央部の凹みに向かって、地すべり状に移動したものであることが判明した。覆土は褐色土主体であり、中世城館の盛土を切ってつくられていることから、少なくても中世より新しい近世以降のものである。平面形は、ほぼ円形基調をなしている。一部やや不整な箇所があり、上端に関しては、土層（覆土）の滑り込みによると思われている大きなプランの南西端に最も低くなる部分が見られる。覆土中～下部より寛永通寶数枚、釘と思われる鉄製品が数点出土した。覆土等の観察状況、平面形等から考えて、具体的な用途・機能については不明であるが、松の根の掘削跡であることがわかった。

＜埋土＞ 土坑付近は新しく2層、3層が混ざり合う部分が見られる。

＜出土状況＞ 寛永通寶の銭（元の字入り21～23、文の字入り25～26、無背銭32～34）が出土している。

＜時期＞ 近・現代と思われる。

1号土塁（第9図、写真図版17、22、24、25）

＜位置＞ ⅣD1a～ⅣD3cグリッドの南東側付近

＜規模・形態＞ 規模は、切り出しによりつくられたと考えられる区域では、表土（腐葉土）すぐ下に、地山基盤層（真砂）が確認されるのに対し、盛土による整地がおこなわれたと考えられる地域では、真砂の上に乗る黒褐色土層の上に中世の盛土がある。その上面の近世部分については、端部を盛り上げ、土塁状として平場の周辺に巡らされている。

＜埋土＞ 中世の盛土面よりもさらに、一段高くなっている。（真砂と黒褐色土の混合土と思われる）炭化物（小～中）が混入する。

＜出土状況＞ 盛土中から寛永通寶（文の字入り27～28、無背銭35～45）が、磁器破片（4）、釘（6、11）が出土している。

＜時期＞ 中世と思われるが、時期の特定はできない。

3　切岸

尾根頂部の1号曲輪直下と、調査区中央部付近の8号曲輪で確認されている。防御施設として人工的に作られた切岸は、山の斜面を垂直に切り取って壁を作り外敵の侵入を防ぐために作られている。南西側の急傾斜を利用して作られている。

4　大杉神社（参道跡）

参道を上がり頂上部分にかつて存在した大杉神社については、次のような資料がある。

所在地　山田町北浜町　祭神　天手力雄命　例祭　9月16日

＜由来＞ 天明年間（1781）当地に漂浪し来る一修験者と漁民との感情の衝突があり、修験者は撲殺され湾内の大島に葬られた。そのため里人は彼を島の防と称した。そのためか不漁続きとなり、集落の住民はたたりであると考え、怨霊を弔慰するため柳沢の山頂に一祠堂を建立した。ついで、ここに漁の神網場大杉の心霊を奉祀し大杉神社と称した。嘉永年間（1848）現在の場所に移し、祀った。柳沢山頂の祠堂に納められている棟札には次のように記され述べられている。（山田町教育委員会 1991：p 704～p 705）

天下太平国家安穏五穀成就
天神万民豊楽当村産子繁昌
奉上棟大杉大明神社再興造築成就之修
地神棟大守公御武運長久
海上安全大漁満足
神主大久保伊賀芳春
　大久保日向潟謹

頭主頂世話人
　安倍多兵ェ次光　関谷三右門光栄
網師飯岡大右ェ門春光　白土保左ェ門安恭
祓清賜　沢田敬四郎　湊や小太郎
網氏木下善太郎　小槌や周助
嘉永二己酉年六月二六日

このことから江戸時代後期のものであることがわかる。現在は、棟札に書かれてある字も見づらく、よくわからないが、形だけは残っている。付近には銭も出土しており、近隣の人達は大漁を祈願してお参りをしたものと思われる。

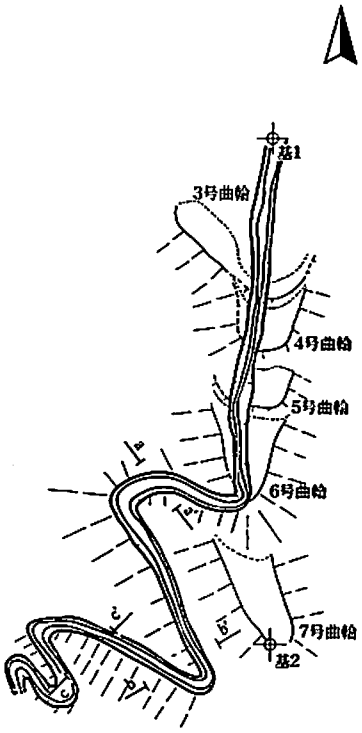
遺構（第17図、写真図版22、27）

＜位置＞ ＶＤ９ｇ～ⅣＤ５ｃ

＜規模・形態＞ 3～6号曲輪の尾根伝いを地形改変して道を作り、6号曲輪下部からは、南西よりに左右に曲がりながら作られている。

＜出土状況＞ 縄文時代の深鉢の破片（1）地文（ＲＬ）が第Ⅲ層下から、Ⅲの破片（3）が1号曲輪の直下の参道跡トレンチのⅡ層下部から、寛永通寶の銭（無背銭66）が出土している。

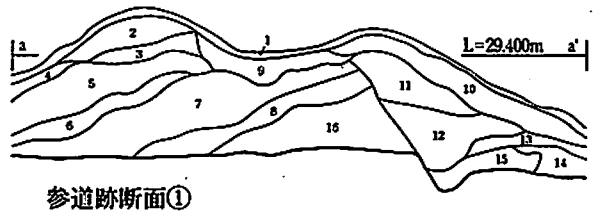
＜時期＞ 江戸時代と思われるが、時期の特定はできない。



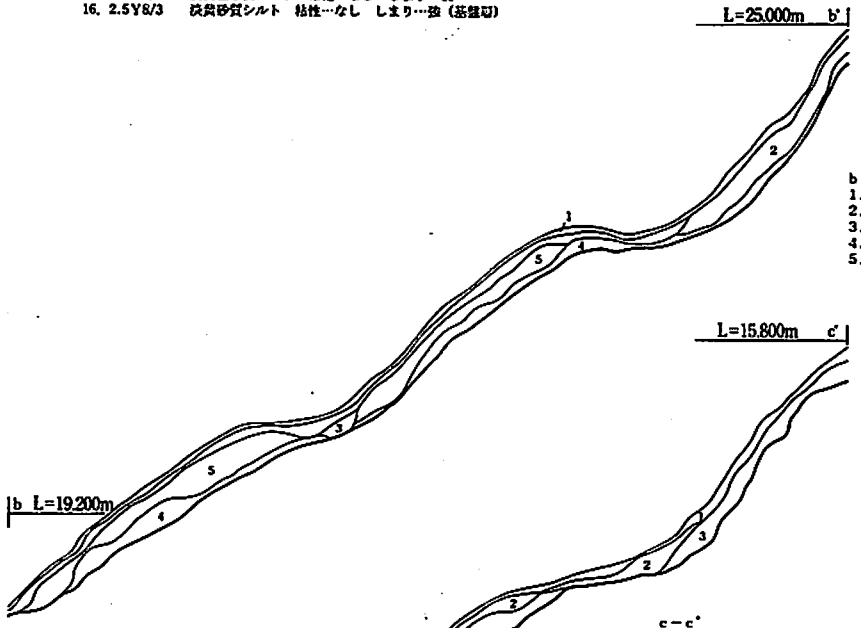
参道跡平面

0　30m

a－a'
1. 7.5YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2. 2.5Y7/4　　浅黄色砂質シルト角レキ含む　粘性…なし　しまり…弱（盛土）
3. 10YR3/3　暗褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱（盛土）
4. 10YR3/2　黒褐色シルト　粘性…微弱　しまり…弱
5. 10YR2/1　黒色シルト　粘性…微弱　しまり…弱～中（基本土層のⅡ層）
6. 10YR4/4　褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…中
7. 10YR5/6　黄褐色シルト　粘性…微弱　しまり…中
8. 2.5Y7/4　　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…中～強
9. 10YR3/4　暗褐色シルト　粘性…弱　しまり…中
10. 10YR4/2　灰褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…弱～中
11. 2.5Y4/3　　オリーブ褐色砂質シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…中
12. 10YR7/4　にぶい黄橙砂質シルト　粘性…なし　しまり…中
13. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性…ほとんどなし　しまり…中
14. 10YR7/6　明黄褐色シルト　粘性…なし　しまり…中
15. 2.5Y7/4　　浅黄色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
16. 2.5Y8/3　　淡黄砂質シルト　粘性…なし　しまり…強（基盤層）

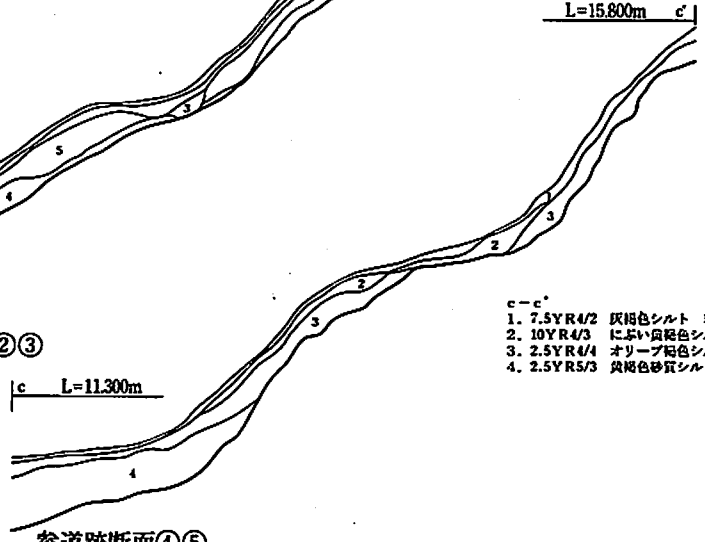


参道跡断面①



b－b'
1. 7.5YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2. 10YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
3. 10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
4. 2.5YR5/4　黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱
5. 7.5YR4/3　褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…なし

参道跡断面②③



c－c'
1. 7.5YR4/2　灰褐色シルト　粘性…なし　しまり…なし
2. 10YR4/3　にぶい黄褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
3. 2.5YR4/4　オリーブ褐色シルト　粘性…なし　しまり…弱
4. 2.5YR5/3　黄褐色砂質シルト　粘性…なし　しまり…弱　灰白色土粒小～中30～40%

参道跡断面④⑤

0　3m

5　出土遺物

（1）出土した土器・陶器・石製品について

土器については、縄文土器の破片が２点出土した。

１点は深鉢で、参道跡トレンチ（８号曲輪）付近の第３層下の黄褐色土より出土した。地文（ＲＬ）の紋様である。

もう１点も深鉢で、（２号曲輪）第２層より出土した。口縁部付近と思われる。

陶磁器については、破片１点が１号土塁盛土より出土した。近世の磁器の碗かと思われる。

石製品については、１／４位の破片１点が８号曲輪の検出面より出土した。これらの遺物はいずれも尾根の南から東にかけての曲輪で見つかっている。

（2）出土した貨幣について

出土した貨幣は全て寛永通寶である。寛永通寶は、江戸時代に用いられた代表的な銭貨で、江戸幕府が寛永13年（1634）に鋳造した新銭で、江戸と近江坂本で寛永通寶銅一文銭の鋳造に踏みきり、さらに翌年には水戸・仙台・吉田・松本・高田・長門・備前・豊後の８か所に鋳銭所を設け、大規模な鋳造を行った。この他の鋳造地も指摘されているが、鋳造高は全体で275万貫文と推定されている。

寛永通寶は日本の年号をもつ良質の銅貨であり、中国銭やその模鋳銭を凌駕すべく作られたわが国独自の銭貨であった。発行と同時に私鋳が禁じられ、以後銭は幕府が許可した銭座において鋳造するのを原則とした。

寛永通寶の鋳造は寛永17年（1640）にいったん停止され、新銭鋳造とともに下落した銭相場は正保年間を底に上昇に転じ、以後銭貨不足の状態が続いた。

これに対し明暦２年～万治２年（1956～59）に江戸で鋳銭が行われたが、特筆すべきは寛文８年～16年間（1626～1634）江戸亀戸で呉服師後藤縫殿助らの請負でおこなわれた寛永通寶の増鋳である。

背面に文の字が鋳込まれた文銭と通称された。鋳造高は197万貫文あるいは213万貫とも言われ、これによって古銭が排除され寛永通寶による銭貨の統一が達成されたと述べている。（兵庫埋蔵調査会1998：ｐ８）

古銭家は、初鋳以来のものを古寛永、寛文の時代以降にできたものを新寛永としている。新寛永は、銭の背面内部に「文」の文字が鋳造されている。ちなみに明治４年（1871）には、旧銅貨と寛永通寶とは500枚が１円に換えられることが定められている。

本遺跡から出土した銭の中には、背面内部に「文」の文字が７つ、「元」の文字が４つ含まれている。古寛永と新寛永の区分は、書体と銭容からも分類が可能で、ポイントは「寛」と「寶」字の大きな相違である。古寛永は「寛」の字の12画と13画の頭が相接し、「寶」字の貝画末尾が「ス」（ス貝寶）である。新寛永は「寛」字の12画と13画の頭が離れ、「寶」字の貝画末尾が「ハ」（ハ貝寶）になっていることがわかったと述べている。（兵庫埋蔵調査会1997：ｐ47）

（3）出土した金属器・鉄滓について

かつて、沢田Ⅱ遺跡からは、三陸縦貫自動車道の路線範囲だけの発掘ではあるが、縄文時代の製鉄、奈良

時代の製鉄・鍛冶工房と集落、中世城館の造成事業が明らかになった。中でも奈良時代の製鉄炉は、上村遺跡に次ぐ２例目の奈良時代の製鉄炉であることがわかったと述べている。

また、隣接する房の沢Ⅳ遺跡から、７・８世紀の古墳群が検出されるなど、鉄生産に関わる集団がこの遺跡を含め、そのころからこの地域で活躍していたことが推測されると述べている。（佐々木清文 1997：p 47）

本遺跡からは、金属器として釘・十手・鉈・銭貨・鉄滓が出土しており、これらは、１号曲輪、１号土坑、１号土塁を中心として発掘されている。

釘については、13 点が１号曲輪、１号土塁から出土しており角釘であった。中世の時代以降に板を打って家や柵などを打つために使ったものではないかと推測される。

十手については、１点が１号曲輪頂部大杉神社跡平場土塁東端部直下（表採）から出土した。この付近の捕吏が落したものかどうか、また、津波により流されたものかどうかはよくわからない。

鉈については、１点で出土地点が不明である。江戸時代に木の伐採に使用したものかどうか、近隣の遺跡でかつて使用されたものかどうか、また、津波等で流されたものかどうかはよくわからない。

銭貨については、47 点が１号、２号、３号、４号、９号曲輪、参道跡、１号土坑、１号土塁から出土した。江戸時代に鋳造されたもので、曲輪を改変して神社を作った際のお賽銭ではないかと考えられる。

鉄滓については、２点出土した。鑑定を依頼していないので、構成鉱物相、成分等の詳細はわからない。いずれも、Ⅱ層からⅢ層にかけての中世の遺構面から出土しているので、中世以前の遺物と推測される。

＜参考文献＞

山田町史編纂委員会（1991）：『山田町史　中巻』山田町教育委員会

山田町津波誌編纂委員会（1982）：『山田町津波誌』山田町教育委員会

斎藤　忠（1998）：『日本考古学用語辞典』学生社

永井久美男（1996）：『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会

永井久美男（1997）：『近世の出土銭Ⅰ』－論考編－兵庫埋蔵銭調査会

永井久美男（1998）：『近世の出土銭Ⅱ』－分類図版編－兵庫埋蔵銭調査会

佐々木清文（1997）：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 268 集（沢田Ⅱ遺跡）

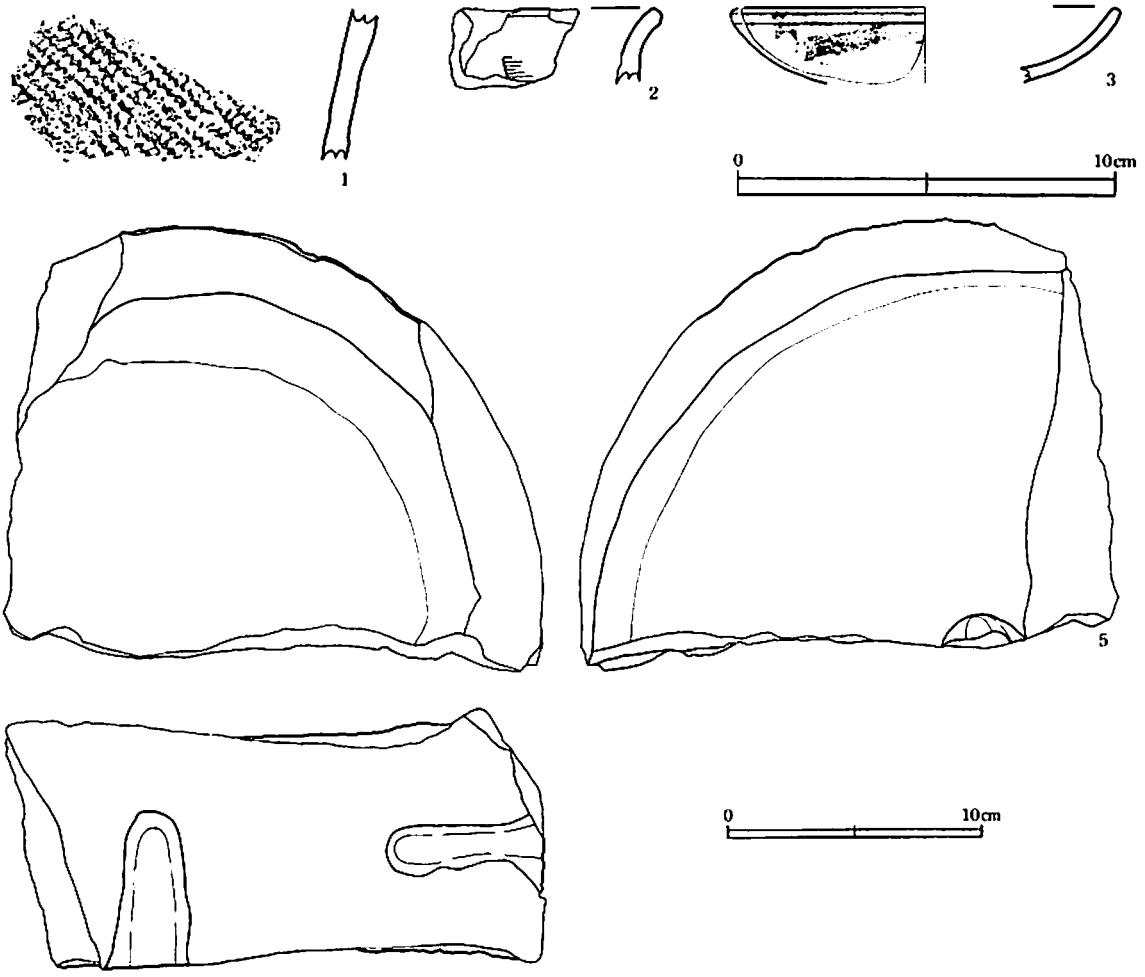
大道篤史・佐藤良和・星雅之・佐々木清文

（1998）：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 287 集（房の沢Ⅳ遺跡）

星　雅之（1997）：現地説明会資料（房の沢Ⅳ遺跡）

渡辺洋一・酒井宗孝・稲垣雅弘

（1995）：岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター調査報告書第 218 集（大畑Ⅰ、Ⅱ遺跡）



第２表　土器観察表

遺物No.	出土地点			器種	備考
	グリッド	出土遺構名	層位		
1	ＶＣ３ｈ	参道跡トレンチ	第３層下	深鉢	地文（ＲＬ）
2	ⅣＣ２ｊ	２号曲輪付近	第２層	深鉢	口縁部

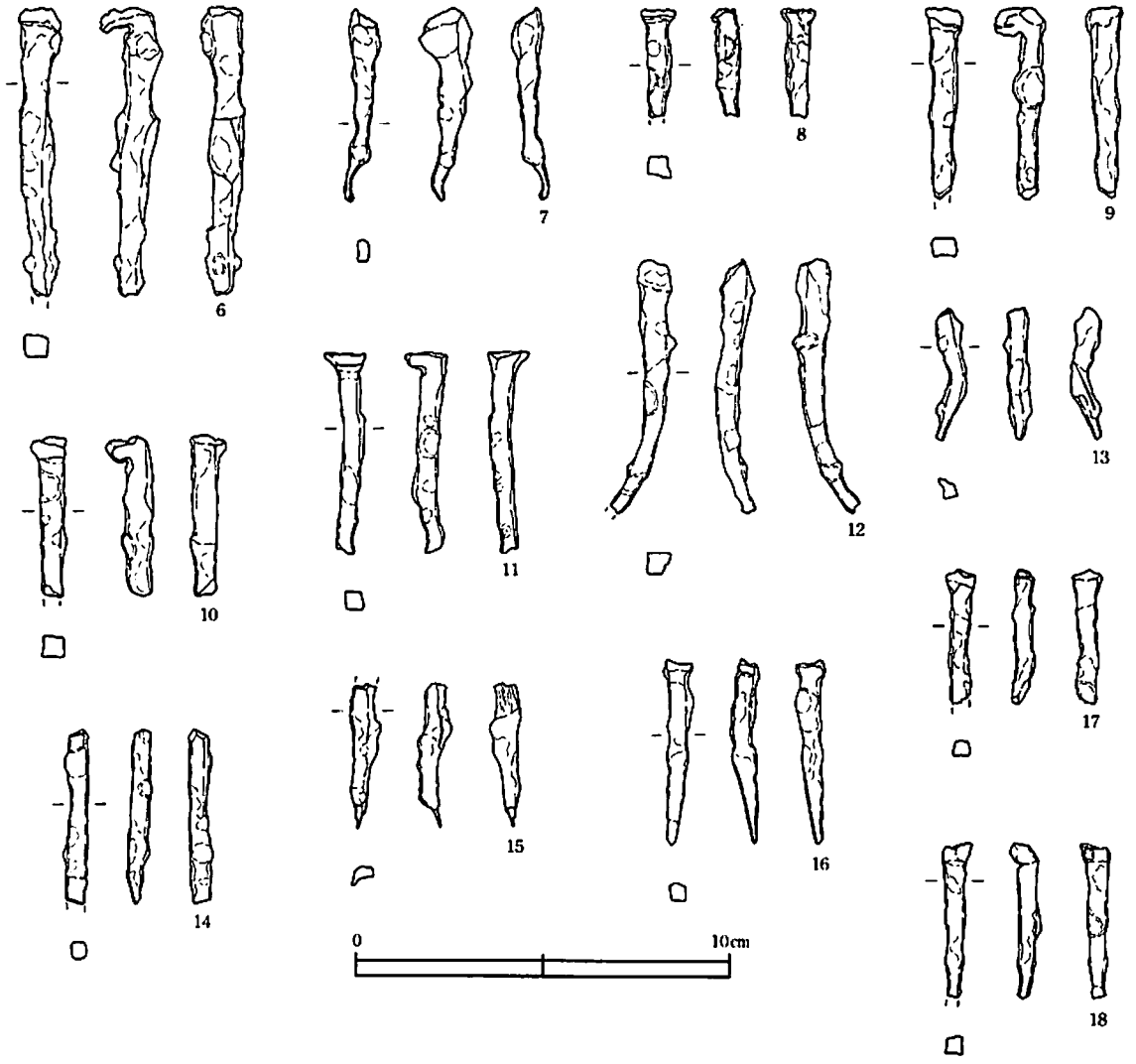
第３表　陶器観察表

遺物No.	器種	出土地点		出土層位	器高（cm）	口径（cm）	底径（cm）	備考
		グリッド	遺構名					
3	皿	ⅣＤ５ｃ	参道	第２層下部	2.0	10.4		１号曲輪下の参道跡

第４表　石製品観察表

遺物No.	種類	出土地点		出土層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
		グリッド	遺構名						
5	石臼	ＶＣ２ｈ	８号曲輪	検出面	17.7	21.25	10.0	3840	砂岩、北上山地

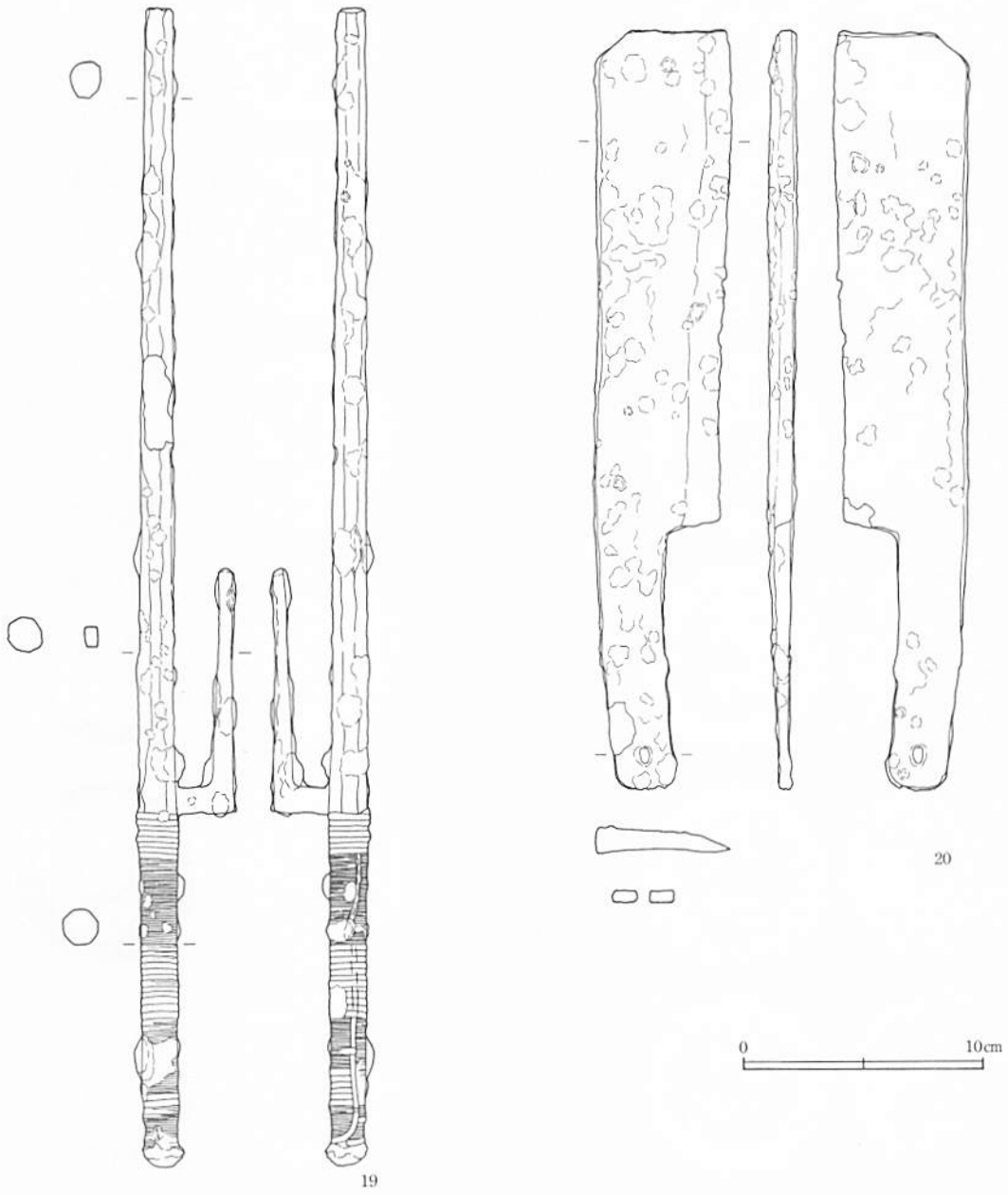
第18図　出土遺物１（土器・陶器・石臼）



第５表　金属器観察表（１）

遺物No.	器種	出土地点		出土層位	部　位	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	材　質	備　　考
		グリッド	遺構名							
6	釘	ⅣD３d	１号土県	盛土		7.70	1.15	11.98	鉄	
7	釘	ⅣD４a	１号曲輪	検出面	完形	5.15	1.00	3.51	鉄	
8	釘	ⅣD４a	１号曲輪	検出面	半形	2.90	0.90	1.75	鉄	
9	釘	ⅣD４a	１号曲輪	検出面		5.10	1.00	6.02	鉄	
10	釘	ⅣD４a	１号曲輪	検出面		4.30	1.00	4.52	鉄	
11	釘	ⅣD４a	１号土県	検出面		5.35	1.10	5.53	鉄	１号曲輪盛土上部との境目
12	釘	ⅣD4a~4b	１号曲輪			6.75	1.70	5.58	鉄	撹乱
13	釘	ⅣD４b	１号曲輪		完形	3.45	0.80	1.73	鉄	撹乱
14	釘	ⅣD４b	１号曲輪			4.65	0.70	3.32	鉄	撹乱
15	釘	ⅣD４b	１号曲輪		完形	3.85	0.85	2.92	鉄	撹乱
16	釘	ⅣD４b	１号曲輪		完形	4.90	0.80	2.19	鉄	撹乱
17	釘	ⅣD４b	１号曲輪			3.55	0.80	2.19	鉄	撹乱
18	釘	ⅣD４b	１号曲輪			4.10	0.80	2.69	鉄	撹乱

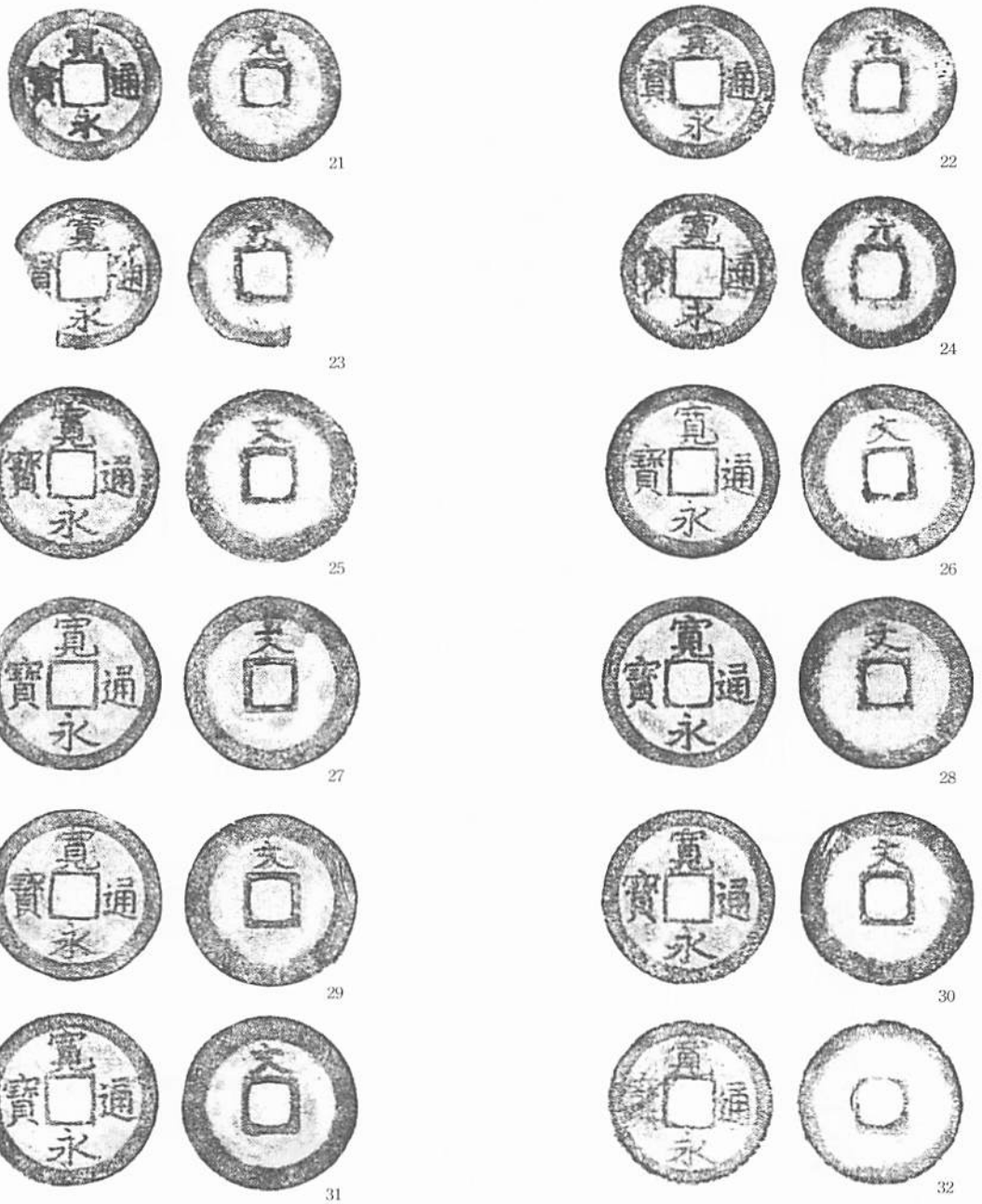
第19図　出土遺物２（鉄製品１）



第５表　金属器観察表（２）

遺物No.	器種	出土地点		出土層位	部　位	長さ(cm)	幅 (cm)	重量(g)	材 質	備　　考
		グリッド	遺 構 名							
19	十手	ⅣＤ４ｄ	１号曲輪	表採	完形	31.7	5.80	647	鉄	頂部大杉神社跡平場東部直下
20	鉈	不明	不明.	不明	完形	48.0	4.35	499	鉄	

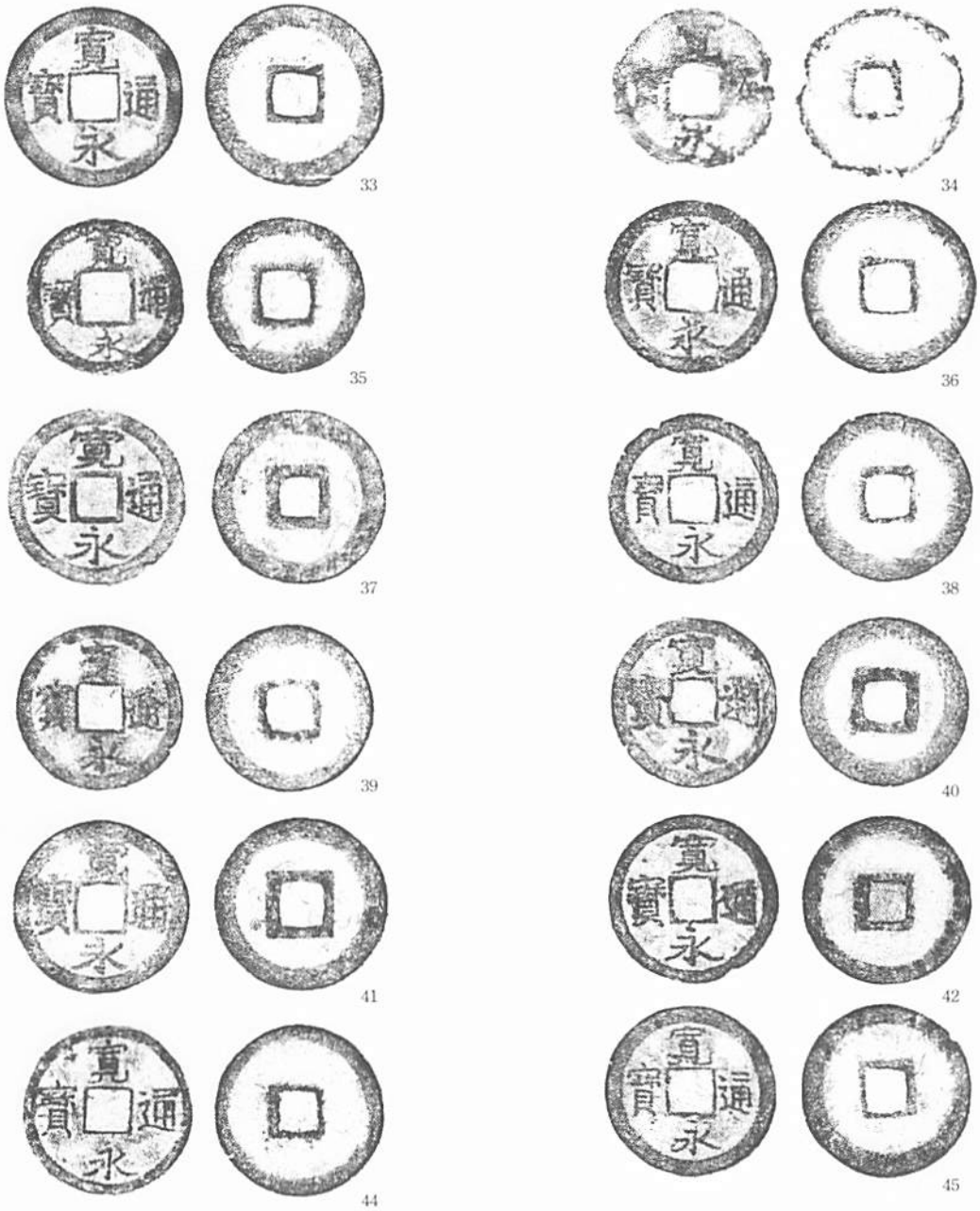
第20図　出土遺物３（鉄製品２）



第６表　銭貨観察表（１）

No.	種　類	グリッド	検出遺構	法量				備　考
				直径（cm）	穿径（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
21	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土坑	2.20	0.60	0.10	2.37	摺乱
22	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土坑	2.20	0.60	0.10	2.67	摺乱
23	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土坑	2.20	0.60	0.10	1.26	摺乱、１／４欠損
24	寛永通寶	ⅣＤ６ｄ	２号曲輪	2.20	0.60	0.10	1.99	
25	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土坑	2.50	0.60	0.10	3.01	摺乱
26	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土坑	2.45	0.60	0.10	3.35	摺乱
27	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土壇	2.50	0.55	0.10	3.46	
28	寛永通寶	ⅣＤ４ｄ	１号土壇	2.50	0.60	0.10	3.63	試掘トレンチ
29	寛永通寶	ⅣＤ６ｃ	２号曲輪	2.50	0.60	0.10	3.32	
30	寛永通寶	ＶＤ４ｃ	２号曲輪	2.50	0.60	0.10	2.94	
31	寛永通寶	不明	４号曲輪	2.50	0.60	0.10	3.13	木根付着
32	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土坑	2.30	0.60	0.10	2.60	摺乱

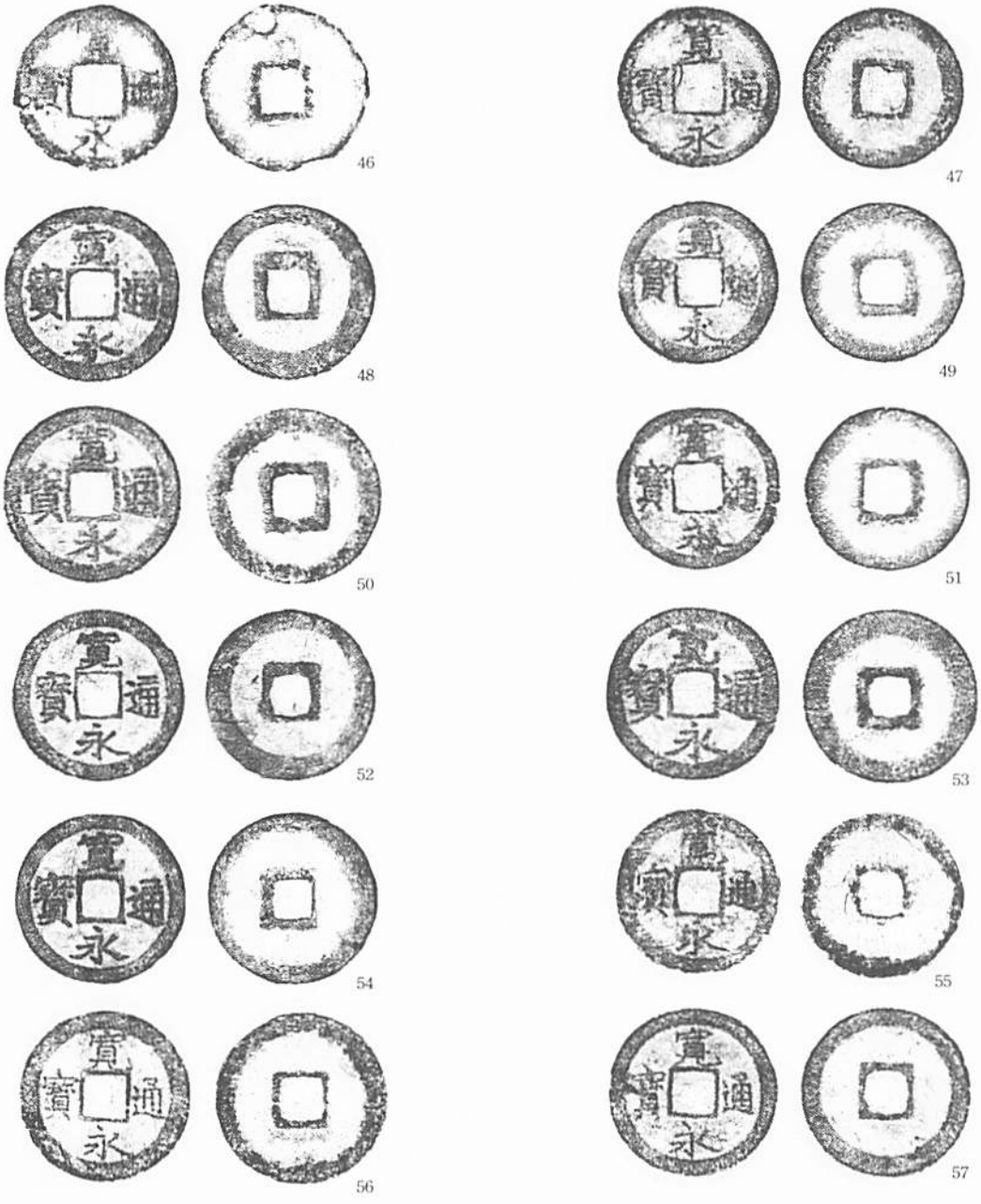
第21図　出土遺物４（銭貨１）



第６表　銭貨観察表（２）

No.	種　類	グリッド	検出遺構	法量				備　考
				直径（cm）	穿径（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
33	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土坑	2.50	0.65	0.10	3.05	撹乱
34	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土坑	2.30	0.60	0.10	2.48	撹乱
35	寛永通寶	ⅣＤ３ａ	１号土壙	2.20	0.70	0.10	1.55	
36	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土壙	2.40	0.60	0.10	3.65	
37	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土壙	2.50	0.55	0.10	3.22	
38	寛永通寶	ⅣＤ４ｂ	１号土壙	2.40	0.60	0.10	2.66	
39	寛永通寶	ⅣＤ５ｃ	１号土壙	2.35	0.60	0.10	3.02	
40	寛永通寶	ⅣＤ５ｃ	１号土壙	2.40	0.60	0.10	2.75	
41	寛永通寶	ⅣＤ５ｃ	１号土壙	2.45	0.60	0.10	2.78	
42	寛永通寶	ＶＤ４ｄ	１号土壙	2.40	0.50	0.10	3.00	
44	寛永通寶	ⅣＤ５ｄ	１号土壙	2.40	0.60	0.10	2.43	
45	寛永通寶	不明	１号土壙	2.40	0.60	0.10	2.48	排土

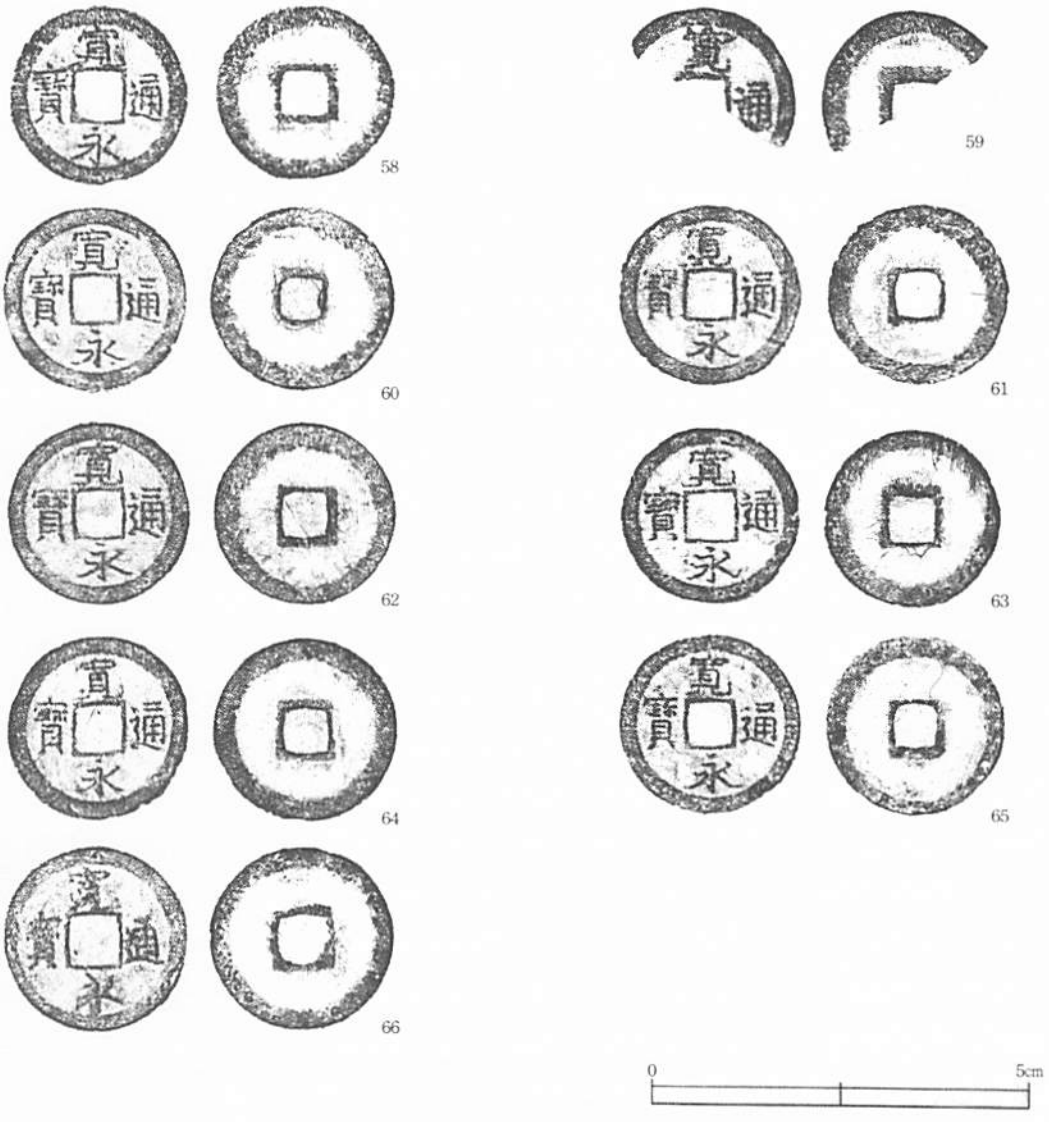
第22図　出土遺物５（銭貨２）



第６表　銭貨観察表（３）

No.	種　類	グリッド	検出遺構	法量				備　考
				直径（cm）	穿径（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
46	寛永通寶	ⅣＣ４ｂ	１号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.88	
47	寛永通寶	ⅣＤ２ａ	２号曲輪	2.30	0.65	0.10	2.12	
48	寛永通寶	ⅣＤ６ａ	２号曲輪	2.45	0.60	0.15	3.10	
49	寛永通寶	ⅣＤ６ｂ	２号曲輪	2.30	0.60	0.10	2.69	
50	寛永通寶	ⅣＤ６ｂ	２号曲輪	2.50	0.60	0.10	3.33	
51	寛永通寶	ⅣＤ６ｃ	２号曲輪	2.30	0.60	0.10	3.34	
52	寛永通寶	ⅣＤ６ｃ	２号曲輪	2.45	0.55	0.10	3.23	
53	寛永通寶	ⅣＤ６ｃ	２号曲輪	2.45	0.55	0.10	3.61	
54	寛永通寶	ⅣＤ８ｃ	２号曲輪	2.40	0.55	0.10	3.61	
55	寛永通寶	ⅣＤ６ｄ	２号曲輪	2.30	0.60	0.10	2.05	
56	寛永通寶	ⅣＤ６ｄ	２号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.35	
57	寛永通寶	ⅣＤ６ｄ	２号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.66	

第23図　出土遺物６（銭貨３）



第６表　銭貨観察表（４）

No.	種　類	グリッド	検出遺構	法量				備　考
				直径（cm）	穿径（cm）	厚さ（cm）	重さ（g）	
58	寛永通寶	ＶＤ２ａ	２号曲輪	2.35	0.60	0.10	2.17	
59	寛永通寶	ＶＤ５ｃ	２号曲輪	2.40		0.10	1.99	半片
60	寛永通寶	ⅣＤ７ｂ	３号曲輪	2.40	0.55	0.10	2.95	
61	寛永通寶	ⅣＤ９ｂ	３号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.83	
62	寛永通寶	ⅣＤ７ｃ	３号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.83	
63	寛永通寶	不明	３号曲輪	2.30	0.60	0.10	2.37	西側トレンチ
64	寛永通寶	不明	４号曲輪	2.40	0.60	0.10	2.89	
65	寛永通寶	ⅣＤ７ｉ	９号曲輪	2.40	0.60	0.10	3.29	
66	寛永通寶	ⅣＤ10ｂ	参道	2.40	0.65	0.10	2.64	

第24図　出土遺物７（銭貨４）

V　まとめ

柳沢Ⅱ遺跡に居城していた人物を探るにあたり、次の文献等を参考にしてみた。

建武元年（1334）２月頃大沢氏の管理していた大沢の牧馬に突然山田六郎なるものが侵入し牧馬を殺害すると言う事件がおこった。犯人は捕まり、追放された。山田六郎の所領のうち飯岡村は、南部又次郎が管理に当たり、関口川の流域の山田村は、だれに管理させたのかは、『大久保昔書翰』によると北畠一族、錦御所の被管と称した白根氏が松山、長沢のほかに関口川上流の関を所領に授かり、二男次郎忠消に分譲したとある。また、関口川下流に山田関屋丸なる者がいて、たぶん竹の御所といわれる三男を養子にやったりして、白根氏とは非常に親密な間柄であったことから、この者が南朝ゆかりの人物であったことは確かである。とすると、関口川流域、山田村が北畠顕家の直轄地あるいは「東奥古伝にいう藤原朝臣某の所領と伺えるに充分である。」と述べている。（下閉伊郡誌）（宮古地方の中世史古城物語）（山田町教育委員会ａ 1991：ｐ 237～ｐ 238）

船越郷土史には、北畠顕家は、「多賀国府、霊山城、宇都峯城、陥りて後正平２年（1347）、顕家の子顕成を船越館に奉じて船越御所と称し、これより三代六十余年間宮方の恢復を図ったが、中央に大兵を進めるに至らず、焦々の間に過ぎた。」とある。これは、南北合一までの正平24年（1369）より元中９年（1393）の24年間のことである。正平２年（1347）には顕成は、10歳か15歳ごろである。これは、顕成70歳死去説と、60歳死去説からでた発想であるが、ここでは70歳死去説が有力となっている。理由は、顕家の正室は、中納言日野資朝の女日野姫であるが子はいない。『関城繹史』の中に「顕家従一位右大臣を追贈さる。又男女子有り、男は顕成という。母は、花山院大納言師賢の女」とある。『西園寺秘本』別説、浪岡右兵衛大夫秀種の女萩の局顕成を産むというものあるが津軽の史家は地方説としてとらない。一説のみで他の立証となるべき文献がないと述べている。（山田町教育委員会ｂ 1991：ｐ 250、ｐ 252）

顕成は70歳生存とすれば元弘２年（1332）生まれで、父顕家の在京中である。母は花山院師賢の女で、顕成は京師で生まれ、京師で育ち公卿の薫育と武士の武道を学んだのではないかとある。文明年間に出版された『大平記理尽抄』によれば正平年中、大和の多武峯で経円義御（児島高徳）玄恵等５人と共に太平記二巻編纂に従ったとある。また、後村上天皇の側近として奉仕し、天皇は正平23年（1368）摂津の住吉行宮では失くなり、長慶天皇が御位につく。弘和３年（1383）長慶天皇は皇位を御弟御亀山天皇に譲り、顕成は北畠家代々の伝統により剃髪したとある。したがって正平年中船越に下向する機会がないことになる。（西園寺秘本）

こうして日増に武家の勢力は強くなり、天皇親政の目あては遠くなり、顕成は、文中２年（1373）暫く難を避け、時の来るのを待った。賢王丸後顕大は元服前である。10歳から15歳の少年であったと思われ、いることこそ39年、焦々の中に南朝の恢復を謀ったが中央に兵を進めることができず男顕元は病弱にして応永２年（1395）８月10日に亡くなり、父顕成は応永９年（1402）８月７日齢古稀になろうとする年に亡くなった。津軽の歴史家は森林助を始め、顕成、顕元御両人は船越の地において亡くなったと思うと、言っている。こうして応永18年（1411）船越御所３代目顕邦の時、藤崎城主安東太郎の招請により、浪岡に移住したとされていることがわかったと述べている。（山田町教育委員会ｃ 1991：ｐ 262～ｐ 263）

以上のことから、北畠一族が東北に進出し、この山田町にもかつては居城していたということは明らかである。山田町内の遺跡は、岩手県埋蔵文化材包蔵地一覧（岩手県教育委員会）によると平成９年４月現在で165箇所登録されている。昭和59年に確認した城館跡の遺跡では、豊間根家任、佐藤義忠、北畠顕成、大沢氏、飯岡氏、船越氏、山田関屋丸（東奥古伝）、安倍宜任、安倍隆任、福士床次郎定保、山田六郎、田村氏、内藤氏、佐々木（荒川）氏、船越氏、安倍七郎孝任、安倍邑任等が文献などでわかっている。上記人物が柳沢Ⅱ遺跡と関わりがあると考えられるが、はっきりした証拠がなく、本遺跡の館主をはっきりと言及するには至らなかった。

当埋蔵文化財センターでは、平成２年以来国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査に伴う遺跡発掘を行ってきている。そして、そのほとんどは縄文時代の遺跡が多く、中世の発掘は少ない。

１　柳沢Ⅱ遺跡の年代観と性格

今回の発掘調査を行った結果、尾根全体の約３分の１ほどの調査であったが、山頂と尾根の地形改変が行われた曲輪、切岸、土塁などの中世城館に伴う遺構が確認された。関連する時期の出土遺物がほとんどなく、文献等も乏しく、館主は確定できなかった。江戸時代に曲輪を改変しながら参道を作り、大杉神社が作られた。頂上部から参道跡にかけては銭が見つかっている。寛永通寶２期～３期にかけての銅銭であり、17世紀後半から18世紀後半にかけてのものであることがわかった。当城館跡のように、城主名を伝承しない小集落に伴う小規模な城館跡は、そこに居住する集落民が非常時に使用する逃げ城的な要害としての側面も見えてくる。また、太平洋の海岸線に面していることから、潮の干満や津波による潮位の変化、季節の天気状況にも左右される面が大きかったことも考えられる。今後、このような小規模な中世城館跡の歴史的な背景や意義を踏まえ、地域においてどのような役割を果たしてきたかを考えるためには、近隣の新たな遺跡発掘調査が行われることで、本遺跡と関わることが明らかになってくると思われる。

＜参考文献＞

山田町史編纂委員会（1991）：『山田町史　中巻』山田町教育委員会

Ⅵ　分析・鑑定

１　柳沢Ⅱ遺跡出土炭化材樹種

早坂松次郎　「木炭協会」

資料は、１点である。炭化材は、１号曲輪埋土盛土下部、グリッド名は、ⅣＤ５ｄの地点から出土された用途不明の炭化材である。遺跡は、14世紀から15世紀後半を中心とした時代の館跡（山城）とされ、太平洋岸に張り出した尾根上（標高約52ｍ）に立地している。鑑定の結果、マツと同定された。

写真図版

写真図版１　遺跡遠景

完掘（西から）

完掘（南西から）

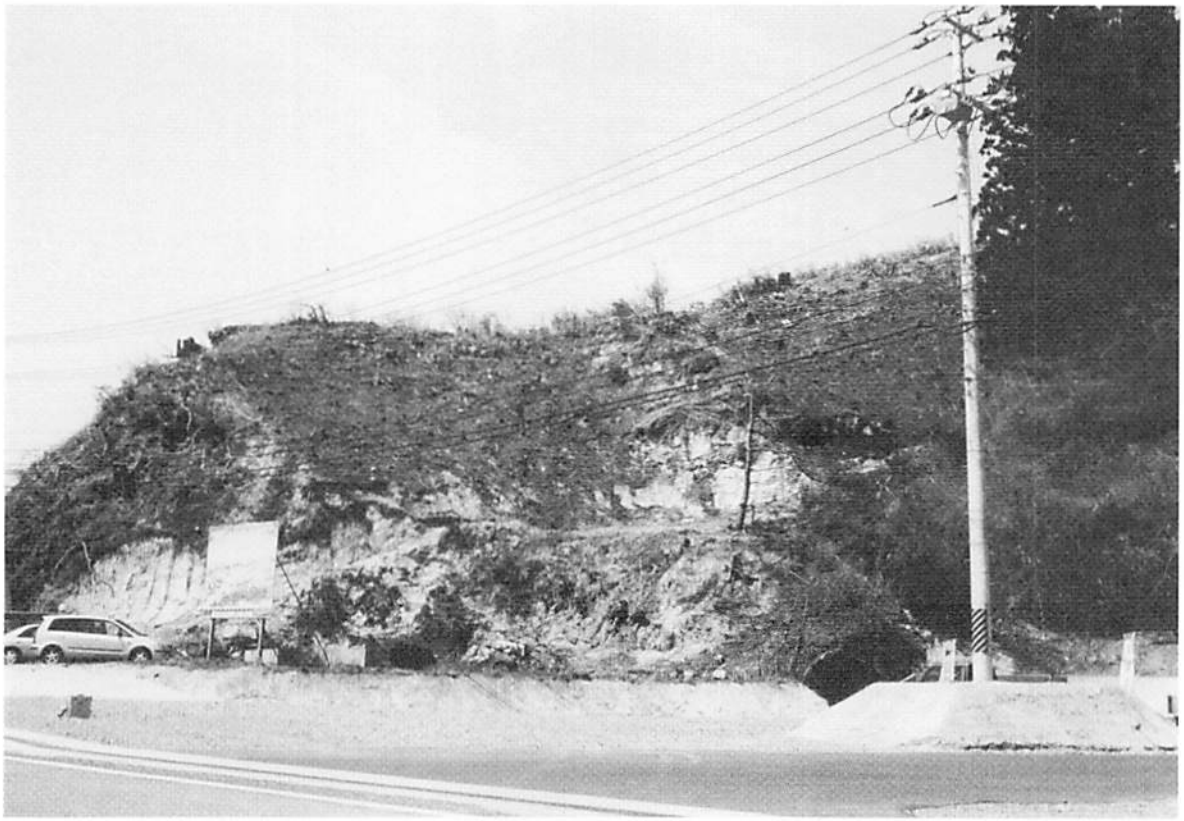
写真図版２　空中写真（１）

完掘（東から）

完掘（南東から）

写真図版３　空中写真（２）

調査前風景現況（南から）



調査前風景現況（北東から）

写真図版４　調査前風景

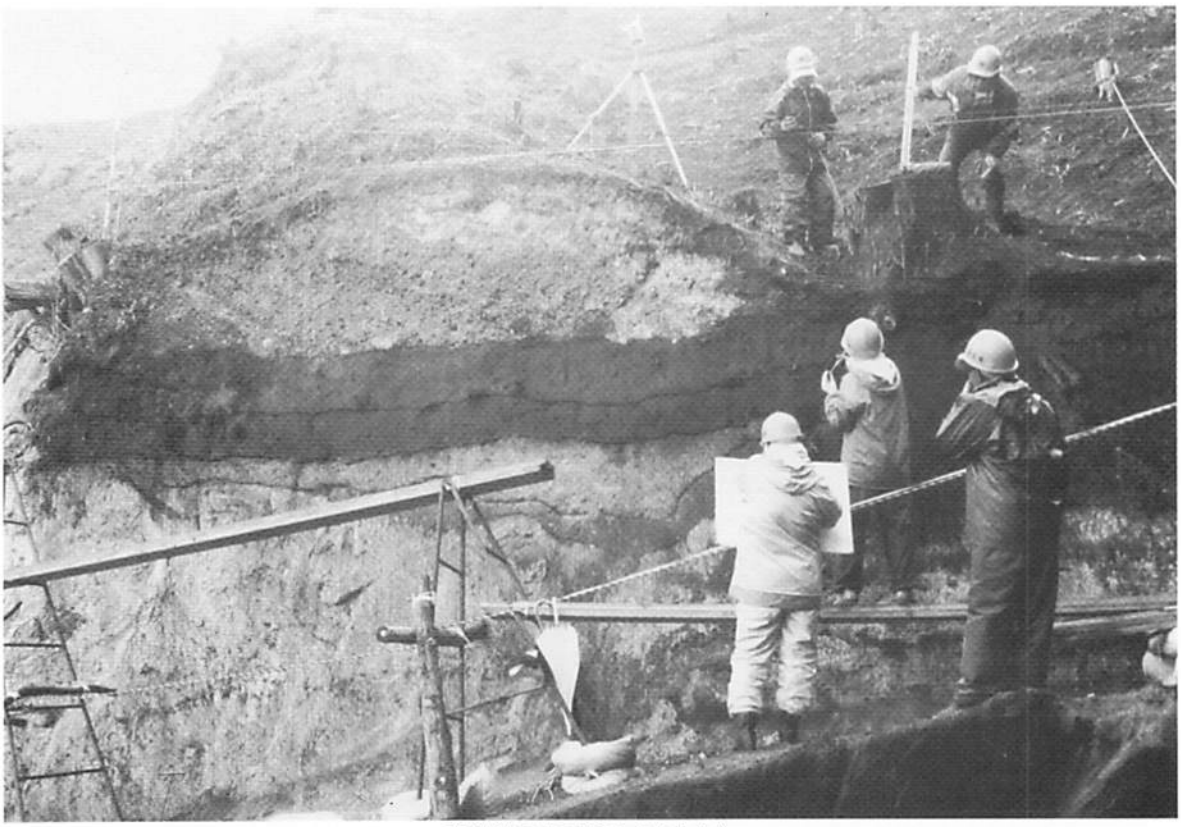
東側斜面作業風景雑物撤去（東から）

作業風景雑物撤去（南西から）

２号切岸断面（南から）

写真図版５　作業風景・２号切岸

東側斜面土塁断面（東から）



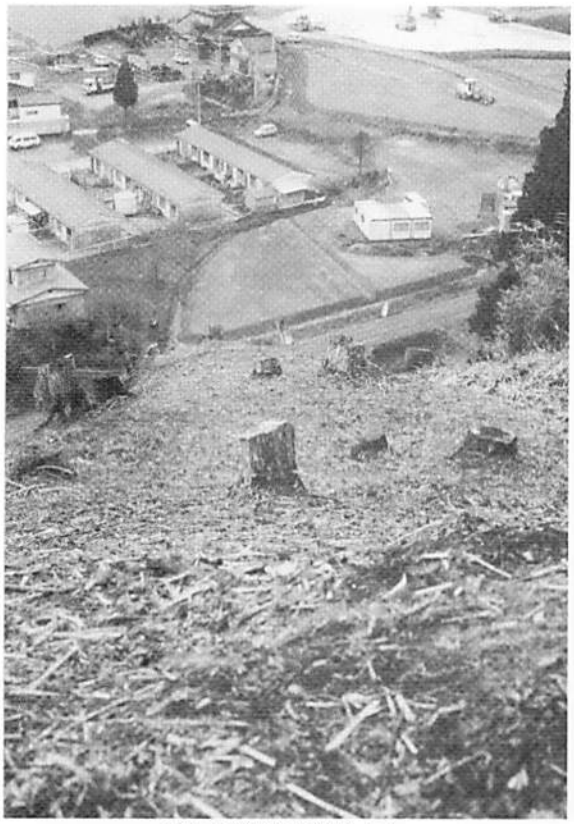
東側斜面土塁断面（東から）

写真図版６　東側斜面土塁

1号曲輪現況（東から）

1号曲輪完掘（東から）

写真図版7　1号曲輪



２号曲輪現況（東から）

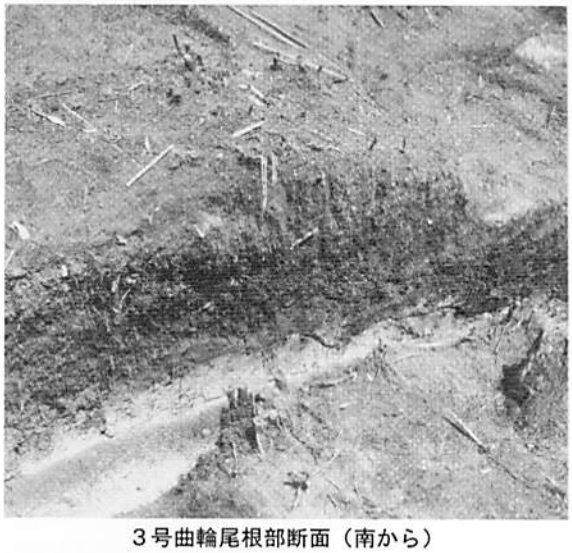
２号曲輪完掘（東から）

２号曲輪断面（南から）

写真図版８　２号曲輪

3号曲輪現況（南東から）

3号曲輪完掘（東から）



3号曲輪尾根部断面（南から）

3号曲輪断面（西から）

3号曲輪東斜面断面（南から）

写真図版９　３号曲輪

4・5・6号曲輪現況（北西から）

4号曲輪断面（西から）

4号曲輪完掘（北から）

写真図版10　4・5・6号曲輪（1）

５号曲輪断面（西から）

５号曲輪完掘（西から）

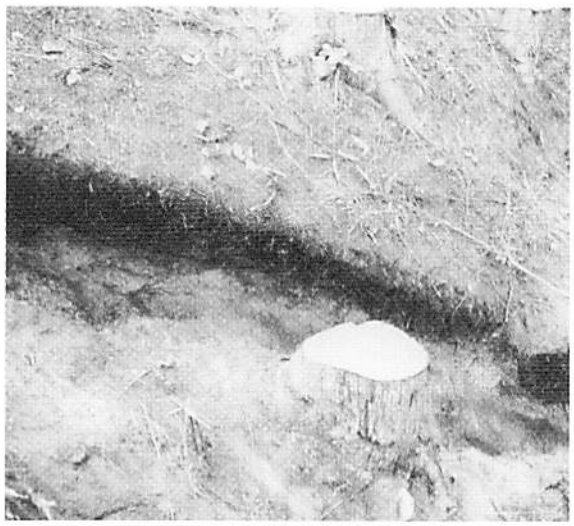
６号曲輪断面（南から）

６号曲輪断面（西から）

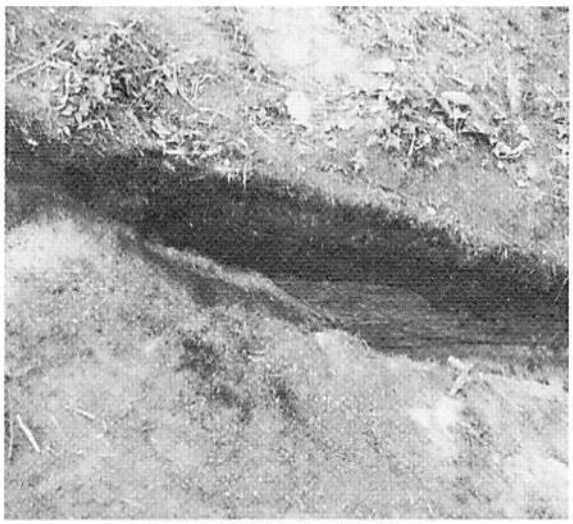
６号曲輪断面（西から）

写真図版11　４・５・６号曲輪（２）

6号曲輪東側斜面断面（南から）



6号曲輪東側斜面断面（南から）



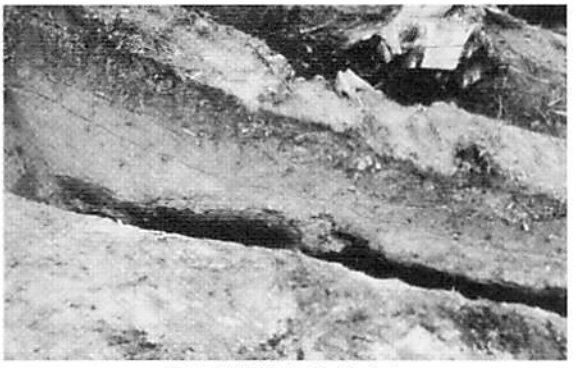
6号曲輪東側斜面断面（南から）

6号曲輪東側斜面断面（南から）

6号曲輪完掘（北から）

写真図版12　4・5・6号曲輪（3）

7号曲輪現況（北から）



7号曲輪断面（西から）

7号曲輪断面（西から）

7号曲輪断面（西から）

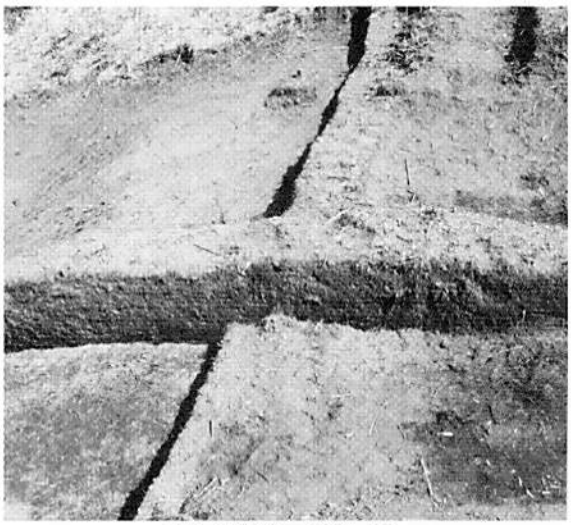
7号曲輪断面（西から）

7号曲輪東部断面（南から）

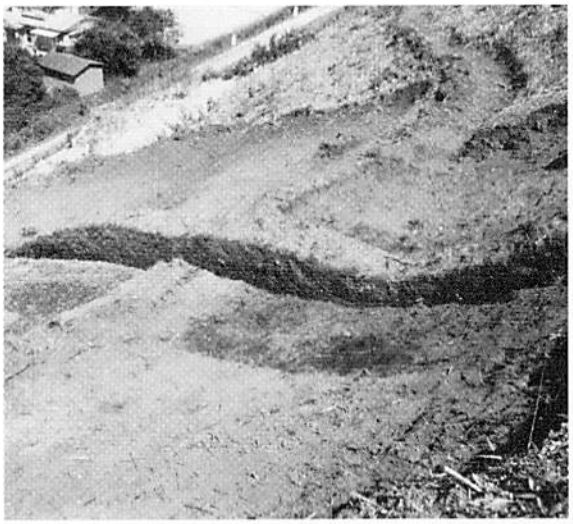
7号曲輪完掘（北から）

写真図版13　7号曲輪

８号曲輪現況（南から）

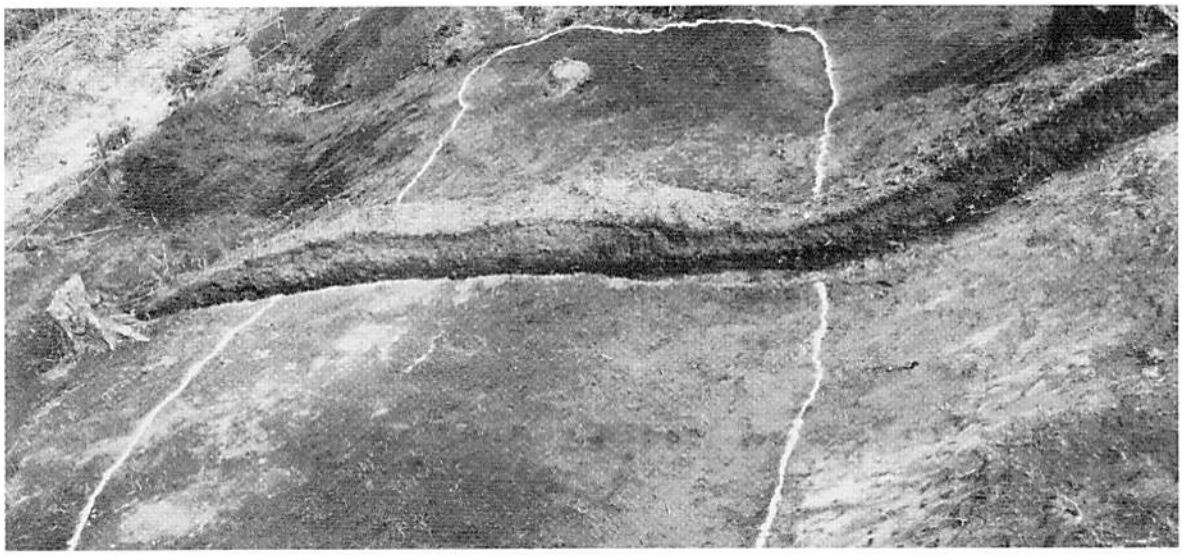


８号曲輪断面（南から）



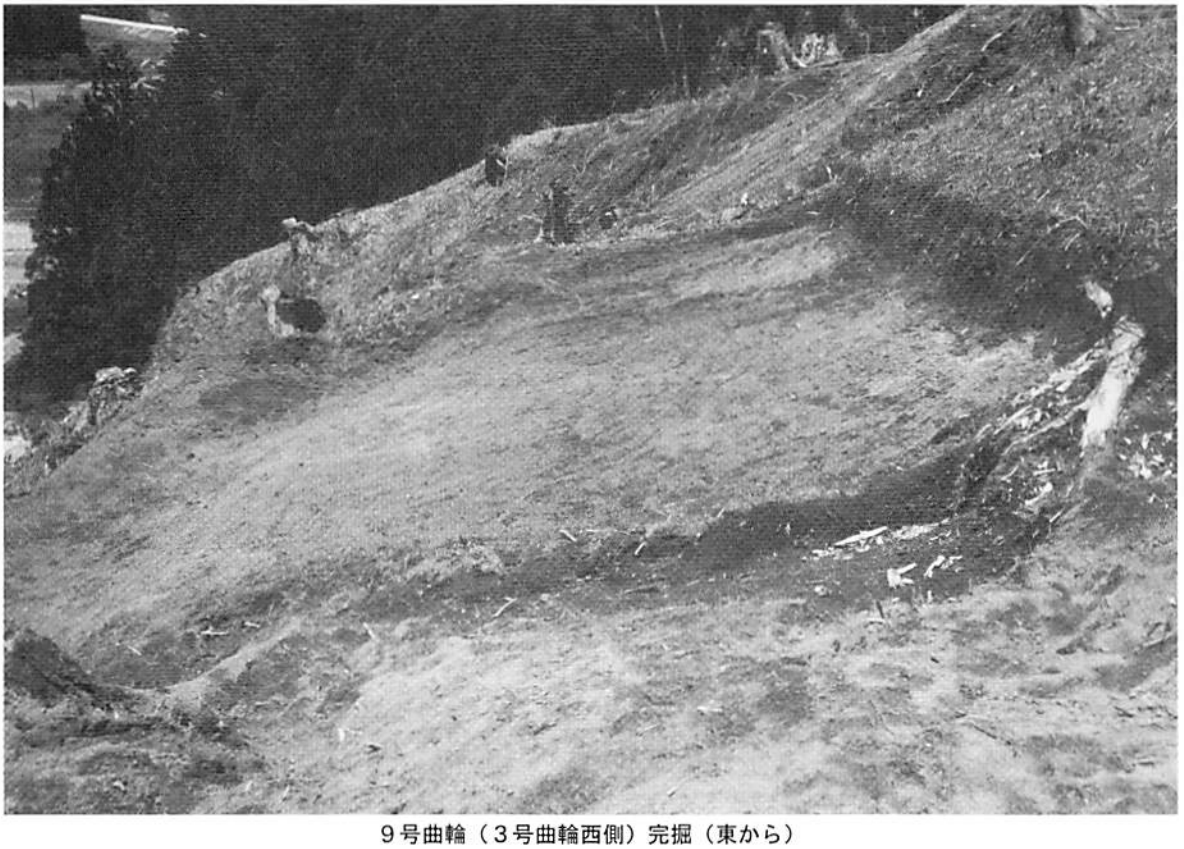
８号曲輪断面（南から）

８号曲輪完掘（南から）

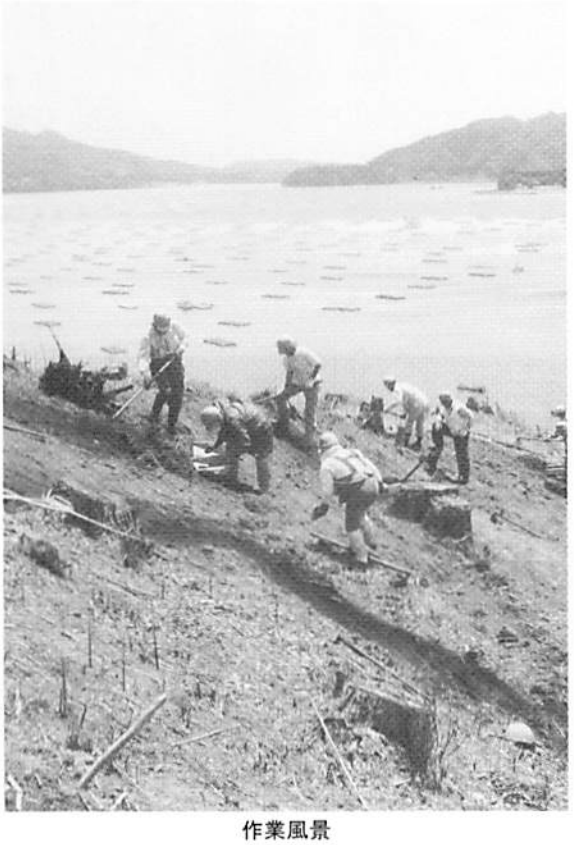


８号曲輪完掘（南から）

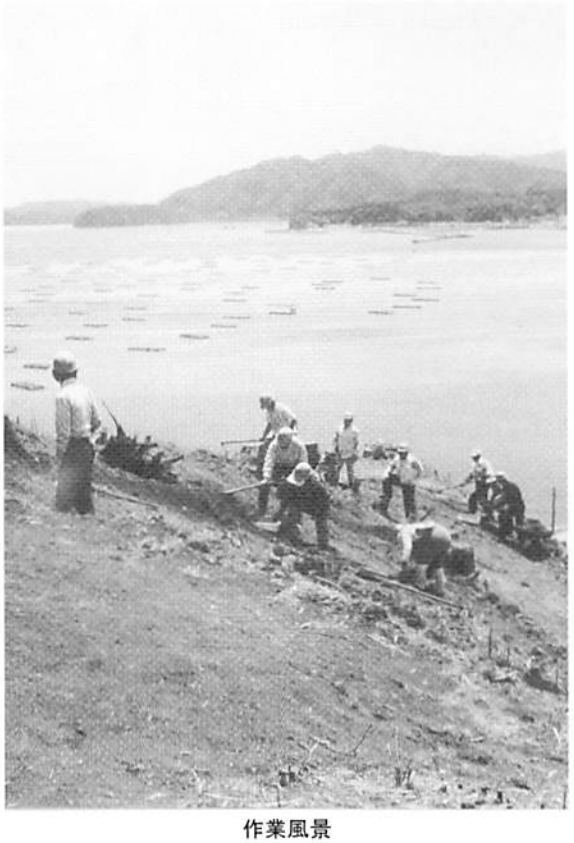
写真図版14　８号曲輪



9号曲輪（3号曲輪西側）完掘（東から）

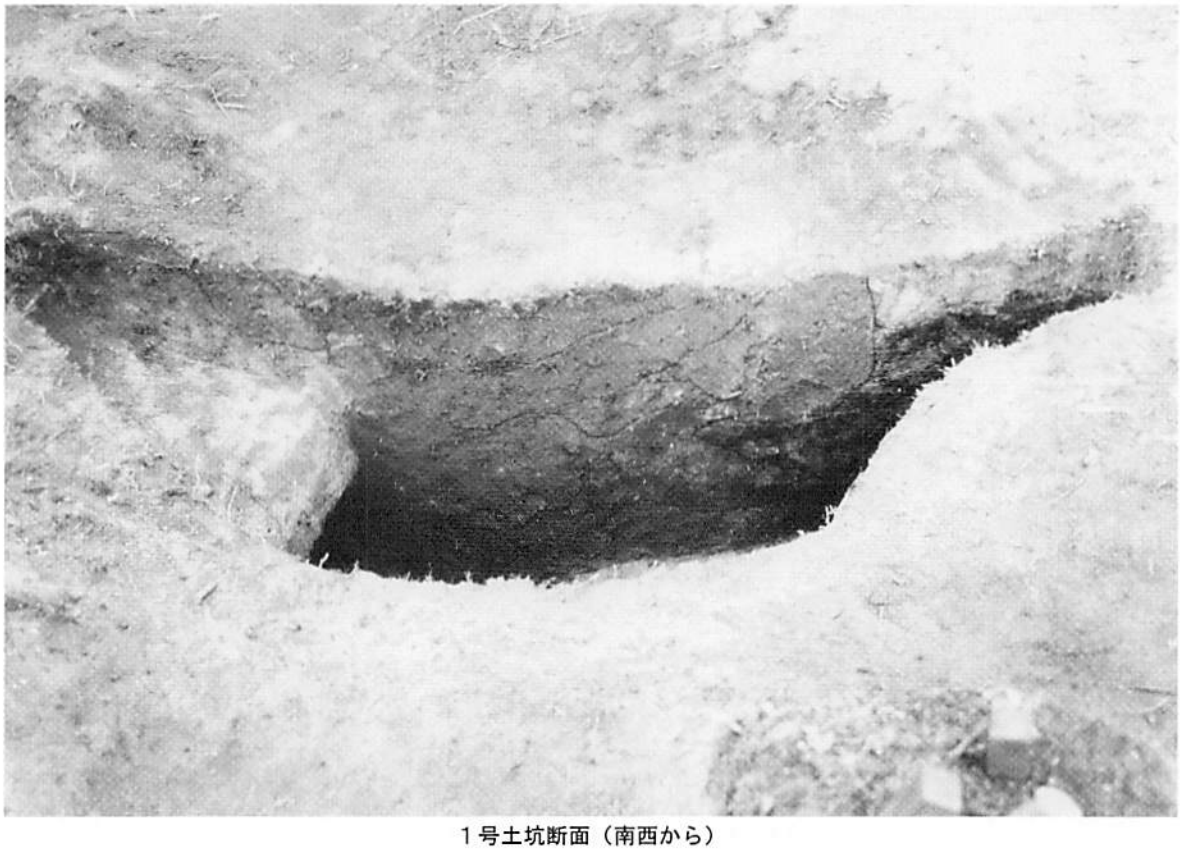


作業風景

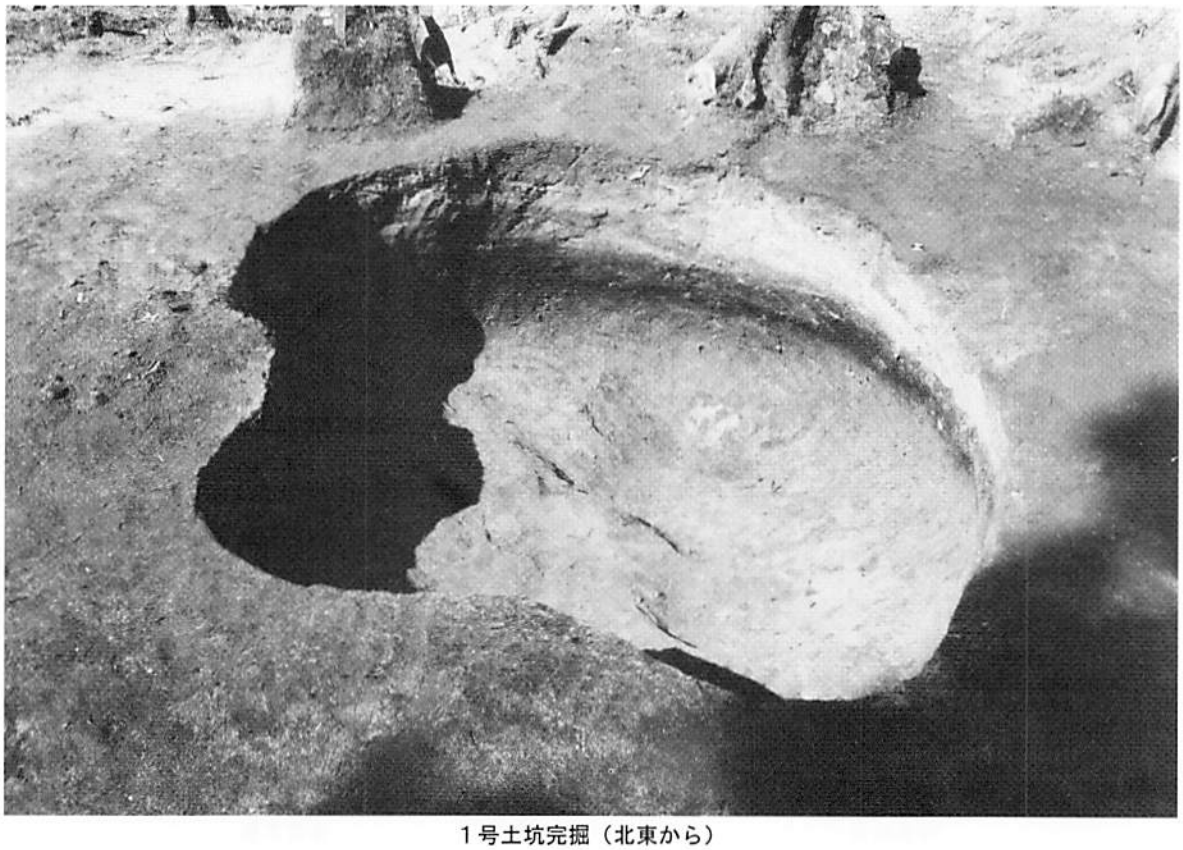


作業風景

写真図版15　9号曲輪・作業風景



1号土坑断面（南西から）



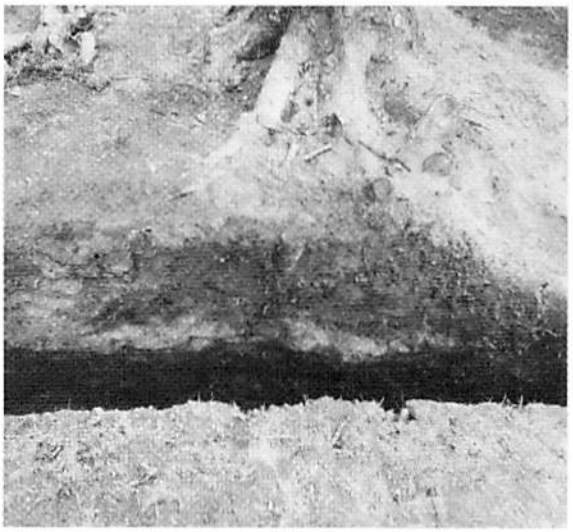
1号土坑完掘（北東から）

写真図版16　1号土坑

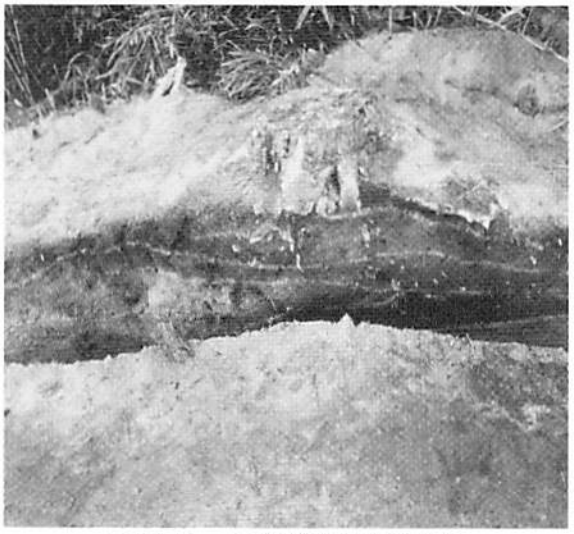
銭出土状況（南東から）

鉄製品出土状況

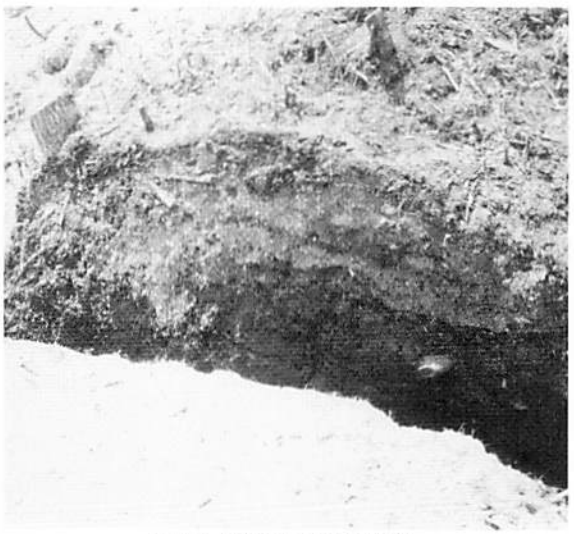
１号土塁断面（１号曲輪含）（西から）



１号土塁・１号曲輪断面（北東から）



１号土塁・１号曲輪断面（東から）



２号土塁断面（斜面中腹）

写真図版17　遺物出土状況・１号土塁・２号土塁

大杉神社参道跡現況（南から）

大杉神社参道跡現況（南から）

大杉神社参道跡現況（南から）

参道跡断面①（西から）

参道跡断面①（西から）

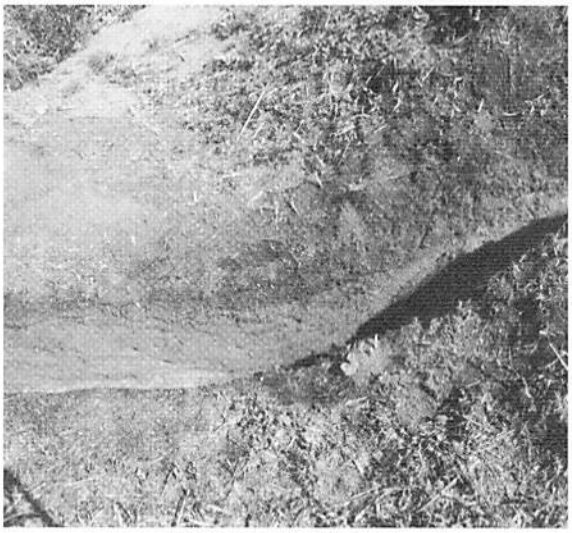
参道跡断面①（西から）

写真図版18　大杉神社参道跡（１）

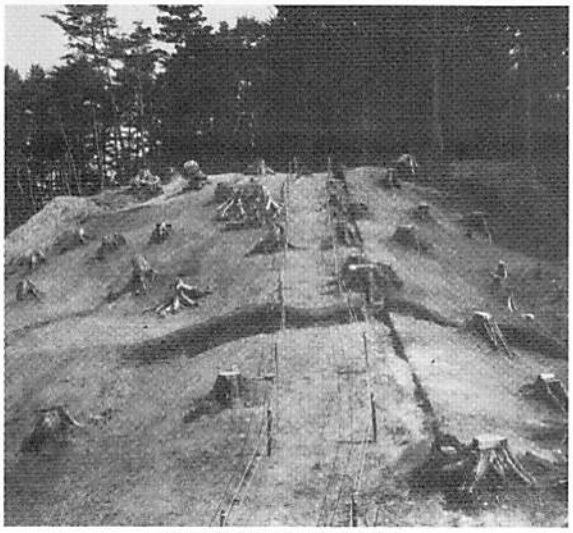
参道跡断面②（南から）

参道跡断面③（南から）

参道跡断面④（南から）



参道跡断面⑤（南から）



頂部全景完掘（南から）

頂部全景完掘（南から）

写真図版19　大杉神社参道跡（２）

北端部堀切（北側）現況（東から）

北端部堀切（北側）現況（東から）

主郭北側現況（西から）

主郭部分現況（東から）

主郭西側曲輪（主郭直下）現況（北東から）

写真図版20　調査区外曲輪群（１）

西側尾根曲輪現況（東から）

西側尾根曲輪現況（東から）

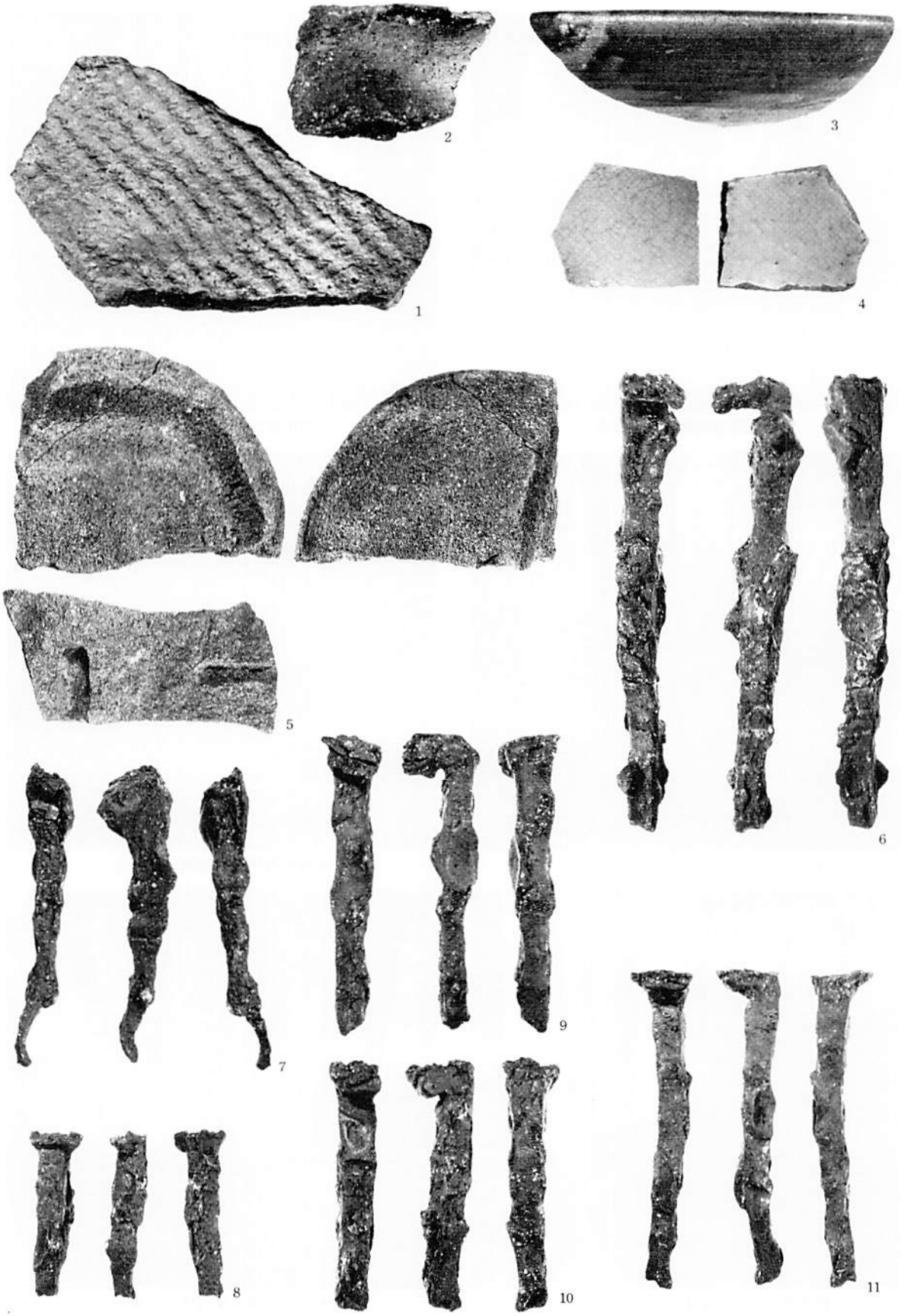
西側尾根西端曲輪現況（南東から）

西側尾根南西端帯曲輪現況（西から）

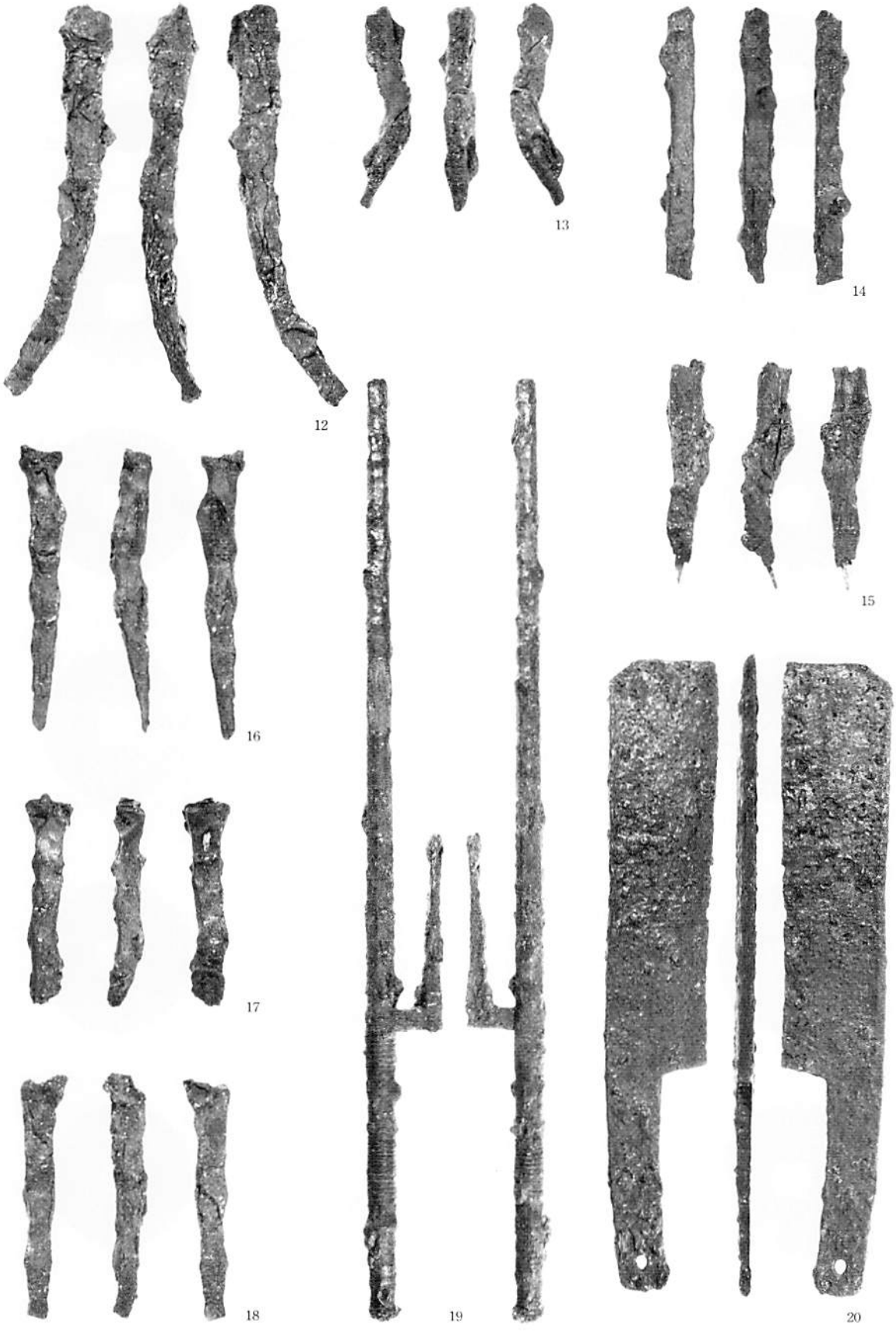
東側斜面奥帯曲輪群現況（南西から）

頂部直下（東側）南端現況（西から）

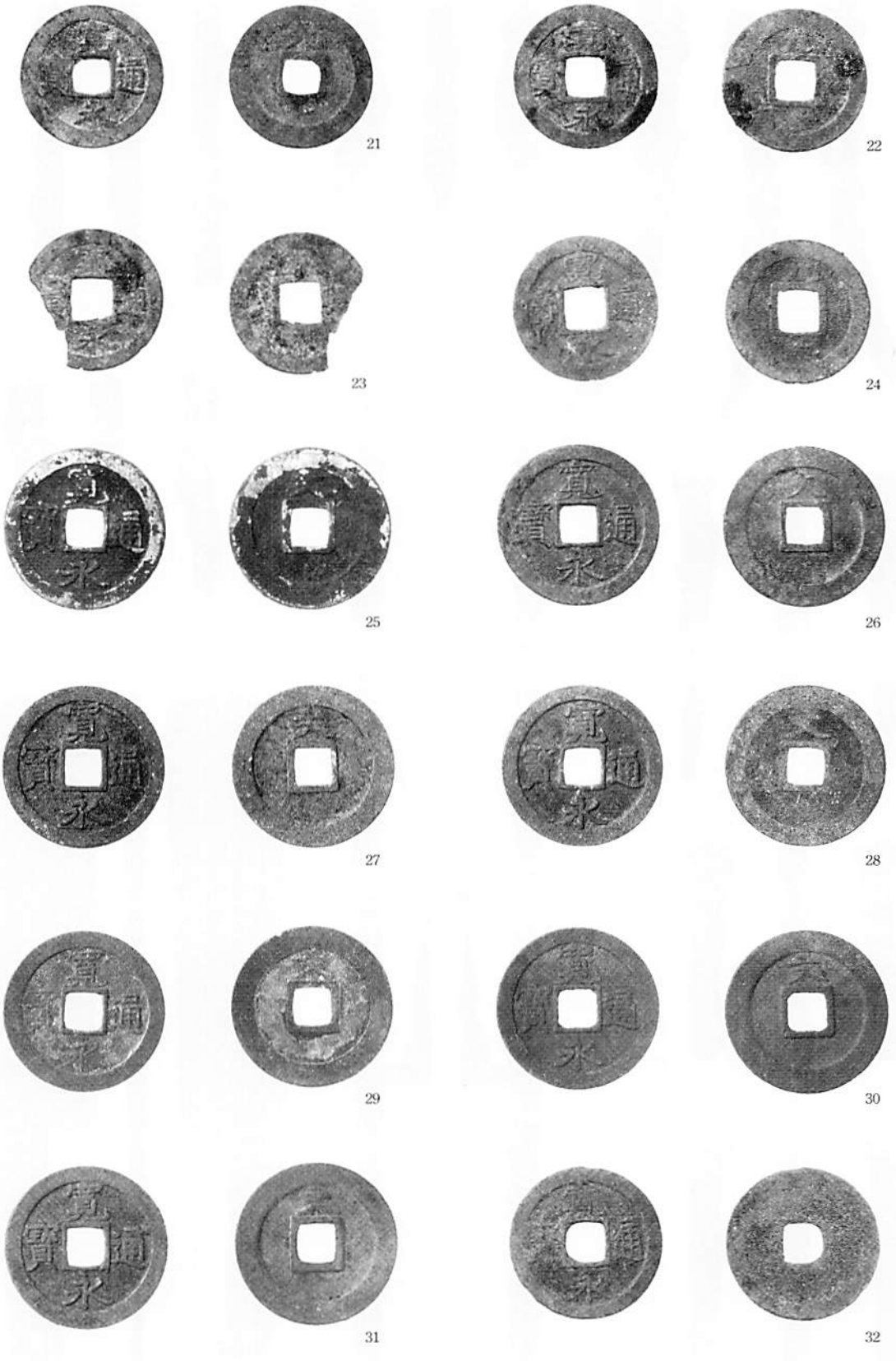
写真図版21　調査区外曲輪群（２）



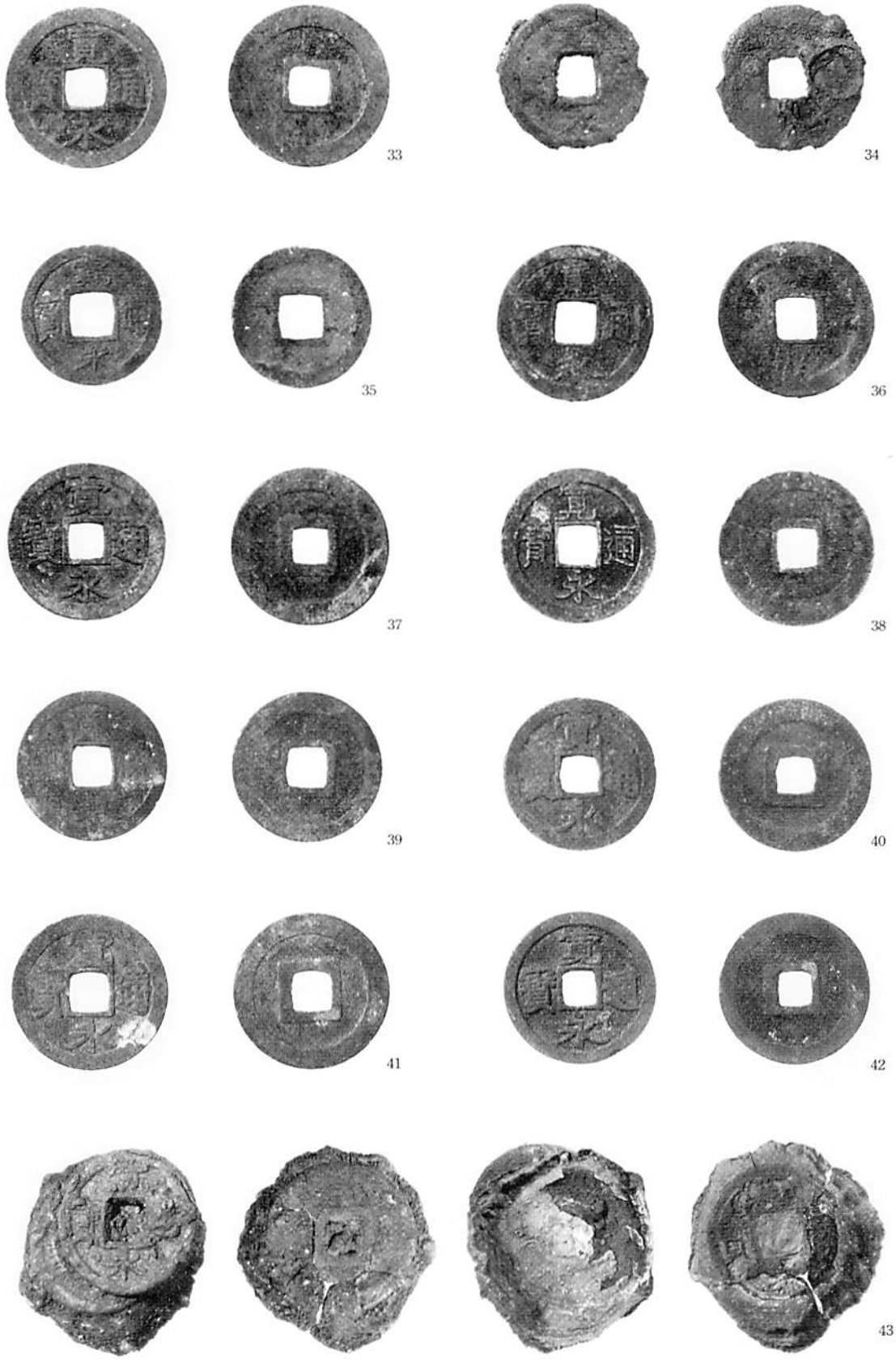
写真図版22　出土遺物１（縄文土器・陶器・石臼・鉄製品１）



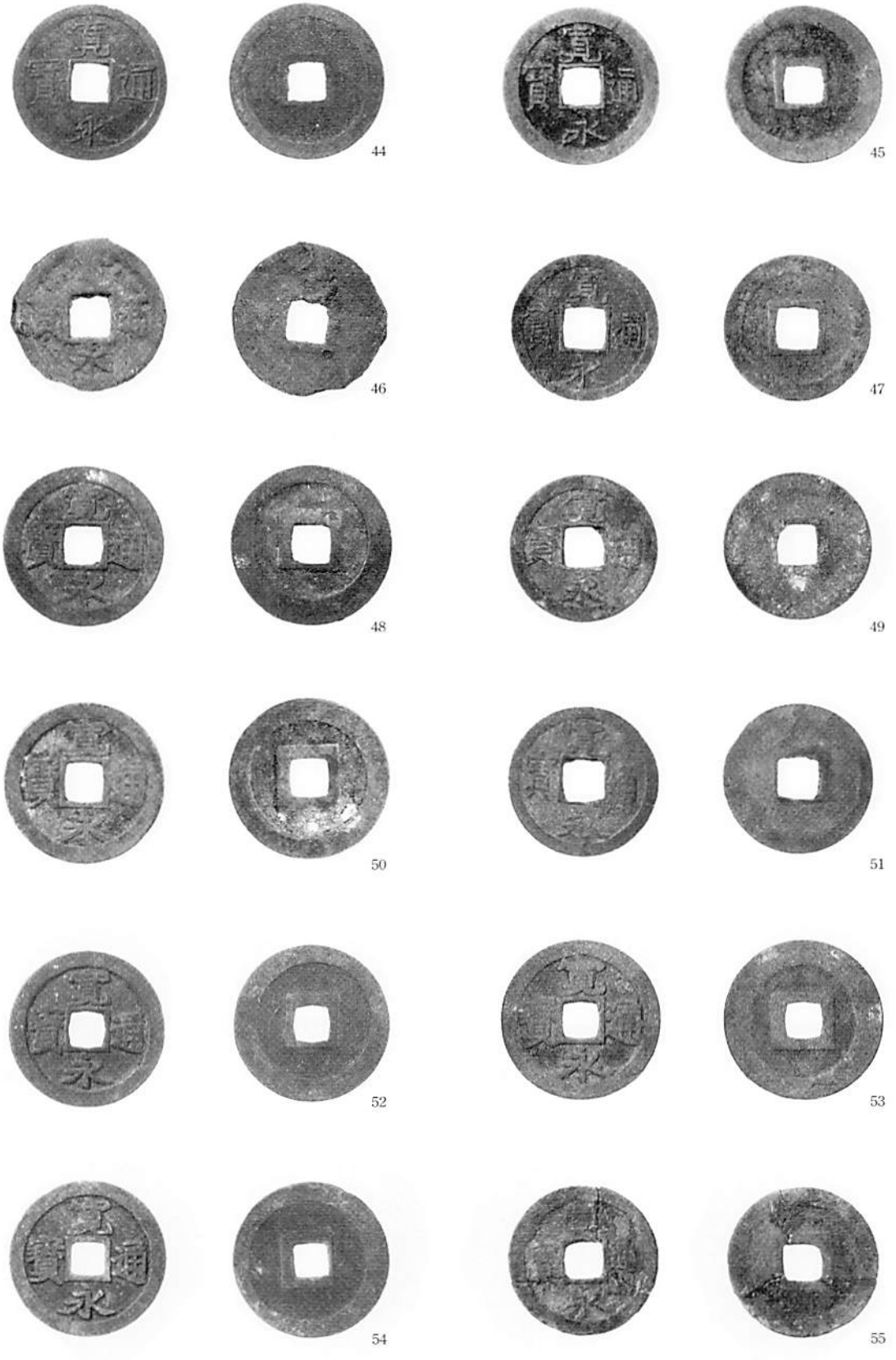
写真図版23　出土遺物２（鉄製品２）



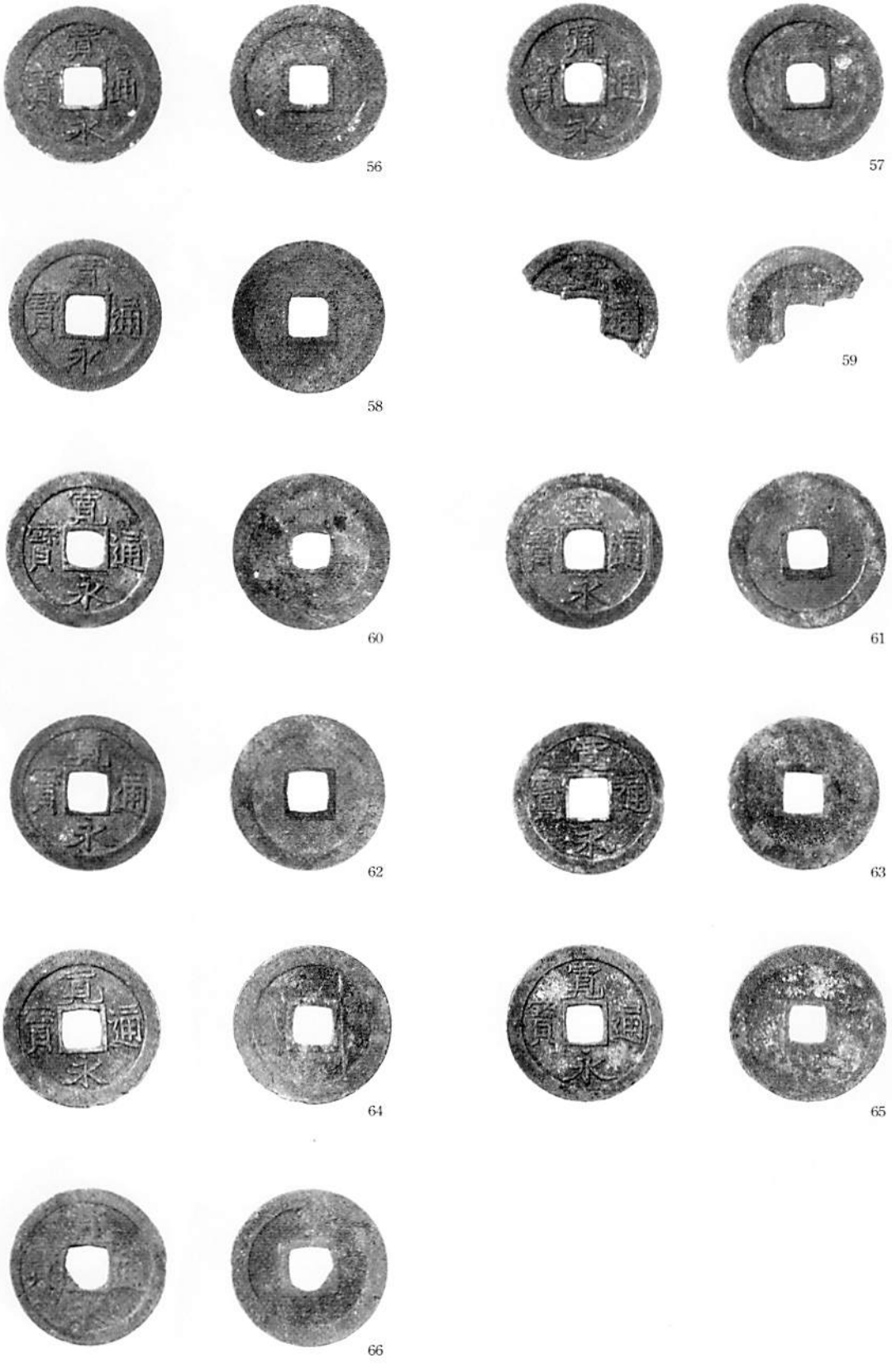
写真図版24　出土遺物３（銭貨１）



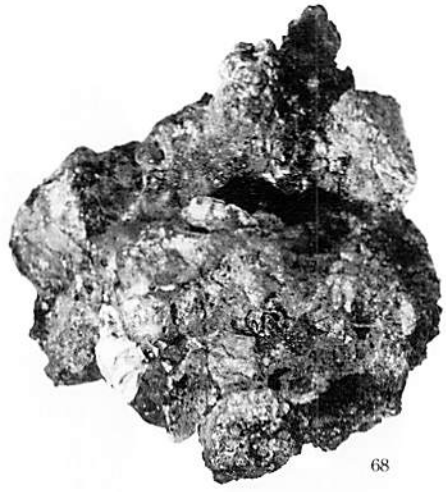
写真図版25　出土遺物４（銭貨２）



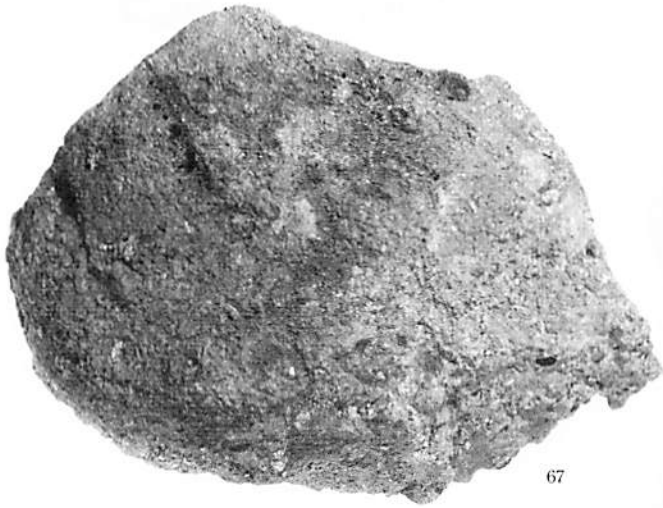
写真図版26　出土遺物５（銭貨３）



写真図版27　出土遺物６（銭貨４）



68



67

69

写真図版28　出土遺物７（鉄滓、骨）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	やなぎさわにいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	柳沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書
事 業 名	国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査
巻 次	
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書
シリーズ番号	第401集
編著者名	阿部 徹
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
所 在 地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185 TEL 019−638−9001
発行年月日	西暦2002年12月26日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
やなぎさわにいせき 柳沢Ⅱ遺跡	いわてけんしもへいぐん 岩手県下閉伊郡 やまだちょうやまだ 山田町山田 だい1ちわり11ばん 第1地割11番 15ほか 15他	03482	0079	39度 28分 26秒	141度 57分 37秒	2001.04.17 ～ 2001.07.31	8,400㎡	国道45号 山田道路 建設工事 に伴う緊 急発掘調 査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柳沢Ⅱ遺跡	城館跡	中世	曲輪 9箇所 切岸 2箇所 土坑 1基 土塁 1基	縄文土器、陶器、石臼、骨、 十手、舵、釘、古銭	縄文土器・石器が 出土した遺物包含層 中世の曲輪・切岸 江戸時代後期の参道

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員名簿

所長　木村　昇

〔管理課〕

課長	韮沢正吾
課長補佐	山崎善光
〃	山岸直美
主査	中嶋賢一

〔調査第一課〕

課長	佐々木勝
課長補佐	佐々木清文
〃	高橋義介
文化財専門員	小山内透
文化財調査員	吉田充
〃	亀大二郎
〃	佐々木信一
〃	早坂淳
〃	小松則也
〃	金野進
〃	野中真盛
〃	金子昭彦
〃	阿部孝明
〃	阿部勝則
〃	羽柴直人
〃	高木晃
〃	長村克稔
〃	星幸文
〃	杉沢昭太郎
〃	村上拓
〃	本多準一郎
〃	青山紀和
〃	西澤正晴
〃	村木敬
〃	福島正和
〃	北村忠昭
〃	八木勝枝
〃	米田寛
〃	丸山浩治
〃	北田勲
〃	島原弘征
〃	中村絵美
期限付調査員	坂部恵造
〃	畏地剛
〃	玉山健一
〃	吉田真由美
〃	小林弘卓
〃	木村ひかり
〃	藤原大輔
〃	川又晋
〃	太田代一彦
〃	江藤敦
〃	立花公志

副所長　高橋正儀

嘱託	高橋照雄
〃	加藤美代子
〃	湯沢邦子
〃	伊藤滋子

〔調査第二課〕

課長	高橋與右衛門
課長補佐	中川重紀
文化財専門員	金子佐知子
文化財調査員	赤石登
〃	阿部眞澄
〃	飯坂一重
〃	鈴木裕明
〃	久慈泰彦
〃	濱田宏
〃	安藤由紀夫
〃	星雅之
〃	佐藤淳一
〃	半澤武彦
〃	皆川英香
〃	溜浩二郎
〃	丸山直美
期限付調査員	齋藤麻紀子
〃	吉田里和
〃	菊池賢
〃	立花裕
〃	駒木野智寛
〃	原美津子
〃	石崎高臣

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第401集

柳沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書

国道45号山田道路建設関連遺跡発掘調査

印刷　平成14年12月13日
発行　平成14年12月26日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853　岩手県盛岡市下飯岡11－185
TEL　(019) 638－9001
FAX　(019) 638－8563

印　刷　有限会社　内　海　印　刷
盛岡営業所　〒020-0875 岩手県盛岡市消水町８－８－108
TEL　(019) 622－0288
本　社　〒026-0041 岩手県釜石市上中島町４－２－４
TEL　(0193) 23－5511

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002